

令和元年度 令和2年度 文部科学省

「これからの時代に求められる資質・能力を育むためのカリキュラム・マネジメントの在り方に関する調査研究」



カリキュラム・マネジメント実践報告書

令和3年3月
京都市教育委員会

目 次

はじめに	1
1 カリキュラム・マネジメントとは	2
2 「主体的・対話的で深い学び」の実現と カリキュラム・マネジメントの関係	2
3 カリキュラム・マネジメント推進にあたって ～国立大学法人大阪教育大学大学院連合教職実践研究科 田村知子教授から～	3
4 学校教育目標（育成を目指す資質・能力）の見直し	6
5 関連単元配列表の作成（資質・能力をベースに）	6
6 「総合的な学習の時間」を軸として	7
7 マネジメントサイクル，内部・外部資源の活用について	7
8 京都市の強みを生かして	8
9 本調査研究事業にあたって	9
・京都市立葵小学校	10
・京都市立太秦中学校	35
・京都市立向島秀蓮小中学校	62
10 新しい時代におけるカリキュラム・マネジメント	87
11 これからの学校運営に期待したいこと ～国立大学法人大阪教育大学大学院連合教職実践研究科 田村知子教授から～	88
最後に（2年間で振り返って）	89

はじめに

平成 29 年 3 月に告示された学習指導要領では、資質・能力を「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の 3 つの柱に整理したうえで、学校と社会が「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という理念を共有し、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを明確にしながら、学校教育を学校内に閉じずに、地域の人的・物的資源も活用し、社会との連携及び協働によりその実現を図る「社会に開かれた教育課程」が重視されています。また、学校全体で児童生徒や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的・目標の実現に必要な教育内容等の教科等横断的な視点での組み立て、実施状況の評価と改善、必要な人的・物的体制の確保などを通して、教育課程に基づく教育活動の質を向上させ、学習効果の最大化を図るカリキュラム・マネジメントの確立を図ることとされています。あわせて、各教科等の指導に当たっては、資質・能力が偏りなく育成されるよう、児童生徒の「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を行うこととされています。

本市では、新学習指導要領の趣旨の実現を図るため、移行期間の初年度である平成 30 年度から、全市立小・中・義務教育学校で先行実施し、カリキュラム・マネジメントの確立に向けて、学校教育目標における育成を目指す資質・能力の見直し、教科等横断の関連単元配列表の作成など、各学校において全教職員の共通理解のもと、取組を進めています。

また、文部科学省「これからの時代に求められる資質・能力を育むためのカリキュラム・マネジメントの在り方に関する調査研究」事業の指定を受け、京都市立葵小学校、太秦中学校、向島秀蓮小中学校の 3 校において、国立大学法人大阪教育大学大学院連合教職実践研究科・田村知子教授、京都橘大学教職保育職支援室・廣瀬忠愛教授の指導助言をいただきながら、実践研究を進めてきました。

本冊子は、指定 3 校の実践研究や成果・課題等を広く紹介し、各学校のカリキュラム・マネジメントのさらなる充実に資する目的で作成したものです。各学校で活用いただければ幸いです。



1 カリキュラム・マネジメントとは

カリキュラム・マネジメントのねらいは、「教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図ること」（学習指導要領総則第1章第1の4）にあります。各学校では、これまでから教育目標の実現に向けて、教育課程編成の基本方針を定め、各種指導計画を作成し、指導体制を含めた校務分掌を整え、必要な予算を配当したり、地域の協力を得ながら、それらに基づいた日常の授業を展開し、授業の成果や課題を見取ったりしながら、次年度の改善につなげるという形での教育活動の質の向上を図られています。そうした意味でカリキュラム・マネジメントは、まったく新しい方法を導入することを目的とするものではありません。むしろ、自校の教育活動の質を最大限に高めることができるものになっているか、教科等を超えて育成される学習の基盤となる資質・能力や現代的な諸課題に対応する資質・能力がねらいどおりに育成されているか、地域の人的・物的資源の活用について考えることはできないか、といった点について、学校として組織的、計画的、継続的に、その実施状況を把握して改善を図っていく視点をもつことが大切です。

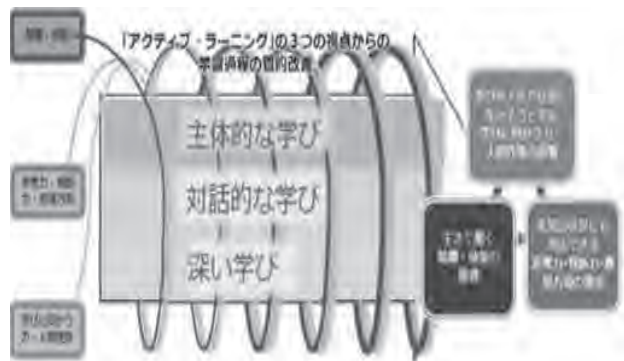


カリキュラム・マネジメントの充実を図るため、例えば、学校評価との関連付けを図りPDCAサイクルを機能させる、職員会議や学年会、教科主任会など既存の会議の場を生かす、学校運営協議会やPTA、学校だよりなどを活用するなど、既存の取組や組織を生かしつつ、その取組の質の向上を図っていくことが求められます。

2 「主体的・対話的で深い学び」の実現とカリキュラム・マネジメントの関係

「主体的・対話的で深い学び」は、形式的に対話型を取り入れた授業や特定の指導の型を目指すものではなく、児童生徒の質の高い学びを引き出す様々な工夫を意図しています。

児童生徒が、育成を目指す資質・能力を身に付けることができるようにするためには、各教科等の授業とともに、教科等の枠を越えて、資質・能力ベースで単元間をつないでいくという教科等横断的な授業の視点が欠かせません。育成を目指す資質・能力をどのように育むのかという観点から、授業改善や組織運営の改善に取り組むことが必要です。教育課程を核にして、教科の縦割りや学年を超えて、すべての教職員がその必要性を認識し、日々の授業について教育課程全体の中での位置付けを意識しながら取り組むことが求められます。そのためには、管理職を中心に学校の組織体制や運営の見直しを図ること大切です。授業改善と組織改善を一体的に行うことがカリキュラム・マネジメントになります。



多くの教職員は、各教科等の年間指導計画や単元計画等は実感をもって捉えています。教育課程となると抽象度が高くなり日常の授業から離れてしまいがちです。そのため、校長が学校のビジョン、育成を目指す資質・能力を明確に掲げ、組織の推進力と方向を整えることが求められます。

多くの教職員は、各教科等の年間指導計画や単元計画等は実感をもって捉えています。教育課程となると抽象度が高くなり日常の授業から離れてしまいがちです。そのため、校長が学校のビジョン、育成を目指す資質・能力を明確に掲げ、組織の推進力と方向を整えることが求められます。

国立大学法人大阪教育大学大学院連合教職実践研究科 田村知子教授から

<目的と意義>

なぜ、カリキュラム・マネジメントを行うのか？いささか大上段に構えていえば、それは、子ども、教職員、保護者等、学校に関わる人々の幸せ（Well-being）のためであり、より良い社会の創造のためです。現代社会は、気候変動をはじめ、新型コロナウイルス感染症、経済的格差の拡大、少子高齢化など多くのリスクに満ちています。そのような世界を生き抜く子どもたちに必要な力は何か、公正さや豊かな多様性が保障された持続可能な社会はどのようなものなのか、私たちは真剣に問い行動するべき時代を生き、しかも未来を担う子どもたちの教育という重責を担っています。限られた時間の中で教育効果を最大化することがカリキュラム・マネジメントの目的となります。

マネジメント一般は、企業の組織マネジメントやリスクマネジメントなど様々な目的に対して行われる営みです。岡本薫氏は戦争でもマネジメントが有効だと力説したほどです（岡本 2011）。だからこそ、学校におけるマネジメント、なかでも直接的に教育目標・内容・方法を対象とするカリキュラム・マネジメントは、マネジメント主体である学校管理職や教職員が、その目的を常に問い続けることが求められます。どのような資質・能力を育みたいのか、それがどのような社会を創造することにつながるのか、時には哲学的に思索することが必要となります。教育の目的、目標は教育基本法をはじめ各種法令や学習指導要領にも明記されていますが、教育課程編成・実施は各学校が主体となって行うものです。授業に関しては、各教師にかなりの裁量があります。各学校の校長等管理職や教職員が、学校において営まれる教育活動の目的を真摯に問い続けることが、よりよいカリキュラムづくり・授業づくりの土台になります。本委託研究の指定3校はいずれも、学校教育目標を全教職員の参画のもとで行われました。自校の子どもたちの実態の把握に努め、この子どもたちにどのような資質・能力をつけるべきかを、教職員一人ひとりが自分の頭で考え言葉にし、同僚とともに考え、それを洗練させていかれました。

このように、カリキュラム・マネジメントの営みは、「何のために？」という問いから始まります。近年の学校では、子どもも教師も多忙です。ともすれば、教科書の単元を日々「こなす」ことに精一杯になることもあります。しかも、新型コロナウイルス感染拡大防止のための臨時休業措置は忙しさに拍車をかけました。一方で、コロナ禍で学校行事の催行の是非や感染防止対策を講じながらの対話的な学びの実現などのために、各学校においては、「そもそも何のために？」「これは本当に必要か？」「どうすれば実現可能か？効果を得られるか？」といったことを、例年以上に真剣に考え、知恵を絞られたのではないのでしょうか。そして、年間指導計画や週時程、1単位時間のあり方を見直したはずですが、これは、期せずして強要されたことではありますが、カリキュラム・マネジメントの営みそのものでありました。この経験を、各学校がポジティブに生かすことができれば、コロナ禍の苦しい経験も無駄ではなかったこととなります。

さて、カリキュラム・マネジメントそのものは、見方によっては、教育活動のための「器」に過ぎませんが、その過程は、教師の専門性、自律性、創造性、協働、民主主義といった価値観に支えられるべきものです。教師は、与えられたカリキュラムをこなすだけの「カリキュラム・ユーザー」ではなく、「カリキュラム・メーカー」あるいは「カリキュラム・オーナー」として、開発的にそれに向かうことが期待されています。学習指導要領等の一定の基準や枠組みは存在しますが、教室は、子どもと教師、子ども同士、時にはゲストティーチャーなどとも関わりながら、教材を介して、常に新たな学びが生み出される創造的な空間です。そのような各学級における創造的・

開発的な授業の営みを、子どもにとっては学びがいのあるものへ、教師にとっては手応えのあるものへと高めていくために、一人ひとりの教師の学びや実践を支え、同僚間の学びあいや協働的な実践開発を促し、学校全体の教育活動に組織的に取り組むのがカリキュラム・マネジメントなのです。

<ポイント>

① 「子どもの学び」を起点とすること

「カリキュラム」の最も広義の定義は「学びの総体」です（佐藤 1996）。この立場からは、計画されたカリキュラム（教育課程）、実施されたカリキュラム（授業）、学ばれたカリキュラム（子どもが学んだ結果）という3層が想定されます。カリキュラム・マネジメントの概念において「教育課程」ではなく「カリキュラム」を使用する意義はこの点にあると考えられます。子どもの学びに着目し、「学ばれたカリキュラム」を質量ともに充実させるために、「計画されたカリキュラム」と「実施されたカリキュラム」の評価・改善を行うのがカリキュラム・マネジメントです。つまり、子どもの学びが起点ということです。膨大な論文のメタ分析をしたハッティは、学校のパフォーマンスを最大化することのひとつは、「教師が生徒の目線で学習を見ること」だと述べています（Hattie, J., 山森訳 2018）。教師は、どれだけ子どもの目線で学びをとらえられているでしょうか。子どもの学びに着目すると、自ずと学習評価の在り方を検討することになります。学習評価には信頼性と妥当性が求められますが、信頼性だけを求めていくと測定しやすいものだけを図る客観的テストに頼ることになります。しかし、思考力、判断力、表現力等や学びに向かう力など、測定しにくい学力も育てたいわけであり、そのため、評価の妥当性を求めてパフォーマンス課題やルーブリックの開発にチャレンジすることになります。このような評価を完全に客観的なものとするのは極めて困難ですが、教育の専門職である教師が各々の主観に基づく見取りを持ち寄り、相互に主観をすり合わせる間主観的な評価により、教師の鑑識眼と評価の信頼性を高めることができます。指定3校も、子どもの振り返りに着目したり、学校として育成したい資質・能力のルーブリックを作成して子どもと共有したりするなど、大いに工夫を凝らしています。

② マネジメントサイクルとゴールフリー評価

カリキュラム・マネジメントにおいては、教育課程及びその実施に必要な条件（組織的要因など）を評価しその改善策を次の計画に反映させていくことが基本です。そこで、近年学校現場にも根づいてきたPDCAサイクルが適用されることが多いわけですが、その際、PDCAサイクルはモノづくりから発想されたこと、つまり事前に仕様や納期等を制御し、規格外れのモノをつくらぬよう統制するテクノロジーのひとつであり、それを人育ての学校教育に直裁に適用させることの危うさは認識しておく必要があります。教室の営みにおいては、子どもたちと教師の相互作用によって予定外の方向に進んだり、新たな発見や教師の想定を超える素晴らしい子どもの発言が見られたりします。当然、教師は予め目標と計画を設定して授業に臨むわけですが、教室で偶然生み出される豊かな学びを排除せず、積極的に評価する「目標にとらわれない評価（ゴール・フリー評価）」の考え方を大切にしていきたいところです。このことを踏まえた上でPDCAサイクルを適用することはあり得ますし、各学校で新たなマネジメントのプロセスを創出することも考えられます（例えば葵小学校開発の「対話型マネジメントサイクル」）。

③ 組織的な推進

カリキュラム・マネジメントの営みの中には、教師個人でも可能な取り組みもあります（例えば担当教科において主体的・対話的で深い学びを実現するための授業デザインの工夫）が、組織で取り組むことにより、学校全体の授業の質を上げ、カリキュラムの有効性を高めることが肝要

です。教師はそれぞれ異なる経験や力量、自分なりの子ども観や指導観をもっています。多様性は組織の強みである一方で、各教師が学校としての取組を全く顧みなかったり、個々の教師が組織的な支援を受けなかったりするのであれば、組織である意味がありません。教師個人の個性や取組を尊重しながらも、個々の力を組織の力へと集結させていくマネジメントが欠かせません。学校の教職員全員が、子どもや学校の実態・課題、ビジョンを共有し、これらに納得した上で、教室の実践において工夫してもらうためには、カリキュラムの計画段階や評価段階への参画を促進することが有効です。各種調査の結果だけでなく、子どもの作品や活動時の写真、教師の記憶や記録など、実態把握のための素材はたくさんあります。これらを出し合い、子どもの教育課題と育成したい資質・能力、そのための必要な取組について言葉にしていく過程に全教職員（場合によってはコミュニティのメンバーなど）が参画する機会をつくり、各自の当事者性を高め、主体的な関与を引き出したいものです。そのためのツールとして、参加者が自らの経験やアイデアを付箋に書き綴り、言葉にし、共通点や相違点、実態と原因の因果関係を探り構造化していくようなワークショップ型の熟議は有効です。

組織的な推進のもうひとつのポイントは、「夢は大きく目標はスモールステップで」「成果を確認して小さな達成感を次へのエネルギーへつなげて」というところと考えます。学校では、ともしれば要改善点を探すことに注力しがちです。改善への努力は必要なことですが、成果の確認も重要です。前進するためのエネルギーは必要であり、その一つが実践の手応え、達成感です。授業がうまくいった時の手応えの有無は、教師であれば日常的に経験することですが、それに加え、管理職や同僚による参観とフィードバック、予め達成を証明できるための評価を計画しておくなどの工夫も大切です。そして成果は、積極的に評価して共有し、効果的な取組については、同僚も自分なりに試してみたり、学校のカリキュラムに組み込んだりして継続したりすることです。

<留意点>

実践においては、手段が目的化することに対しては常に注意が必要です。一例を挙げれば、カリキュラム・マネジメントの方法として、教科等横断的な指導やそれを補助するためのツールである関連単元配列表などが提唱されてきました。しかし、「単元配列表の作成がカリキュラム・マネジメント」という誤解を生む危険性があります。そうすると、手段が目的化し、関連単元配列表の作成が形式的で無意味で負担感の大きい作業に終わってしまうことになりえます。関連単元配列表は、指導の見通しをもつこと、教科等の関連性を見出すことなど、計画において有効です。また、単元配列表を関係者が囲み、子どもの姿や授業の実際を語り合うことにより、教師の暗黙知を「見える化」したり、実践の足跡を残したりことにより評価・改善に使うことも可能です。関連単元配列表を使う目的を明確にもち、これを媒介としたコミュニケーションにより、組織的・協働的にカリキュラムの評価・改善、次の計画・実施へと発展させていくためのツールとして、使いこなしていただきたいと考えます。あてがいではなく、自分たちで創る「子どもたちの学びの地図」であるという意識をもち、計画表でありながら、実践の記録簿、そして実践の評価や知識創造のツールとして有効活用されることが期待されます。

<引用文献>

岡本薫『なぜ日本人はマネジメントが苦手なのか』中経出版、2011

佐藤学『カリキュラムの批評』世織書房、1996

ジョン・ハッティ（著）山森光陽（監訳）『教育の効果』図書文化、2018

4 学校教育目標（育成を目指す資質・能力）の見直し



各校の教育課程編成の基本となる学校教育目標は、法令に定める学校教育の目的や目標、教育課程の基準に基づき、本市「学校教育の重点」も参考に、新学習指導要領の趣旨や小中一貫教育方針等を踏まえ、教育課題の解決を目指して設定することになります。教育課題とは、自校の児童生徒の現状を客観的（時には主観的に）分析し、育成を目指す資質・能力を育むための課題ともいえますが、学校教育目標に照らしながら各教科等の授業を改善し、教育課程の実施状況を継続的に評価することができるよう、学校教育目標には、育成を目指す資質・能力を具体的に示すことが必要です。これらをもとに学校教育目標を見直すことで、日々の教育実践と育成を目指す資質・能力の結び付きが明確になります。

カリキュラム・マネジメントを進める際には、学校教育目標の実現に向けて（育成を目指す資質・能力をベースに）、重要となる各教科等の内容を選択し、選択した内容について各教科等相互の関連を図りながら配列し、適切な授業時数を配当するなど、学校教育目標との関係を意識しながら、各教科等の教育内容を教科等横断的な視点で組織することや、児童生徒の姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施・評価をして改善を図るマネジメントサイクルを確立すること、また、人的・物的資源等を効果的に組み合わせ活用することが重要となります。



5 関連単元配列表の作成（資質・能力をベースに）

育成を目指す資質・能力ごとに実施時期や教科相互の関連等を考慮した関連単元配列表

<●学年 関連単元配列表>

育成を目指す資質・能力 【思考力、判断力、表現力等の育成に關して！】	(例) 単元を見つめ、追究する問題を把握する力 【例】 問いや問いの解決の方法や手段を考へ、構築する力 【例】 問いや問いの解決に向けて、組織を構築し、役割に特化したら、連携したりする力
各教科等では実施時期や単元、教科	4月 5月 6月 7月
総合的な学習の時間 (例) 地域の文化、そのことについて調べ、発表したり、調べたり、考えたり、実践したりする等	【学習1】 言語を基盤とする資質・能力の育成 学習指導要領、教科書、学習指導要領、学校の教育目標（目標や成果を踏まえ、教科横断的な視点、学習指導要領（総合的な学習の時間）を基に実施） ・教科横断 ・1学期の学習 ・2学期の学習 ・3学期の学習（マナー等）
特別活動 学校行事	
特別の教科指導	
道徳	【学習2】 基礎として育成を目指す資質・能力について、各教科等で育成した力を活用する
体育	【学習3】 基礎として育成を目指す資質・能力について、各教科等で育成した力を活用する
算数(数学)	【学習4】 基礎として育成を目指す資質・能力について、各教科等で育成した力を活用する
理科	【学習5】 基礎として育成を目指す資質・能力について、各教科等で育成した力を活用する
外国語	

カリキュラム・マネジメントをより効果的に実施するために、育成を目指す資質・能力ごとに各教科等の単元や学習内容を配列する「関連単元配列表」を作成し、「つながり」や「まとめ」を可視化・共有すると有効です。育成を目指す資質・能力に基づき、各教科等の内容に応じて共通点を関連付け、効率的かつ効果的な学びになるよう、順序性も踏まえつつ、①

教科等横断的な視点、②マネジメントサイクルの視点、③人的・物的資源等の効果的な活用の視点の3つの側面から配列を検討します。なお、関連単元配列表は、作成することが目的ではなく、

作成する過程が大切であり、また、継続的に見直していく必要があります。児童生徒の姿が変わったり、思いもよらぬ外的資源が得られたりするなど、育成を目指す資質・能力を育むプロセスを柔軟に捉え、全ての教職員が学校教育目標の設定に関わり、共有したうえで、その実現に向けて日々の教育活動を実践・評価・改善していくことが重要です。

6 「総合的な学習の時間」を軸として

新学習指導要領では、総合的な学習の時間の目標について、学校教育目標を踏まえ、総合的な学習の時間を通して育成を目指す資質・能力を示すことや、他教科等との目標及び内容との違いに留意しつつ、各教科等で育成を目指す資質・能力との関連が重視されています。

総合的な学習の時間は、学校教育目標と直接つながる重要な役割を担っており、各教科等と関連付けながら、問題解決や探究活動を実践するという総合的な学習の時間の特質を十分に踏まえた活動を展開することが必要です。カリキュラム・マネジメントを通じて、児童生徒にどのような資質・能力を育むかを明確にして、学校教育目標との関連を図りつつ、総合的な学習の時間で設定する探究課題が、学校教育目標の実現に直接的・間接的につながるよう計画することが重要です。

7 マネジメントサイクル、内部・外部資源の活用について

教育課程の編成にあたって、カリキュラム・マネジメントの一環として、学校体制の実態が密接に関連してきます。教育活動の質の向上を組織的かつ計画的に図っていくためには、人的・物的な体制の実態を十分に考慮する必要があります。そのためには、児童生徒の特性・実態や教職員の構成、教師の指導力、教材・教具の整備状況、地域住民による連携及び協働の体制に関わる状況など客観的に把握・分析し、教育課程の編成に生かす必要があります。そして、教育課程の実施状況を適宜評価し、その改善を図っていくこと（いわゆるPDCAサイクル）が求められますが、内部・外部資源の実態は学校によって異なるのが実情です。そのため、各学校においては、まず自校の内部要因を分析します。児童生徒の特性・実態や教職員の構成、教師の指導力、教材・教具の整備状況等を踏まえ、育成を目指す資質・能力はどのようなものか、そのため校内の組織体制をどのようにつくり、今ある教材・教具をどのように活用するか、足りないものを補充するための予算は確保できるのかなど、多面的な視点から検討します。その際、学習評価を授業改善や組織運営の改善に向けた学校教育全体の取組に位置付けて組織的かつ計画的に取り組むことが大切です。学習指導と学習評価は学校の教育活動の根幹であるため、カリキュラム・マネジメントの中核的な役割となることに留意してください。



外部資源については、家庭や地域社会との連携を密にすることが必要です。そのため、学校の教育方針や特色ある教育活動の取組、児童生徒の状況などを家庭や地域社会と共有し、協働することにより、教育課程の編成・実施に生かしていくことが求められます。保護者や地域住民が学校運営に参画する学校運営協議会など、学校と地域の連携及び協働の取組を広げ、教育課程を介して学校と地域がつながることにより、

地域でどのような子どもを育てるのか、何を実現していくのかという目標やビジョンの共有が促進され、地域とともにある学校づくりが一層効果的に進められていくことが期待されます。その際、学校評価が、教育課程の編成、実施、改善が教育活動や学校運営の中核となることを踏まえつつ、カリキュラム・マネジメントと関連付けながら実施するよう留意することが必要です。

8 京都市の強みを生かして

本市の学校運営協議会では、家庭・地域・学識経験者など幅広い分野の方々に、委員として学校運営についての意見や承認をいただくだけでなく、多くの学校では、協働活動を担う企画推進委員会を設置し、そこで多くの保護者や地域住民の方々によるボランティアに積極的に参画いただくことで、地域に応じた様々な協働活動が実施されています。小・中学校合同の学校運営協議会を設置しているところもあり、義務教育9年間の一貫した学びと育ちの充実に向け学校・家庭・地域が一体となり、地域ぐるみで推進していく体制が整えられています。

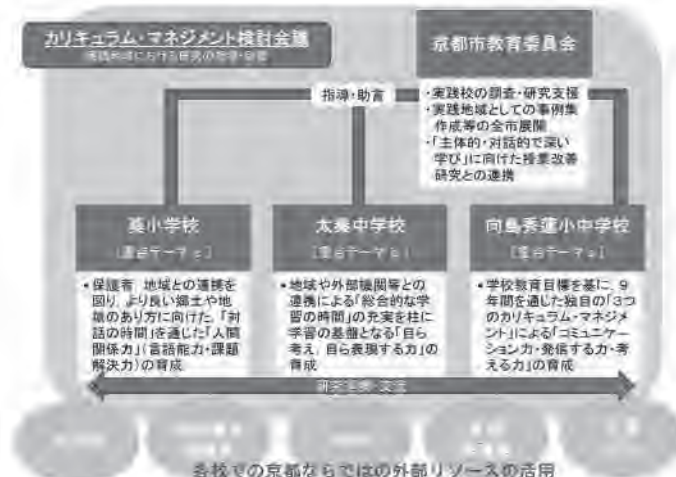
また、本市では、大学、博物館、神社仏閣、企業等の協力を得て、文化的・歴史的遺産の見学及び調べ学習、地域の伝統行事へ参加することはもとより、日本舞踊や古典文学などの伝統文化に関する専門家の派遣や、茶道、華道、和装、能楽・狂言等の伝統文化体験など、知識と共に体験を通して伝統や文化を受け継ぐ意欲と態度を育てる機会が豊富です。

今後も、「地域を学ぶ、地域で学ぶ、地域から学ぶ」実践を発展させ、カリキュラム・マネジメントの取組においても、これらの外部資源を活用し、各学校の実態等に応じた特色ある教育活動を図っていくことが大切です。



9 本調査研究事業にあたって

文部科学省「これからの時代に求められる資質・能力を育むためのカリキュラム・マネジメントの在り方に関する調査研究」事業では、葵小学校、太秦中学校、向島秀蓮小中学校の3校を指定校として、重点テーマ（下記a・b・c）を一体的に捉えつつ、「育成を目指す資質・能力」の具現化に向け、学校運営上の工夫（業務改善等）を盛り込んだカリキュラム・マネジメントの実証的な取組を推進してきました。



- 重点テーマa：学校の教育目標等の設定及び実現に向けた研究【向島秀蓮小中学校】
- 重点テーマb：学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究【太秦中学校】
- 重点テーマc：現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究【葵小学校】

<指定3校の取組内容>

学校名	取組内容
葵小学校	主体的な学校運営を目指した全教職員が参画する「葵戦略会議」を設置し、資質・能力ベースで学校教育目標の創造や教職員の学校運営への参画意識を向上。「対話の時間」により児童の関係性を高め、「人間関係力」の育成を目指す。成果の見取りは、児童とともに「あおいG l i d」（評価指標・ループリック）を作成。
太秦中学校	教務部長・生徒指導部長・研究部長を中心に、各部長・各部の連携を明確した組織「カリマネ推進委員会等」を編成し、「改善」「改革」のダブルループで全教職員が一体となってカリキュラム・マネジメントを推進。シンプルな授業構成、問いの工夫、ゴールの明確さなどの授業改善が中心。
向島秀蓮小中学校	平成31年4月に義務教育学校として開校。厳しい学力実態・家庭実態であるが、義務教育9年間を通じた系統的な学力向上構想（グランドデザイン）のもと、「考える力」「発信する力」「コミュニケーション能力」の育成を目指す。スモールステップでマネジメントサイクルを回しつつ、デザインを統一した授業改善を促進。

<指定期間（研究実践期間）>

令和元年度から令和2年度

3校共通して、「校内体制の見直し」「年間計画の構築」はもとより、「具体的な実践・検証の方法」「児童生徒の変容の見取りを視点にしたマネジメントサイクルの手法」「働き方改革につなげる仕組みづくり」を明確にしながら、プロセスを重視した実践研究が進められてきました。

また、田村知子教授（国立大学法人大阪教育大学大学院連合教職実践研究科）、廣瀬忠愛教授（京都橋大学教職保育職支援室）にも御指導・御助言をいただいております。指定2年間は、新型コロナウイルス感染拡大に伴う、長期間にわたる臨時休校措置はじめ、学校教育活動が制約されることも多く、思うような研究・実践が進められないこともありましたが、逆に、そうした制約がある中だからこそ、カリキュラム・マネジメントがより効果を発揮するとの前向きな思いを共有しながら、3校それぞれが工夫しながら取り組んでこられました。そのプロセスや成果、課題等を次ページ以降に紹介します。

1 はじめに

■「カリキュラム・マネジメント」をどのように捉え、どの側面からアプローチしたか

今日の教育改革は、複雑かつ多様な教育課題に対応すべく、自主的・自律的な学校経営の実現が求められている。学校が自律性を発揮するためには、全ての教職員が、持てる力を最大限に発揮できる**自律的・協働的な学校組織文化**が必要である。

本研究では、学校教育目標の具現化に向けて効果的に行動するために、集団としての意識と能力を継続的に高め、伸ばし続ける組織づくりを目指した。このような組織を構築するうえで、カリキュラム・マネジメントは学校改善の中核として位置付けられる（**図1**）。そこで、気づきを共有し、個人の成長を組織の成長に繋げる機会として最も有効な場である校内研修に着目し、学校の組織改善を行った。その中で、「対話の時間」という新たなカリキュラム作成を学校経営戦略に位置付け、対話的な学校組織風土の構築に取り組んだ。

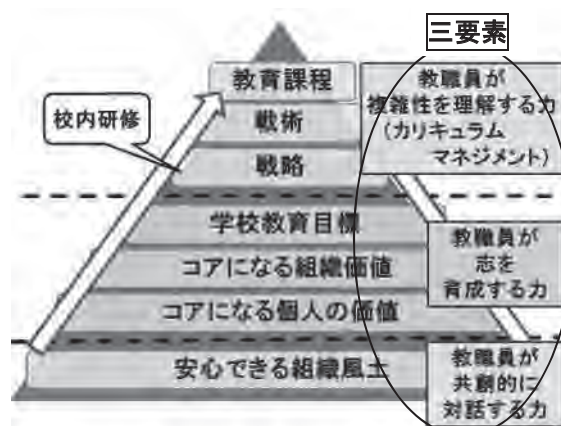


図1：学校改善の三要素

■「カリキュラム・マネジメント」を行う目的や意味

上述のように、カリキュラム・マネジメントの目的は、**学校教育目標の具現化**にある。本校における主な課題はリスク・マネジメントである。児童間トラブルの対応に追われることがあり、保護者の不信感から学級運営が難しくなるケースも少なくない。そのため、対話により学校に安全・安心の場を醸成することを学校改善の中核に据えることとした。そこで、育成を目指す資質・能力を「人間関係力」（自律・協働）と設定し、学校教育目標を令和元年度は「共に学び 友に学ぶ 葵校」、令和2年度は「友に学び 共につくる 葵校」と設定した。この学校教育目標の具現化に向け、対話により、児童の関係性の質を高め、学校に安全・安心の場を醸成することを目指した。そのために、「対話の時間」という本校独自のカリキュラムを作成するための校内研修を企画した。さらに、児童の関係性の質を高めるには、教職員の児童に対する関わり方を変えることが必要だと感じ、研修を通して教職員の関係性の質を高め、自律的・協働的な学校組織文化を構築することを意図した（**図2**）。対話的な学校組織文化の構築を基に、学校教育目標の具現化に向け、「業務効率を高め、教育の質を上げ隊（たい）！」が発足した。この活動の推進に当たっては、学年会を活用している。学年会の中で、児童のことについて話をする機会や、実践を振り返りアイデアを出し合って次の実践につなげる経験が、自律的・協働的な学校組織文化の醸成に寄与していると考えられる。

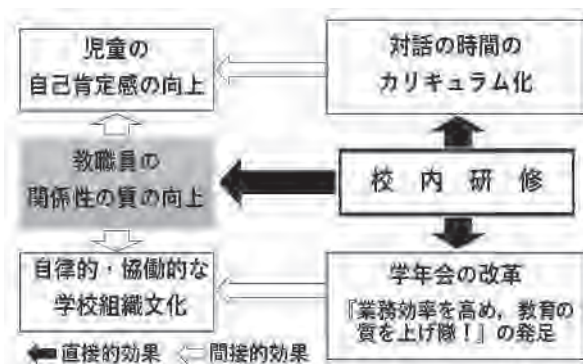


図2：校内研修の効果

本校を進めるカリキュラム・マネジメントとは、教職員の自律性・協働性に支えられた「業務効率を高め、教育の質を上げ隊（たい）！」の活動を通して、児童の自律性と協働性、すなわち、「人間関係力」を高めることであると捉えている。

2 課題の把握及び学校教育目標（育成を目指す資質・能力）の見直し

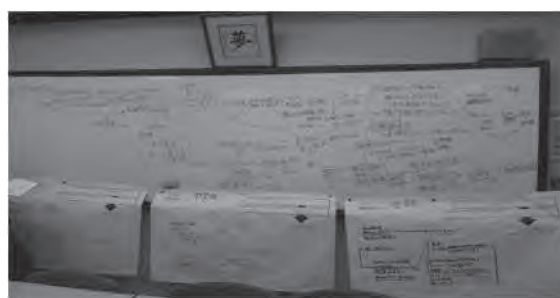
■課題をどのように把握し、育成を目指す資質・能力を設定したか

<本校が育成を目指す資質・能力>

人間関係力

●葵戦略会議を実施（SWOT分析を活用）

教職員と学校運営協議会会長やPTA会長などの地域や保護者の代表が、どのような子どもを育てたいか、どのような学校であればよいかなど話し合い、学校教育目標を見直す。その中で、子どもの長所や短所を出し合い、子どもたちに付けたい力を明確にする。葵戦略会議は、これまで行っていた教職員のみでの年間反省を見直し、より目標を明確にする目的で行うようにした。



■学校教育目標について

<見直し前>

～自分らしさ発見～ 共に学び 友に学ぶ 葵校

<見直し後>

～対話する学校～ 友に学び 共につくる 葵校

■見直しにあたっての具体的な困りや気付きは？

年度末に、今年度の総括と来年度に向けてという意味合いで葵戦略会議を行うが、新年度異動してきた教職員と、どのようにして共通理解を図っていくかが課題である。

■解決方法は？

新着任者、若年者・希望者を対象にして研修をラボ形式で行うことで、より主体的に取り組めるようにする。※ラボ形式…必要な人が自分で選んでラボ（研究所）に参加する形式。

3 学校体制の再構築

■「カリキュラム・マネジメント」を推進するための学校体制の工夫

<研究前> ・校務分掌ごとに取組を進め、教科部会から各担当に伝えようで取り組む。
→「研究は研究」「生徒指導は生徒指導」のように、それぞれの係で動いていたため、横のつながりが見えにくい状態であった。

<研究後> ・ビジョンを共有する
→全教職員で学校教育目標を見直し、同じベクトルで取り組めるようにした。
・学年会を中核にして取組を進める
→PDCAサイクルを回していくために最も効果的な集団が学年会であると考えた。週に1度の学年会を設定し、学習や行事の予定だけでなく、授業の仕方や児童の姿などを共有し、人間関係力をどのように伸ばしていくか、児童の力はどこまで伸びているかなどを共有するようにした。その際は、関連単元配列表と週案を活用し計画と振り返りを連動させている。
・すべての教職員が全体を見渡してプロジェクトごとに取組を推進する。
→各係がそれぞれ効果的につながり学校教育目標を達成するプロジェクトチームとして活動している。

■すべての教職員が当事者意識を持つまでのプロセスやその取組等について

(1) 対話を核とした校内研修の開発

「対話の時間」のカリキュラム化に当たっては、教職員自らが真の対話を体験する必要があると考えた。そこで、本研修では、日常に起こる対立を、対話によって相互理解へ導くプロセスに着目した。そのために、まずは、職員室内で起こっている違和感と困りを外部講師と共有し、研修のゴールを設定した。そのうえで、教職員の自律性・協働性を高める校内研修プログラムを作成した（表1）。

表1：対話を核とした校内研修の主な内容

<p>1年目 <目指すゴール>「対話の授業のカリキュラム作成」 第1回：職員室内で起きているリアルなテーマによる対話 第2回：ファシリテーションスキルに特化した研修 第3回：講師による対話の授業参観・事後研究会</p> <p>2年目 <目指すゴール>「業務効率と教育の質の両立」 第1回：職員室内で起きているリアルなテーマによる対話 第2回：自分の判断軸を立てる 第3回：組織の判断軸を立てる 第4回：働き方を見直す</p>

対話をベースとした校内研修により、コミュニケーションの基盤となる、教職員が何を考え、どう行動したいと願っているかが共有され、安心感につながった。また、対話の研修を経験することで教職員間に信頼関係が生まれ、失敗やうまくいっていないことなど、マイナスの部分全員の前で出しても受け止めてもらえると思える関係性に変化していった。そして、自分の思いを自然に言える教職員の関係性が構築されていった。

(2) 葵戦略会議

「2 課題の把握及び学校教育目標（育成を目指す資質・能力）の見直し」を参照。

(3) 業務効率と教育の質の向上の両立

研修の中で、当たり前を見直し、学校教育目標具現化のためにやるべきこと・やめるべきことを決める様々な意見が出された。そして、5つのプロジェクトが立ち上がり、「業務効率を高め、教育の質を上げ隊（たい）！」が発足した。

(4) 学年会の改革

対話型マネジメントサイクル（図3）を活用し、学年会をその学年の児童の課題を解決するチームとしての機能を発揮させる場とした。これによって、実践を振り返り、次の実践につなげる省察的な学校組織文化へ変化し、さらに、学年会の中でわからないことを話したり、アイデアを出し合ったりする経験によって、「とにかくやってみよう。」とする、挑戦的な学校組織文化を醸成していった。

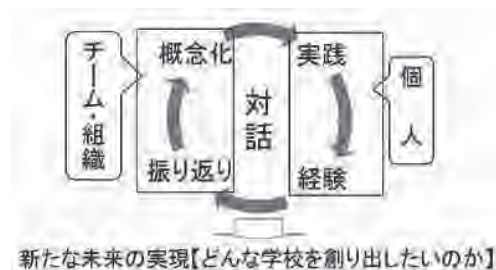


図3：対話型マネジメントサイクル

(5) 学校評価

カリキュラム・マネジメントと学校評価の結びつきを意識するため、本校が育成を目指す資質・能力が「人間関係力」であることを踏まえ、全国学力状況調査における「自分には、よいところがあると思う」と同じ設問を学校評価の項目に取り入れた。

■見直しにあたっての具体的な困りや気付きは？

プロジェクト型の組織に変えたことで逆にプロジェクト任せになりすぎてしまったため、明確さがなく、何をどうすればよいかわからない状態になった。また、一部の教職員に負担が偏った。

■解決方法は？

対話をベースに学年会を軸としてプロジェクトを進める。
 また、すべての教職員が参加できるよう、見直しと再編を行いながら取り組んだ。

■キーパーソンが果たしたそれぞれの役割や動き

<校長>

- 自律性を高める
 - ・葵戦略会議
カリキュラム・マネジメントの土台ともいえるビジョンの共有を意図し、教職員による育成を目指す資質・能力、及び、学校教育目標の設定を企画した。
 - ・校内研修改革
学校教育目標具現化に見合う研修講師の招聘や週案を活用した継続したフィードバックを実施した。
- 協働性を高める
 - ・学年会の改革（『業務効率を高め、教育の質を上げ隊（たい）！』の推進）
 - ・保護者や地域を含めた対話的 school 組織文化の構築（『保護者と教職員の対話の時間』を設定）

<教頭>

- 授業マネジメント
授業ラボの講師を務め、社会科の授業づくりの概説と模擬授業を実施した。コロナ禍により、社会見学に行けない状況下においても学びのコンテンツを活用したり、授業展開を工夫したりするなど、楽しい授業をつくるためのヒントになるよう提案した。
- タイムマネジメント
仕事の時間と個人の時間のどちらも大切にできるよう、電話対応時間を8時～18時に設定し、19時には退勤を促すことを心掛けた。超過勤務にあたる教職員には、仕事の効率化と健康の促進について、個別に声掛けを行った。

<教務主任>

- 年間を通した学校行事の見直しと再編を進め（葵4大フェスタ）、児童にどのような力を付けるのかを明確にして取り組んだ。学校行事を通して児童が自身の成長を振り返り、次の学校行事に向けて課題を持てるようにした。また、行事の内容を教科等の学習内容と関連させて取り組むようにした。
- クラブ活動と探究的な学習（総合的な学習の時間）を「あおいカレッジ」として再編し取り組んだ。
- 会議・研修会の内容を精選・整理して行った。始まりと終わりの時刻を明確にした。
- 学年会をカリキュラム・マネジメント実践の大切な場と位置付けた。

<研究主任>

- カリキュラム・マネジメントをどのように進めるかを発信する。
→校内研究会・校内研修会・授業ラボ・対話ラボの実施。
- 各学年の取組の進み具合を確認したり、取組を共有する場を設定したりする。
→研究委員会の開催。
- ICTの活用を進める。
→GIGA端末を用いた授業実践を積み重ね発信する。

<学校運営主任>

- 学校教職員の一人であり、唯一の行政職員である事務職員としての役割を果たす。
 - ・研究授業参観・研究協議・研修への参画→教育目標や研究の目的・取組を共有。
 - ・教材の活用や子どもたちへの教育効果に則した予算執行の在り方を確信する。
 - ・事務職員目線での教材提案を発信する。
 - ・「研究に特化した予算計画・執行」を一覧にまとめ可視化する。
 - ・各学年が作成活用している「関連単元配列表」に経費全般を留意するための【その他】項目を加える。→1年を通しての振り返りや次年度につなげるために役立つ工夫を取り入れる。

4 カリキュラム・マネジメントの3つの視点を踏まえた実践の具体例

① 教科等横断的

関連単元配列表を活用し、どうすれば効果的に「人間関係力」が伸ばせるか計画を立てた。

まず、重点教科と重点単元を決め合わせて学習すると「人間関係力」を高めやすいと考える教科と単元をつないだ。例えば、国語科6年「対話の練習～いちばん大切なものは」の単元と、対話の時間「コミュニケーション④～共感的な聴き方と批判的な聴き方」の学習を重ねて学ぶことで、児童は相手の考えを受け止める大切さを効果的に学ぶことができた。

<関連単元配列表> 人間関係力や反転授業についても記載（P23 参照）

単元を入れ替えたり、内容を揃えたりして学習することで学習効果が高まり、また、今年度は関連単元配列表の中に必要な教材などを記録するようにした。そうすることで、行事や授業に必要な準備物が明確になった。

② PDCAサイクル

次の5つのステップで取り組んだ。

- (1) 学校教育目標の見直しと、育成を目指す資質能力の設定
- (2) 学年会の設定
- (3) 年間計画や関連単元配列表の作成
- (4) 授業や行事の実践
- (5) 成果を振り返り、取組を共有する

●学校教育目標の見直しと、育成を目指す資質・能力の設定

葵戦略会議で目指す方向と取組の方法を共有した。カリキュラム・マネジメントでは、すべての教職員が同じ方向に向かって取組を進めることが大切であるとする。葵戦略会議はそのための最も重要な最初の一步である。

●学年会を中核に

設定した目標に向かっているか、資質・能力が育っているか、常に振り返り、取組を見直していくことが重要である。そのために週に1度、学年会の日を設定した。各学級担任はそれぞれの専門性を生かして日々の授業を行っている。どの取組がどのような効果があったのか振り返る場が学年会である。小さなPDCAサイクルを学年会で回しながら、効果のあった取組を研究委員会や校内研究会で共有し、大きなPDCAサイクルを回していくようにした。



●振り返り・児童の姿を見とるための評価指標「あおいG l i d」を作成

「あおいG l i d」は児童の姿を見とるための評価指標である。「人間関係力」を「自分を適切に評価する力」と「相手に共感しお互いの自分らしさを認め合う力」と「対話しながら試行錯誤し新たな価値を生み出す力」の3つに整理した。どのような姿が見られたらその力が付いているとみなすか、ステップ1・2・3の3段階で設定し、児童の学習の姿や振り返りの記述内容、児童の作品を分析し評価した。焦点化した児童についてはインタビューで、どんな思いを持って学習し、自分をどのように評価しているか聞き取ることで、人間関係力の評価を取ろうと試みた。教員のインタビュースキルなど課題が見られ、インタビューでの評価は課題が残った。

(参考) 令和2年度 人間関係力 あおいG l i d (P24, 25 参照)

	ステップ1	ステップ2	ステップ3
自分を適切に評価する力			
課題設定	・自分のしたいことを選んでる。	・友達や先生と協力して、最も良い課題を選んでいる。	・自分で適切に課題を設定している。
学習計画	・課題を解決するため意見を出している。	・これまでの経験や知識から、課題について予想し、解決するための道筋を考えている。	・課題解決に向けて、計画を修正しながら取り組みを進めている。
振り返り	・何を学んで何ができるようになったかわかる。	・身に付けた力どうしのつながりに気付いている。	・つなげた力をどこでどのように発揮するか考えている。
相手に共感し、お互いの自分らしさを認め合う力			
考えの違い	・違う意見や考えがあることを知り、考えが違っていいことを理解している。	・相手の話を受け止めて、自分の考えをもつことができる。	・安心して考えを出し合う中で、自分と違う考えを受け止め考えを再構築する。
関わり合い	・友達の良いところを見つけている。	・見つけた良さをみんなで共有している。	・他者のために自分の力を発揮する。 ・欠点を補いあっている。
	・誰かと何かを作っている。	・お互いの考えを共有し考えを練り上げながらより良いパフォーマンスをしている。	
自分軸	・なりたい自分について考えている。	・なりたい自分をもっている。	・一人ひとりが自分の目標に向かって進んでいる。
対話しながら試行錯誤し新たな価値を生み出す力			
聴く	・より良い聞き方を考えている。 ・友達の思いや意見を否定せずに聞いている。	・人の話を共感的に聞いている。(傾聴) ・友達の意見をもっと聞きたいと考えている。	・多様な価値を認めている。 ・相手の思いを受け止めている。
話す	・相手に聞こえる声で話す。 ・自分の思いや考えが言える。	・話すときに聞く人のことを考えている。 ・思考ツールを活用するなど、自分の考えが伝わるように話している。 ・考えを言語化している。	・根拠を明確にして自分の考えを説明している。
質問	・分からないことなどを積極的に質問している。	・話題に沿って、建設的な質問をしている。	・本質を問う質問をしようとする。
課題解決	・何事にも挑戦している。	・最後まであきらめず粘り強く取り組んでいる。	・失敗や困難を乗り越え次の行動に移している。

③ 人的・物的資源等の効果的な活用

●外部講師から「対話」について学ぶ

葵小学校の全ての教育活動のベースとなるのが「対話」である。これは、ただ話し合ったり議論したりするというだけではなく、相手の言葉を受け止め、その奥にある願いに気づき、安全・安心の場を作り出すことが真の「対話」である。このように真の対話を学び対話の時間のカリキュラムを作るために外部講師を積極的に活用した。

<対話の時間の授業の様子>



「人生の輪」という授業。子どもが今何を大切にしているか自分自身を知るための授業。

●GIGA端末の活用

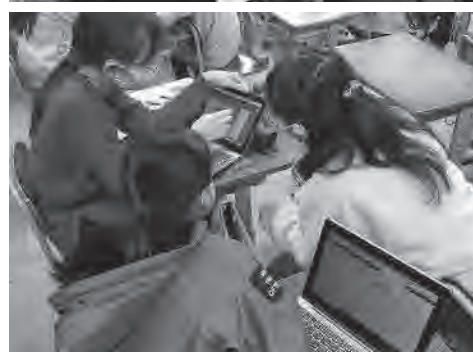
1人1台のタブレット端末を活用することで様々な効果があった。

直接話し合わずに交流できる

新型コロナウイルスが流行し、話し合いを制限せざるを得ない状況で、授業支援ソフトを活用し児童が考えを交流することができた。交流の方法は、お互いの考えにキーボードを使ってコメントをする、スタンプでよいと思うところに印をつけるなどである。

GIGA端末で話し合いを支援する

学習支援アプリを活用することで、児童がお互いの考えを比較したり分類整理したりしやすくなった。考えを画面で可視化しながら共有できることが効果的である。6年理科「てこのはたらき」の単元では、身近な道具にも手この仕組みが使われていることを知り、どのようなものに使われているか調べて発表した。児童は、お互いに見つけた道具について紹介し合い、それぞれの道具のしくみを解説していく中で、支点・力点・作用点の位置で力の加わり方が変わること気付いていた。



字の形がとれない児童にとってキーボードでの入力が考えを記述する助けになっていた

文字を書くことに課題がある児童は、キーボードで考えを入力することで、時間を短縮でき課題について自分で考える時間が確保できるようになった。例えば、授業のめあてをノートに写すことは、字の形がとれない児童にとって非常に時間とストレスのかかる作業であった。しかし、ノートアプリとキーボードでの入力を行うことで、作業時間が大幅に短縮されていた。また、授業の内容を見返すときにも見やすいものになっていた。

■①～③に取り組む中で見えてきたもの

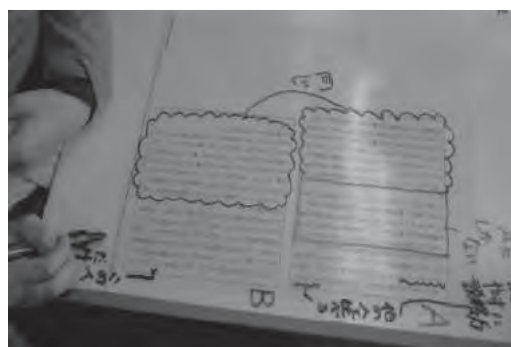
最も強く感じたことは、カリキュラム・マネジメントが、なにか特別に新しい取組で、時間と労力のかかることだということでは間違っているということである。これまでも学校では、教科横断的に授業をする場面もあり、地域（外部）の人材を活用してきた。大きな違いはないと感じている。カリキュラム・マネジメントの取組で何が変わったか。それは、教職員の意識ではないか。学校教育目標の見直しを通して、ビジョンを共有できた。そのおかげで、教職員の目指す方向が同じになった。この点から、葵戦略会議のように学校のビジョンを教職員全員で共有することはカリキュラム・マネジメントを進めるうえで、非常に重要であると考えられる。ビジョンが共有できると、そこに向かうための方法も共有できる。同じ目的に向かって進めるようになるのがカリキュラム・マネジメントの効果である。

葵小学校では「人間関係力」を育成するために自分を適切に評価する力を大切にしている。そのための授業として、次の4つのことを重点単元で取り組んでいる。

- ① 児童が自ら学習課題を立てる。
- ② 解決のための学習計画を考える。
- ③ 何ができるようになれば良いか児童と考える。
- ④ 振り返りの場面を充実させる

カリキュラム・マネジメントでビジョンを共有したことでこのような取組が、全学年で行われている。

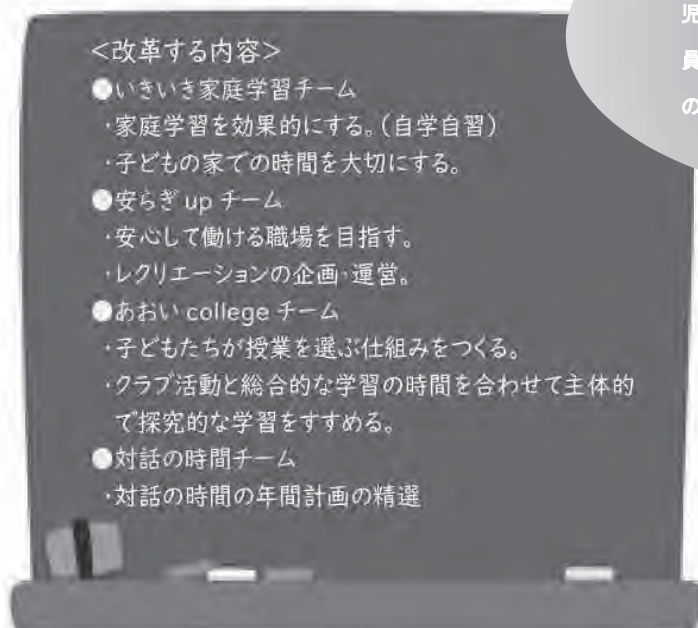
<5年生がルーブリックを作っている場面>



また、カリキュラム・マネジメントと働き方改革は、関連しているところがたくさんあると感じている。学校は、「例年通り」「去年やったから」という理由で様々な取組をしている。しかし、学校のビジョンを共有し、目指すゴールが明確になったとき、その取組が本当に効果的で必要な物かどうかを見直すことの大切さに気付くことができた。「人間関係力」を育てるために、本当に必要な取組は何なのかを考えて実践していった。

本校では次のような取組ができた。

●学校の当たり前を見直す



家庭学習の在り方を見直す。クラブ活動が児童にとって本当に意味があるのか。教職員がもっと働きやすい職場にしよう。対話の時間が学校の文化になればいいな。

これらは、単に教職員の働き方の問題ではなく、児童の「人間関係力」を育てるという視点でも考えられたものである。

どうすれば、児童の力を効果的に育てられるのか、同じ方向を向いて教育活動を計画、実践し、見直して改良していくのがカリキュラム・マネジメントではないかと考えている。

5 成果と課題

■成果

- ・教職員が、目的に向かって、チームとして働いている。
- ・必要なものが明確になったので、無駄な取組が減った。
- ・1時間の授業のねらいにどのように迫るかはもちろんだが、単元を通して児童にどのような力を付けたいかや、年間を通して児童のどんな姿を望むかを考えて、授業や行事に取り組む先生が増えた。
- ・学年会を中核にカリキュラム・マネジメントを進めているので、学年で授業のことについて話し合い授業力の底上げができていると感じるとともに、教材を共有できるので教材研究の時間を減らすことができた。
- ・対話の時間をベースにしてカリキュラム・マネジメントを進めたことで、教職員の児童の見方が変わったり、子ども同士でお互いの見方が変わったりしている。
- ・児童が、対話の時間で学習したことを生かして、自分たちでトラブルを解決する姿があったり、相手の言動の奥にある願いを探ろうとしたりしている。
- ・人間関係力の中でも自分を適切に評価する力を付ける授業として、児童が課題設定をして学習計画を立てたり、児童と教師とで目指すゴールの姿を設定したりすることで、何ができて何ができなかったか適切に振り返ることができる児童が増えた。
- ・ICT機器を活用する中で、書字に困りのある児童にとって効果的に学習を進める支援になることがわかった。
- ・ICT機器を活用した授業では、知識を増やしたり、技能を身に付けたりするものより、お互いの考えを比べたり整理したりするもののほうが効果的に活用できる。

■課題

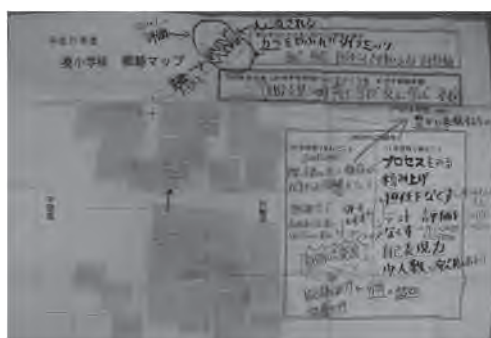
- ・教職員の異動でメンバーが変わったときにどのように共通理解を図るか
→今年度は、授業ラボ・対話ラボとして新着者・若年者・希望者を対象にしてラボ形式の研修を行った。必要な人に必要な研修を実施できた。必要のない人にとっては空いた時間を効果的に使うことができた。
- ・取組や成果を共有すること
→ほっとはあとボードを職員室に設置し、研修の振り返りや日々感じたことを掲示できるようにしている。
- ・個人によって取組に対する温度差を多少感じる。
→学年会をどのように進めていくかが重要になると考える。すべての教職員にとって安全・安心の場になるように粘り強く対話をしていく必要がある。
- ・人的物的資源の活用については、学校の環境によって差があったり、新しく開発するのに時間がかかったりする。
→何が必要かカリキュラムを見直す中で、必要なことについては全教職員で取り組む。

6 おわりに

■ 2年間のスケジュール

<令和元年度> 1年目

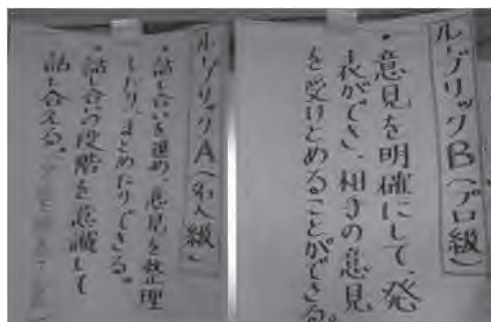
月	取組内容	
4月	学年会の設定（どんな学年会にしたいか・自分はどうかかわるか）	P
5月	校内研究会（児童とルーブリックを作る）	D
6月	校内研修会（あおいグリッドについて）	D
7月	第1回ファシリテーター養成講座（講師：渋谷先生）	D
8月	第2回ファシリテーター養成講座（講師：渋谷先生）	D
9月	校内研究会（取組の振り返りと計画を立てる）	C・A
	第1回研究授業 4年国語科（指導助言：奥村先生）	D
10月	第2回研究授業 6年体育科（指導助言：徳島先生）	D
11月	働き方改革4部会（評価・改善）	C・A
12月	第3回研究授業 1年生活科（指導助言：奥村先生）	D
1月	研究発表会準備	D
2月	研究発表会	C・A
3月	学校休校	



<戦略会議>

「自分らしき発見」をキーワードに、児童の姿を保護者と教職員で話し合った。

児童が自分のことを理解して、自分のしたいことや課題を明確にしている姿を目指すようにした。



<ルーブリックを児童と作る>

単元でどんなことができればよいのか児童自身が明確にできているようにする。モデルを提示して分析するという方法でルーブリックづくりを進めた。ゴールが明確になると、積極的に課題に向かったり自己評価が適切になったりする。

＜令和2年度＞2年目

月	取組内容	
4月	葵戦略会議 第1回校内研究会（研究の提案）	P
5月	反転授業研修会（講師：小林先生）	D
	第1回ファシリテーター研修（講師：渋谷先生）	D
6月	学年会の設定	P
	第2回校内研究会（働き方改革部会・年間計画見直し）	P
7月	第3回校内研究会（授業ラボ・対話ラボの提案）	D
8月	第1回授業ラボ 第1回対話ラボ	D
	第2回ファシリテーター研修（講師：渋谷先生）	D
9月	第2回対話ラボ（怒りのワーク）	D
	第4回校内研究会（2学期の研究の進め方）	C・A
10月	第2回授業ラボ（ルーブリックの作り方）	D
11月	第3回授業ラボ（社会科の課題設定・学習の流れ）	D
	第3回対話ラボ（人生の輪）	D
12月	研究報告会準備	D
1月	研究報告会	C・A
2月	働き方改革部会（振り返りと評価）	C・A
3月	葵戦略会議（今年度の総括と来年度について）	P



＜対話ラボ＞

新採の先生が、対話ラボで学んだことを基に学級で対話の時間の授業を行った。対話ラボで実際に自分で体験できたので対話の時間の雰囲気や流し方がよく分かった。



＜授業ラボ＞

ルーブリックづくりの授業ラボ。ルーブリックを児童と作るイメージはなかなか持ちにくい。この模擬授業を通してイメージをもつことができた。希望者や新着者対象なので、必要な人に必要な時間となった。

7 編集後記的な自由記述

<校長>

カリキュラム・マネジメントを推進するうえで、学年会の機能化による自律的・協働的な学校組織改善が重要であると考えている。とりわけ、学年会運営の中心を成すミドルの役割を見直す必要がある。教職員が安心して思いや考えを共有しやすい雰囲気醸成できる学年会に改革するためには、ファシリテーションスキルが求められる。今後は、対話を促進させるためのファシリテーションスキルの向上に特化した研修を企画することが課題であると考えている。

<教頭>

学校教育目標の検討、育成を目指す資質・能力の設定を教職員全員で話し合うところからスタートするスタイルや、週案・学年会等で常にPDCAサイクルが意識されているなど、カリキュラム・マネジメントが浸透している証である。全教職員が話し合いを共有し、同じ方向を向いて子どもたちに関わることで学校としての組織力もあがると考える。

引き続き「チーム葵」の団結を強め、コロナ禍においても学びを止めないカリキュラムを推進していきたい。

<教務主任>

「対話」やカリキュラム・マネジメントの学習・研修を通して、児童や教職員の個々の思いを学校全体の思いに引き上げ、まとめていく過程を体験できた。これまでの学校の常識や当たり前を自由な発想で見直す取組を始められたのは「対話」・カリキュラム・マネジメントを進めてきたからである。コロナ感染防止対策で取組は足踏みしているが、ICT活用など大きく進んだこともある。今までの成果を振り返り、更に自由な発想で新たな取組を創造していけたらと思う。

<研究主任>

カリキュラム・マネジメントを進めていくことで、教職員全員が当事者意識を持てるのではないかと考えている。みんなが同じ方向を向いて同じ方法で取組を進めることがカリキュラム・マネジメントでは重要である。

本校で取り組んだ葵戦略会議は、これまで自分が経験してきた学校教育目標の決め方と大きく異なっていた。みんなで決める（見直す）ということがこんなにも効果的なのだと改めて実感できた。戦略会議はこれからもやっていきたい取組の1つだ。

<学校運営主任>

教員と共に研究を深め合うことに抵抗を感じていたが、安全・安心な場を尊重しながら対話を学ぶ葵校の研究に導かれ「事務職員立場」で研究参画を果たしている。共に学ぶことで、授業・研究に必要な教材選択、教材改善、執行について教員の事務的負担軽減にもつながっている。また、単元授業の経費における留意点を可視化することで次につながると確信している。カリキュラム・マネジメントの取組を通して、事務職員の存在意義や意欲に繋がりを感じ、子どもへの教育に寄与している喜びを日々実感している。

令和2年度 6年 関連単元配列表 (学習年間計画)

人間関係力

反転授業

京都市立葵小学校

期	1学期							2学期					3学期			時数
月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3				
対話			輪になって 質問会議 (適宜)	自分は〇〇 カウントアップ	怒りのフーク	エンバシーサークル	題材に向けて よりよい「調停 (お助け)」 とは		自分たちの調停	人生の輪	自分は自分	違いは豊かさ		11		
総合	英カレッジ (35h) 児童の興味関心に沿って探究的な活動を適宜行う。 Let's introduce 葵 (35h)												70			
国語	言葉の準備運動「つないで、つないで、一つのお話」① 詩を楽しもう「春の回」① 視点のちがいに着目して読み、感想をまとめよう「帰りの道」④ 本は友達「地域の施設を活用しよう」① 漢字の形と音・意味② 「春のいきき」②	話の内容をとらえて、自分の考えをまとめよう「聞いて、考えを深めよう」⑥ 漢字の広場1① 筆者の意図をとらえ、自分の考えを発表しよう「笑うから楽しい」「時計の時間と心の時間」【情報】主張と事例⑦ 話ごとごと書き言葉①	言葉を選んで、短歌をつくろう「花のしみま」③ 文の組み立て② 声に出して楽しもう「天地の文」① 【情報】集めるときに使う「情報と情報をつなげて伝えるとき」②	具体的な事実や考えをもとに、提案する文章を書こう「私たちにできること」⑩ 夏のさかり② 本は友達「私と本」「森へ」⑤	詩を味わおう「せんねんまんのん」④ 対話の練習「いちばん大切なものは」② 生活の中で読もう「利用案内」③ 生活の成り立ち③ 熟語の成り立ち③ 漢字の広場2①	作品の世界をとらえ、自分の考えを書こう「やまなし」「イーハトーブの夢」⑧ 言葉の変化② 秋深し② 目的や条件に応じて、計画的に話し合おう「みんなで楽しく過ごすために」「伝えるにしたいことを伝える」⑥	漢字の広場3① 表現の工夫をとらえて読み、それをいかして書こう「『無敵城』を読む」「『情報』調べた情報の使い方」「『日本文化を発信しよう』⑪ 伝えられてきた文化「古典芸能の世界」演じて伝える① カンジ博士の漢字学習の秘伝② 漢字の広場4①	漢字を正しく使えるように覚えておきたい言葉② 伝統文化を楽しもう「狂言」「枕山状」④ 書き表し方を工夫して、経験と考えを伝えよう「大切にしたい言葉」⑥ 漢字の広場5① 冬のおとずれ②	詩の楽しみ方を見つけてよう「詩を鑑賞しようかいいい」② 伝名(由来)① 筆者の考えを読み取り、社会と生き方について話し合おう「メディアと人間社会」「大切な人と深くつながるために」「プログラミングで未来を創る」⑥ 漢字を正しく使えるように覚えておきたい言葉②	言葉について考えよう「入りを引きつける表現」③ 伝えたいことを明確にして書き、読みあおう「思い出を言葉に」⑦ 資料を使って、効果的なスピーチをしよう「今、私は、ほくほく」⑥	漢字の広場6① 登場人物の関係をとりえ、人物の生き方について話し合おう「命の命」⑥ 卒業するみなさんへ「中学校へつなげよう」「生きる」「今、あなたに考えてほしいこと」④		175			
社会	わたしたちのくらしと日本国憲法⑦	国の政治のしくみと選挙④ 震災復興の願いを表現する政治⑦	縄文のむらから古墳のくむら⑧	天皇中心の国づくり⑥	貴族のくらし③ 武士の世の中へ⑥ 今に伝わる室町文化④	戦国の世から天下統一へ⑥ 江戸幕府と政治の安定⑥	町人の文化と新しい学問⑨ 明治の国づくりを進めた人々⑦	世界に歩み出した日本⑥	長く続いた戦争と人々のくらし⑦ 新しい日本、平和な日本へ⑨	世界の中の日本 日本とつながりの深い国々⑦	世界の平和と日本の役割⑥		105			
算数	わくわく算数学習① 対称な図形⑩ 文字と式⑧	分数×整数、分数÷分数③ 復習② 分数×分数④	分数÷分数⑦ 資料の調べ方⑩	わくわく算数ひろば③ 復習②	円の面積⑥ 立体の体積⑦ 比とその利用⑨	表を使って考えよう(1)② 復習② 図形の拡大と縮小⑫	およその形と大きさ③ 比例と反比例⑩	表を使って考えよう(2)③ わくわく算数ひろば④ 復習②	場合を順番よく整理して⑪ 図を使って考えよう③ わくわく算数ひろば④ 6年のまとめ⑧		ひろがる算数⑥		175			
理科	わたしたちの生活と環境理科の学び方⑤ ものの燃え方⑩	植物の成長と日光の回り⑤ 体のつくりとはたらき①	植物の成長と水の回り⑥	生物どうしの回り⑦ 自由研究②	月と太陽⑧	水よう液の性質⑫	土地のつくりと変化⑫	てこのはたらき⑪	わたしたちの生活と電気⑪	生物と地球環境⑨			105			
音楽		歌声をひびかせて心をつなげよう⑥	旋律の特徴を生かして表現しよう③	いろいろな音の響きを感じ取ろう⑧	曲の変化を感じ取ろう⑨	詩と音楽の関わりを味わおう⑤	日本や世界の音楽に親しもう④	音楽を思いを伝えよう④	音楽で思いを伝えよう③				42			
図画工作		わたしの大切な風景⑥		ひらいてみると②	物語から広がる世界⑦	筆あとと研究所② 版から広がる世界⑤	1枚の板から⑥	墨で表す② ドリームプラン④	味わってみよう和の形① 12年後のわたし⑤				44			
家庭	家庭科の学習を始めよう① 私の仕事と生活時間②	思いを形に 生活に役立つ布製品⑮	夏を涼しくさわやかに⑧	朝食から健康な1日の生活を⑩	朝食から健康な1日の生活を⑩	まかせてね今日の食事⑩	冬を明るく暖かく⑥	冬を明るく暖かく	あなたは家庭や地域の宝物④	あなたは家庭や地域の宝物④			55			
育体		タグラグビー⑤ リズムダンス⑩	たくらぐビー②	体ほくしの運動③ サッカー⑨	サッカー マット運動⑥	病気の予防④ 走り高跳び⑥	なわとび ジョギング⑤	とび箱運動⑥	バスケットボール⑥ 病気の予防④	バスケットボール③			69			
道徳		せいいっぱい生きる① 自由と責任①	長所と短所① 男女ともしんらいして① 学校を愛する心①	その国のまことと伝統① 感謝の心① たいせつな生活リズム①	明るく生きる① 働くことの意味①	家族の幸せ① 集団の一員として① 真理を求めると①	持続可能な社会① 理解し合いたいせつさ① 美しい心①	ほこりある郷土① 終わりのなきちょうせん② 広く受け入れる心①	深い思いやり① 夢をいだき生きる喜び①				26			
特活	日常的・継続的に指導する内容 (保健・給食・通園など) は適宜時間をとり、年間35時間行う。												35			
外国語		Unit 1 This is me⑥ Unit 2 Welcome to Japan⑧	Unit 3 What do you want to watch?⑥ Review 世界の友達1①	Unit 4 My summer Vacation⑧	Unit 5 He is famous. She is great⑥	Unit 6 This is my town.⑧ パフォーマンスチャレンジ①	Unit 7 My Best Memory⑥ 言葉について考えよう Review 世界の友達2①	Unit 8 What do you want to be?⑧	Unit 9 Junior High School Life⑧	パフォーマンスチャレンジ① Review 世界の友達3①			70			
行事	預り金計画作成 ジャガイモ (前年3月準備)	ホウセンカ		葵スポーツフェスタ					修学旅行 葵アートフェスタ							
その他				紫キャベツ			版権版本文 修学旅行下見 書初め画山紙	修学旅行費用確定								

資料①

令和元年度 ☆あおいGlid☆

	ステップ1	ステップ2	ステップ3
段階	低学年	中学年	高学年

主体力				
自分軸をもち自ら課題を見つけ解決しようとする				
課題設定	・自分のしたいことが選べる。	・適切に課題を設定することができる。	・課題を見直し修正しながら活動を進めることができる。	知識及び技能
気づき	・何を学んで何ができるようになったかわかる。	・既習の知識や技能を使って考えることができる。 ・身に付けた力をどこでどのように発揮するか考えることができる。	・常に新しい方法や他のアイデアを考えている。	思考力・判断力・表現力等
課題解決	・課題を解決するため意見を出している。	・課題を解決するための道筋を考えることができる。 ・知っていることをもとに予想することができる。	・課題に合ったパフォーマンスをすることができる。	思考力・判断力・表現力等
	・失敗を恐れず挑戦する。	・最後まであきらめず粘り強く取り組んでいる。	・失敗や困難を乗り越え次の行動に移すことができる。	学びに向かう力・人間性等

成長力				
自分や自分達の活動を振り返り、自分の成長を実感し自分軸をもつ				
自分軸	・なりたい自分について考えることができる。	・なりたい自分をもっている。	・一人ひとりが自分の目標に向かって進んでいることを認め合っている。	学びに向かう力・人間性等
メタ認知	・自分ができることできないことがわかる。	・自分の力を伸ばすために必要なことがわかる。 ・自分で考えて行動する。	・活動の中で自分の良さを生かし、リーダーシップを発揮して成果を出している。	思考力・判断力・表現力等
振り返り	・これまでの学習を振り返り良かったことや改善点に気づいている。	・学んだことが他のこととつながっていることに気づいている。	・学んだことを他の教科の学習や活動と関連付けて考え実践している。	思考力・判断力・表現力等

協働力				
友達と学び友達から学ぶ力・友達と協力してより良い活動にする				
表現	・より良い聞き方を考えている。 ・友達の思いや意見を否定せずに聞いている。	・人の話を共感的に聞くことができる。(傾聴) ・友達の意見をもっと聞きたいと考えている。	・多様な価値を認める。 ・相手の思いを受け止める。	知識及び技能
	・相手に聞こえる声で話す。 ・自分の思いや考えが言える	・話すときに聞く人のことを考えている。 ・思考ツールを活用し、自分の考えが伝わるように話す。 ・考えを言語化する。	・根拠を明確にして自分の考えを説明できる。	知識及び技能
	・友達と話し合えることができる。	・目的に応じた話し合いができる。 ・自ら進んで課題に対して話し合おうとしている。	・話し合う良さに気づき、話し合うことでより深い考えをもつことができる。	思考力・判断力・表現力等
考えの違い	・違う意見や考えがあることを知る。 ・考えが違っていてもいいことを理解している。	・相手の話を受け止めて、自分の考えをもつことができる。	・安心して考えを出し合うことができる。 ・自分と違う考えを受け止め考えを再構築する。	思考力・判断力・表現力等
質問	・分からないことなどを積極的に質問しようとしている	・話題に沿って、建設的な質問ができる。	・本質を問う質問をしようとする。	知識及び技能
関わり	・友達の良いところを見つけることができる。	・見つけた良さをみんなで共有している。	・自分や友達のありのままを認め合う。	学びに向かう
	・誰かと何かを作ることができる。	・お互いの考えを共有し考えを練り上げながらより良いパフォーマンスをしている。	・他者のために自分の力を発揮する。 ・欠点を補いあうことができる。	学びに向かう力・人間性等

令和2年度 ☆人間関係力 あおいGlid☆

	ステップ1	ステップ2	ステップ3
--	-------	-------	-------

自分を適切に評価する力			
課題設定	・自分のしたいことを選んでいる。	・友達や先生と協力して、最も良い課題を選んでいる。	・自分で適切に課題を設定している。
学習計画	・課題を解決するため意見を出している。	・これまでの経験や知識から、課題について予想し、解決するための道筋を考えている。	・課題解決に向けて、計画を修正しながら取り組みを進めている。
振り返り	・何を学んで何ができるようになったかわかる。	・身に付けた力どうしのつながりに気付いている。	・つなげた力をどこでどのように発揮するか考えている。

相手に共感し、お互いの自分らしさを認め合う力			
考えの違い	・違う意見や考えがあることを知り、考えが違っていてもいいことを理解している。	・相手の話を受け止めて、自分の考えをもつことができる。	・安心して考えを出し合う中で、自分と違う考えを受け止め考えを再構築する。
関わり合い	・友達の良いところを見つけている。	・見つけた良さをみんなで共有している。	・他者のために自分の力を発揮する。 ・欠点を補いあっている。
	・誰かと何かを作っている。	・お互いの考えを共有し考えを練り上げながらより良いパフォーマンスをしている。	
自分軸	・なりたい自分について考えている。	・なりたい自分をもっている。	・一人ひとりが自分の目標に向かって進んでいる。

対話しながら試行錯誤し新たな価値を生み出す力			
聴く	・より良い聞き方を考えている。 ・友達の思いや意見を否定せずに聞いている。	・人の話を共感的に聞いている。(傾聴) ・友達の意見をもっと聞きたいと考えている。	・多様な価値を認めている。 ・相手の思いを受け止めている。
話す	・相手に聞こえる声で話す。 ・自分の思いや考えが言える。	・話すときに聞く人のことを考えている。 ・思考ツールを活用するなど、自分の考えが伝わるように話している。 ・考えを言語化している。	・根拠を明確にして自分の考えを説明している。
質問	・分からないことなどを積極的に質問している。	・話題に沿って、建設的な質問をしている。	・本質を問う質問をしようとする。
課題解決	・何事にも挑戦している。	・最後まであきらめず粘り強く取り組んでいる。	・失敗や困難を乗り越え次の行動に移している。

あおい学びのPLAN 『体育科』

単元名 器械運動「マット運動」

6年1組 指導者 北田 朋也

1 めざす資質・能力

人間関係力	<ul style="list-style-type: none"> 話し合う良さに気づき、話し合うことでより深い考えをもつことができる。 お互いの考えを共有し考えを練り上げながらより良いパフォーマンスをしている。
自己評価力	<ul style="list-style-type: none"> 一人ひとりが自分の目標に向かって進んでいることを認め合っている。 活動の中で自分の良さを生かし、成果を出している。

2 児童について

本学級の児童は、グループでの話し合いや学習活動に対しては、とても協力的で意欲的に活動することができる。しかし、集団や個人の取組となると、自ら課題をもって活動することに消極的になってしまいうことが多い。学級会や学校行事を通して対話することで、一人一人の違いを意識し、その違いを認め合い、支え合えるよう心掛けてきた。また、毎日ふりかえりカードを使って、一日の課題を立て、振り返ることで、自己評価力を高められるようにしている。

3 単元の目標

- ・マット運動の楽しさや喜びを味わい、その行い方を理解するとともに、回転系や巧技系の基本的な技を安定して行ったり、その発展技を行ったり、それらを繰り返したり、組み合わせたりすることができるようにする。
- ・自己の能力に適した課題の解決の仕方や技の組み合わせ方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができるようにする
- ・運動に積極的に取り組み、約束を守り助け合って運動をしたり、仲間の考えや取組を認めたり、場や器械・器具の安全に気を配ったりすることができるようにする。

4 単元の評価規準

知識及び技能	マット運動の楽しさや喜びを味わい、その行い方を理解するとともに、回転系や巧技系の基本的な技を安定して行ったり、その発展技を行ったり、それらを繰り返したり、組み合わせたりすることができる。
思考力・判断力・表現力等	自己の能力に適した課題の解決の仕方や技の組み合わせ方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができる。
主体的に学習に取り組む態度	運動に積極的に取り組み、約束を守り助け合って運動をしたり、仲間の考えや取組を認めたり、場や器械・器具の安全に気を配ったりすることができる。

5 単元について

昨年度のマット運動では、児童一人一人の能力にあった練習の場を確保し、多くの児童の意欲と技能を高めるために、場の設定を増やしたり、工夫したりしてきた。しかし、学習が進むと技能の差がより大きくなり、マット運動が苦手な児童は、技能の向上をあきらめてしまうという課題も見られた。そこで今回は技を行うタイミングや隊形、取り入れる技などを工夫しながら演技を創り上げていく「シンクロマット」を取り入れることで、能力に関係なく、友達とかかわり合いながら運動を楽しみ、意欲が高まり、主体的に練習に取り組むことによって、技能の向上も図れるのではないかと考えた。また、新学習指導要領における3つの評価観点をより良く見取るための、タブレット端末の活用や、学習カードの工夫、児童の記述記録から効果的に評価することのできるループリックの作成に取り組んでいきたい。

6 ループリック（※別紙参照）

7 単元計画図

- ①これまでの学習を振り返り、学習課題を立てる。
- 学習のねらいと進め方を知る。
- ・試しのシンクロマットの演技を体験し、シンクロマットの楽しさに触れる。

仲間と協力し、一人一人の良さが輝く、シンクロマットを作り上げよう。

- ねらい①シンクロマットに取り入れる技に挑戦する。
- ねらい②シンクロマットに挑戦する。

- ②シンクロマットの演技を考える。
- ③技をするタイミングを工夫し、練習に取り組む。
- ④隊形や技をする方向を工夫し、練習に取り組む。
- ⑤取り入れる技を見直し、練習に取り組む。(本時)
- ⑥発表会に向けて、練習に取り組む。

- ⑦シンクロマット発表会をする。
- ・ヒーローインタビュー形式で学習の振り返りをする。

8 他教科とのつながり

- ・修学旅行の活動グループで学習を進めることで、シンクロマットで深めた仲間意識やチーム力を生かし、より充実した修学旅行となるようにする。
- ・技能や考え方が様々な仲間と共に、共通する課題をもち、その解決に向けて対話を通して協力したり、励まし合ったりする大切さに気づくことで、今後の学習活動や縦割りグループ活動に生かせるようにする。

9 本時の目標

取り入れる技やタイミングを工夫し、仲間と対話しながら、より良い演技を考えることができる。

10 本時の学習計画

学習活動・内容・予想される児童の反応	*支援 ・評価（方法）										
<p>1. 場の準備・体ほぐしを行う。</p> <p>2. 学習課題の確認。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>取り入れる技やタイミングを工夫し、演技をレベルアップさせよう。</p> </div> <p>3. ねらい②「シンクロマットに挑戦する。」に取り組む。</p> <p>○取り入れる技やタイミングを工夫し、前時までのシンクロマットの演技を工夫し、練習する。</p> <p>《予想される児童の反応》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前転をとび前転に変えて、よりダイナミックな演技にしたいな。 ・○○さんは補助ありの倒立前転ができるようになったから、演技に取り入れよう。 ・側方倒立回転にすると、スペースが狭くなるから、タイミングをずらした演技にしてみたらどうかな。 <p>【学習の場】</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px 0; text-align: center;"> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="border: 1px solid black; padding: 5px;">部分練習の場</td> <td style="border: 1px solid black; padding: 5px;">部分練習の場</td> <td style="border: 1px solid black; padding: 5px;">部分練習の場</td> <td style="border: 1px solid black; padding: 5px;">部分練習の場</td> <td style="border: 1px solid black; padding: 5px;">舞台</td> </tr> <tr> <td style="border: 1px solid black; padding: 5px;">部分練習の場</td> <td style="border: 1px solid black; padding: 5px;">通し練習の場</td> <td style="border: 1px solid black; padding: 5px;">通し練習の場</td> <td style="border: 1px solid black; padding: 5px;">部分練習の場</td> <td style="border: 1px solid black; padding: 5px;"></td> </tr> </table> </div> <p>4. 本時の振り返りをする。</p> <p>○チームごとに本時の学習を振り返り、次時の学習課題をもつ。</p>	部分練習の場	部分練習の場	部分練習の場	部分練習の場	舞台	部分練習の場	通し練習の場	通し練習の場	部分練習の場		<p>*仲間と協力し、安全に気を配り、準備や体ほぐしを行っている。主【毎時：観察】</p> <p>*技カードや場の設定例を用意することで、自分の課題に合わせた場の工夫や練習の方法を選ぶことができるようにする。</p> <p>*タブレット端末や技の映像資料を用意することで、仲間とアドバイスし合いながら学習できるようにする。</p> <p>*通し練習の場、部分練習の場を用意し、ローテーションすることで、より充実した活動ができるようにする。</p> <p>*演技構成カードを用意することで、より活発な話し合いができるようにする。</p> <p>・仲間と対話しながら、取り入れる技やタイミングを工夫した、より良い演技を考えることができる。思【観察・カード】</p> <p>*チームの話し合いや学習の様子での良い姿を全体に紹介することで、価値づけし、今後の活動に生かせるようにする。</p>
部分練習の場	部分練習の場	部分練習の場	部分練習の場	舞台							
部分練習の場	通し練習の場	通し練習の場	部分練習の場								

第1回 校内研究会

令和2年4月8日(水)
京都市立葵小学校
研究部

<令和2年度 研究の概要>

1 学校教育目標

～対話する学校～ **友に学び 共につくる 葵校**

2 研究主題

対話する学校

～『業務効率を高め教育の質を上げ隊(たい)！』の
対話型学校マネジメントによる省察的実践～

3 今年度の研究で葵の子どもに付けたい力

人間関係力

- ・自分を振り返り、適切に評価する
- ・お互いの自分らしさを認め合う
- ・対話を通して相手に共感する
- ・対話し、試行錯誤しながら新たな価値を生み出す

4 昨年度までの実践

☆アクティブラーニングの視点での授業改善

1. 主体的な子どもたちの姿を目指して、自ら課題を見つけ、学習の計画を立てる。
2. 対話的に学習を進め、学び合いながら考えを深めていく。
3. 学習を振り返り、学んだことを確かなものにする。

効果的な方法・タイミングで適切に振り返りを行うことが重要。

→このような学習のプロセスを大切に、深い学びにつなげていくということ。

→「深い学び」とは、知識・技能が相互に関連付けられ、構造化されたり身体化されたりして高度化し、適度な態度や汎用的な能力・概念的な知識となって自由自在に使いこなせるようになること(田村学:國學院大學)

☆対話の時間とは

対話の時間が目指す子ども像・内容(対話の時間の冊子参照)

どんな授業をしたか(学習系に研究の映像があります。)

☆働き方改革(生き方改革)

時間を削減するための改革ではなく、幸せな働き方を目指した改革。

それぞれの自分軸(本当にやりたいこと)を大切に取組を進める。

学校のあたりまえを見直し、葵の子と葵の教職員に必要な取組を進め、不要な取組を減らす。

<昨年度のプロジェクト>

評価改善チーム **安らぎUPチーム** **いきいきホームデイチーム** **あおい college チーム**

☆カリキュラム・マネジメント

付けたい資質・能力をもとに学校全体のカリキュラムを見直し、それぞれの取組を効果的に関連させる。

実践→振り返り→共有のサイクルを繰り返し、付けたい資質能力を高めていく。(学年会を核に)



特に、子どもが自ら課題を見つけ、学習計画を立てて学習を進め、何をどのように学び何ができるようになったかメタ認知できるようにすることは今年度の研究とかかわりが深いので確認してください。

5 校内研究の重点

☆働き方改革の推進

昨年度のプロジェクトを見直しメンバーを再編してさらに取組を進める。

<プロジェクト>

○対話の時間チーム

*懇談会で対話の時間できないか?

○あおい college チーム

*クラブ活動と総合の35時間を使って、子どもが学びたいことを探求的に学ぶ

○安らぎ up チーム

○いきいきホーム day チーム

☆育成を目指す資質・能力を効果的に高めるカリキュラム・マネジメントの実践

学年会の設定 **学年会を始めるにあたって、自分のニーズに気づく対話の時間を行う。**

関連単元配列表の活用(重点化) 4大フェスタ キャリアパスポート あおい Glid の改善・完成(めざせ75点)



あおい Glid とは、数値化しにくい「人間関係力」という力を適切に見取るための評価指標のこと。3人程度焦点化してインタビューや振り返りカードから子どもの言葉を拾い上げて完成を目指す。

<考え中>

- ・子どもと共有するかどうか?

☆授業改善

→ルーブリックの設定、パフォーマンス評価の実施

田村知子先生は、ルーブリックやパフォーマンス評価、カリキュラム・マネジメントに関する書籍をたくさん出されています。

*学年で重点教科、重点単元を決めて見直しをもって取り組みましょう。



上の3つは別々ではなく関わりあって進んでいくものです。その中心にあるのが人間関係力。

☆教職員ファシリテーター養成講座 7月・8月25日・12月24日(1月6日)

年3回の実施(3回とも必ず出席してほしいと思っています。3回で1セットです。)

講師:渋谷聡子先生

*教師が教える授業ではなく、教師がサポートする授業に変わっていくのがこれからの授業。

☆授業 LABO 対話 LABO

授業・・・主体的で対話的な深い学びを目指した授業改善
 学習課題・学習計画の設定のしかた
 子どもとルーブリックをつくる
 ふたば会とタイアップして休業中に取り組みを進める。

対話・・・対話の時間とは
 対話の授業をどうやって進める

などなど、疑問や希望を聞きながら進めていく。

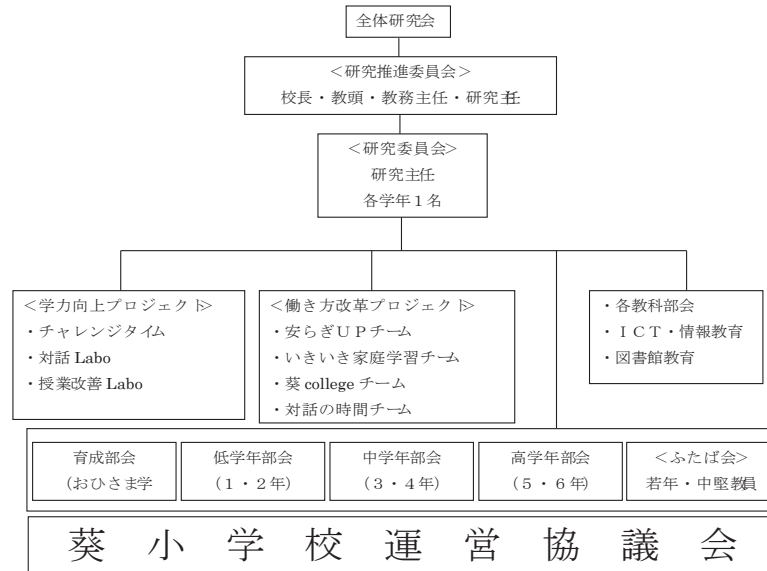
6 研究の評価

☆あおい Glid で「人間関係力」を評価する。
 ☆葵いきいきアンケートで評価する。

7 年間計画館(あまいやつ)

- 4月10日(金) 研究提案
- 4月 } 学年会の設定・年間カリキュラム作成(重点化)
- 5月 } 働き方改革プロジェクトの各部会から提案
- 6月 } 授業 LABO
- 7月 } 対話 LABO
- あおい Glid 会議
- 10・11月 校内研究(授業研究)
何年がずるかな♪何年がずるかな♪チャラチャチャチャチャラチャチャ♪
- 12月 研究冊子・指導案作り
- 1月 研究発表会
 - *全クラス対話の時間をする。
 - *午後,教科の授業3クラス

8 研究組織



9 その他

☆実践→振り返り→概念化のプロセスを繰り返しながら研究を進めていく。
 学年会の設定(ワークシートあり)
 ☆実践したものを写真やデータで残していく
 ワークシートなどの資料はセンターサーバーに写真や映像は学習系に保存する。
 →研究のフォルダをつくっておきます。

10 当面の予定

☆各学年で,関係単元配列表を作る(人権の学習も位置付ける◎みたいに)
 *学年で,効果的に人間関係力を高めるために単元を焦点化して
 ☆総合の単元見直し(4~6年生は35時間です)
 ☆教室掲示物の確認
 →各教室にありますか?なかったら作るのと言ってください。
 (態度目標,質問の技,話し合いのスキル,振り返りの視点,課題などの黒板に貼るやつ)
 ☆コミュニティーボードを各学年で取ってください。
 →資料室前にあります。(1年生の分は新しいのを買いますので少しお待ちください。)
 →ペンは各学年で確認して使えないものは新しいものに交換してください。(新しいものは事務室にあります)

学校現場でも PDCA サイクルがよく聞かれるようになりましたが、今は P (計画) を立てている間にとりあえずやってみようという考えが出てきているようです。自分のニーズ・葵校のニーズ・子どもの人間関係力を総合して、よいと思うことはどんどんやってみて、学年会や学校で共有し概念化していきましょう。



1 研究の概要

学校教育目標

～対話する学校～ 友に学び 共につくる 葵校

研究主題

対話する学校 ～『業務効率を高め教育の質を上げ隊(たい)！』の対話型学校マネジメントによる省察的実践に着目して～

働き方改革

- 自分軸から
- 育てたい子ども像を大切に
- 4つの部会で
 - ・あおい college
 - ・いきいき家庭学習
 - ・対話の時間
 - ・職場の安らぎUP
- 授業ラボ・対話ラボ

カリキュラム・マネジメント

- 学校教育目標を教職員と保護者で見直し
- 育成を目指す資質・能力をみんなで設定
- 関連単元配列表を活用
- 学年会を核としてマネジメントしていく
- あおいGlidにより子どもの姿をみとる
- パフォーマンス評価の活用や子どもとのルーブリック作りで資質・能力を育てる



人間関係力

育成を目指す
資質・能力

- ・自分を振り返り、適切に評価する。
- ・お互いの自分らしさを認め合う。
- ・対話を通して相手に共感する。
- ・対話し、試行錯誤しながら新たな価値を生み出す。



研究の土台

安心・安全な学級

授業改善

人権教育

きらりタイム

主体的・対話的で深い学び

振り返りの充実

なかよしタイム

対話の時間

適切な課題設定

思考の可視化

2 授業ラボ・対話ラボ

若手・新着教職員・希望者を対象にして、昨年度の取組やこれまで葵小学校が大切にしてきたことについての研修を行う。

メリット

- ・教職員が、興味・関心を基に自分で選んで参加することができる。
- ・必要のない教職員にとっては無駄な時間が減る。

★対話ラボ

対話の時間がどのようなものか、どうやって進めていけばよいのか、教職員同士で体験しながら学ぶ。知る→見る→実践・子どもと一緒に対話という流れで、対話の時間についての理解を深め実践につなげていく。

第1回 対話ラボ(7月)

- 対話の時間とは
- 対話の時間をする意図や進め方の説明と質問

第2回 対話ラボ(9月)

- 怒りのワーク(冊子40ページ)
- 授業参観と模擬授業(体験する)

第3回 対話ラボ(11月)

- 人生の輪(冊子44ページ)
- 模擬授業と自分のクラスでの実践



<振り返りより>

- ・実際に体験できて対話の時間の雰囲気がよく分かった。
- ・子どもたちが話している雰囲気が、安心して話している様子で穏やかな気持ちで見ることができた。

★授業ラボ

授業力向上を目指した研修。本校では子どもが、学習課題を設定し、どのようなことができればよいか(ルーブリック)を決め、計画を立てて学習を進めている。このような学習スタイルをどのように進めればよいか教職員で考えを出し合った。

第1回 授業ラボ(7月)

- 課題設定と学習計画の立て方
- 模擬授業

第2回 授業ラボ(10月)

- 子どもとルーブリックを作る方法
- 模擬授業

第3回 授業ラボ(11月)

- 社会科の実践(3年 工場でつくられるもの)
- 実践紹介

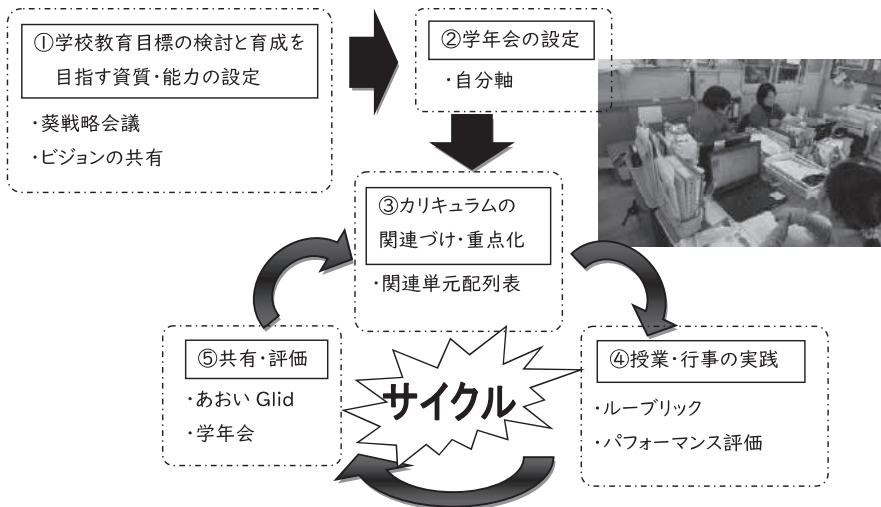


<振り返りより>

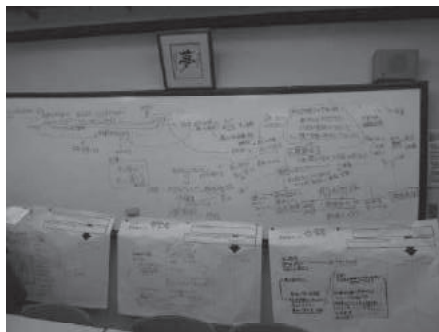
- ・ゴールを設定することで子どもも目指す姿が明確になると感じた。
- ・今後、実践を交流していきたい。

3 実践！カリキュラム・マネジメント

★実践カリキュラム・マネジメントの流れ



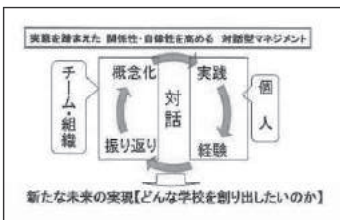
①学校教育目標と育成を目指す資質・能力の設定



自分は何を大切にしたいか、どんな学校にしたいか、子どもたちにどんな力を付けたいか話し合い、思い・願いを共有し言語化する。



②学年会の設定



- ・自分はどうしたいのか
- ・どんな学年にしたいのか
- ・どんな学校にしたいのか
- ・毎週月曜日は16:00～学年会をする。
(月曜日が休みの場合は火曜日)
- ・学年会では予定だけでなく、子どもの姿も話し合う。
- ・週案を活用する。

学年会が課題を解決するチームに

③カリキュラムの関連づけ・重点化

*赤は「人間関係力」 青は「反転授業」

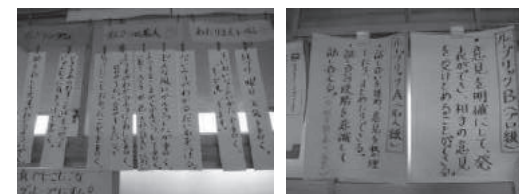
- ・作って終わりではなく、定期的に見直すようにする。
(学年会・週案に記入)
- ・常に見やすいところに掲示する。

<関連させたときの子どもの姿>
対話の時間で「調停の仕方」を学んだ子どもたちは、総合的な学習の時間で、新たな課題を設定するときなど、相手の願いを考えながらより良い課題を設定しようとしていた。

④授業・行事の実践

☆授業改善

- ・子どもが課題を設定する。
- ・子どもがルーブリックをつくる。
(子どもとルーブリックを共有する)
- ・振り返りを充実させる。
→振り返りの視点を掲示・インタビュー形式の振り返り(多様な表現様式で)



☆行事改革

- ・行事のあり方を見直し、子ども主体の行事にする。
(あおい4大フェスタ)
- ・振り返りを書きためて、自分の成長を感じられるようにする。
(キャリアパスポート)



⑤共有・評価

- ☆学年会で実践を共有する
- ・教職員の学びの場に

- ☆子どもの姿をみとめるための指標を活用する。
(あおい Glid)
- ・子どもへのインタビューからどこまで力が育ったか見取る。

<子どものインタビューより>
・先生のアドバイスなどをとって練習したら、やっただけうまくなって楽しくなった。
→自分の力を伸ばすために必要なことがわかる。メタ認知の力がSTEP 2
*この子がSTEP 3に成長するために、リーダーシップを発揮できるようにしていきたい。

令和2年度 ☆人間関係力 あおいGlid☆

項目	具体的な実践	効果
授業実践	対話型授業の実践	対話型授業の実践により、児童が主体的に学習に取り組むようになった。
行事実践	あおいフェスタの実践	あおいフェスタの実践により、児童が主体的に活動に参加するようになった。
振り返り	振り返りカードの実践	振り返りカードの実践により、児童が自分の成長を感じることができた。
共有・評価	学年会での実践共有	学年会での実践共有により、教職員が学びの場を共有することができた。
指標活用	あおいGlidの活用	あおいGlidの活用により、児童の姿をみとめるための指標を活用することができた。
インタビュー	子どものインタビューの実践	子どものインタビューの実践により、児童の力を伸ばすための実践を見ることができた。

4 委小の働き方改革 概要 ~自分軸から始めよう~

★葵流 働き方改革の進め方

STEP1 <教職員の意識を変える>

働き方改革＝生き方改革

*時間を減らすことだけが本当の働き方改革ではない

- どんな自分になりたいか
- 何をして過ごしたいか
- 教師として大切にしたいことは何か
- どんな子どもを育てたいか



余暇と仕事の
バランスを考える

趣味の時間、家族と過ごす時間など自分の時間も大切にしたい。

STEP2 <教職員が大切にしたいことは何か考える>

→改革を進めるときの軸になる

自分が大切にしたいことを絵で表した。



チーム葵として
大切にしたいキーワード

気楽さ
相互承認
明確さ
支え

STEP3 <学校の当たり前を見直す>

<改革する内容>

- いきいき家庭学習チーム
 - ・家庭学習を効果的にする。(自学自習)
 - ・子どもの家での時間を大切にする。
- 安らぎ up チーム
 - ・安心して働ける職場を目指す。
 - ・レクリエーションの企画・運営。
- あおい college チーム
 - ・子どもたちが授業を選ぶ仕組みをつくる。
 - ・クラブ活動と総合的な学習の時間を合わせて主体的で探究的な学習をすすめる。
- 対話の時間チーム
 - ・対話の時間の年間計画の精選



自分がしたいこととどんな子どもを育てたいかを基に、教職員が取り組んでみたいチームに入って活動する。自分で選んだので主体的・意欲的に働くことができている。取組を進める際は、上のキーワードを大切にします。

★会議・校内研修・組織の見直し

■職員会議の時間を決め、回数を減らす

- ・資料は1週間前に配布し目を通しておく。
- ・会議は約2カ月に1回。
- ・会議では要点や質疑だけにします。
- ・開始時刻と終了時刻を明記(1時間で終わるようにする)

■学年会を中核にする

- ・自分は学年にどうかかわるのか目標を設定した。

- ・若手の先生は積極的に発言する。
- ・ベテランの先生は意見を否定せずに聴く。

みんなが主体的に学年に関われるように

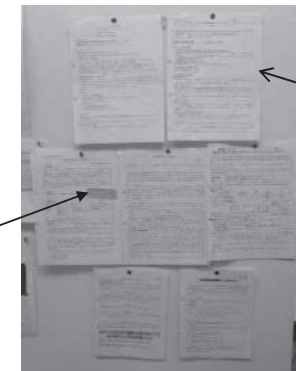


学年の先生が、子どもたちの力を伸ばすために対話してより良い取組にしようとしている姿が見られる。

■夏季休業中の研修を主体的に

- ・夏季休業中の校内研修を減らし、市教委や県外の研修に参加できるようにした。
- ・主体的に参加することで学びが深まる。
- ・学んだことをレポートにまとめ掲示し、共有。

付箋でコメント



A4にまとめる

■校内研修や研究の振り返り

- ・研修や研究での各自の振り返りを付箋に書く。
- ・掲示し共有する。

お互いの学びをつなぐ



- ・自然と研修についての会話が aumentata.
- ・チームとして協働的になる。

5 葵小の働き方改革 ～対話の時間～

すべてのベースである対話を学ぶ

外部講師による研修を経て、教員自らが対話を経験し、学ぶ。対話を通した生徒指導、児童同士の対話によるトラブル解決などにも生かされる。今年度は講師とともに ZOOM と対面の2回の研修を行った。

ZOOM での研修の目的

コロナ禍においても安全安心な場を共につくっていくために、教職員間のコミュニケーションを深めた。



対面での研修の目的

自分たちにとっての理想の学校とは・・・? 「子どもが時間割を自分で決められる」「子どもが自分で授業を選ぶことができる」など、劇を通してグループごとに伝え合い、共有した。改めて「子ども」「保護者」「教師」にとって理想の葵小について考えた。



LOVE(受容)をもちつつ、今年度は POWER(成長)を!

対話ラボとタイアップし、教職員同士での対話も定期的に行っている。

テーマは「人生の輪」

「保護者・教職員の対話の時間」を設ける

保護者と教職員による対話で互いの思いや願いを共有する。今年度は ZOOM で実施。保護者と教職員間で、「望ましい未来を共に描く」をテーマに行った。

保護者・学校や教師・子どもたちにとって大切にしたい願いを考え、二枚カードから選び、理想の未来を共有しました♪



対話ラボとのタイアップ

校内で授業を公開し、実際の対話の時間を見る。
知る→見る→実践・子どもと一緒に対話を行うことで効率よく学び、子どもに返していく。



6 葵小の働き方改革～あおいカレッジ～

以前のクラブ活動

- ・児童主体の活動になっていない。
- ・毎時間単発的で継続した活動ができない。
- ・クラブの人数制限によりやりたいことができない児童もいた。

クラブ活動

- ・自分が興味・関心のある活動を選択し目標達成に向けて探究的に活動することを通して、チャレンジしようとする態度を養う。
- ・探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に集団での活動に参画しようとする態度を養う。

総合的な学習

- ・児童間で活動を振り返ったり、今後の活動について話し合ったりする機会を設けることで、児童主体で探究的に活動を進めていくことができるようにする。
- ・実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現できるようにする。

週2時間の時数の確保

葵カレッジ

外部人材の活用

- ・児童主体。興味関心に基づいて、意欲的に活動できる。
- ・継続的に活動できる。
- ・児童が自分で課題を決め、児童自身が探究的に学習を進めることができる。

パフォーマンス

- ・自分が表現したいものを追及し、発表に向けて取り組んでいる。
- ・自分で決めることで主体的に取り組んだり、発表を意識することでどのようにすれば良い作品が出来上がるかを話し合ったりする姿が見られた。

プロフェッサー

- ・探究したいことを決め、資料で調べたり、実験を行ったりしながら取り組んでいる。
- ・自分で探究することを決めることで、主体的に取り組んだり、試行錯誤しながら継続的に活動したりする姿が見られた。

クリエイティブ

- ・目的をもって必要なものを考え、その目的を達成するために取り組んでいる。
- ・どんなものを作りたいか、自分の課題を明確にして、活動している姿が見られた。

IT

- ・プログラミングソフトを使って、ゲームや便利グッズの開発を行っている。
- ・実際に学校児童にゲームの調査をしたり、視覚に障がいのある方に話を伺ったりすることで、目的をもって主体的に取り組む姿が見られた。

7 葵小の働き方改革～いきいき家庭学習～

『いきいき家庭学習』チーム ～子どもも先生もいきいき！～

【目的】・自律的・協働的な学びにつながる家庭学習を目指す。
・宿題の丸付けや学習内容への指導の負担を軽減し、働き方改革を進める。

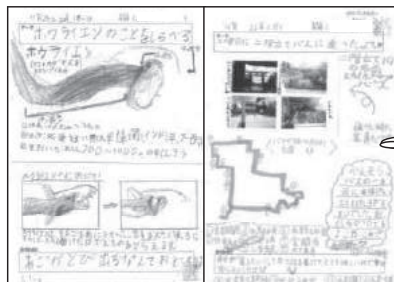
【学習の流れ】

- ※毎週金曜日に全校で統一して実施。金曜日は他の宿題は出さない。
- ①実施までに学習のめあてや学習したいことを自主学習ノートに書く。
- ②計画に沿って、学習に取り組む。(計画は変更してもOK)
- ③学習の振り返りをする。

低・中・高学年ごとのメニュー表



【低学年】



「自分で決めて学習するのが楽しいな。」

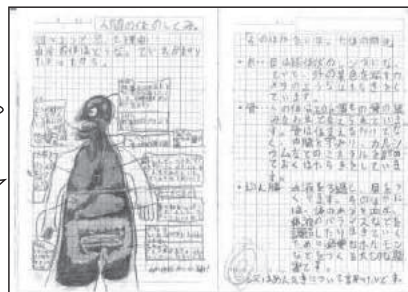
「もっと色々なこともしてみたいな。」

低学年はいろいろなパターンのワークシートを自分でえらんで学習している。

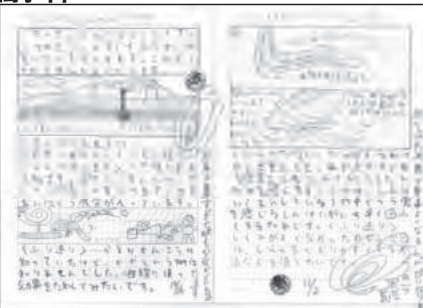
【中学年】

「分からないこと・興味のあることを自分で調べてみよう。」

中学年はメニュー表を参考にしながらも、少しずつ自分が学びたいことを考え探究していくステップへと向かっている。



【高学年】



「教科学習だけでなく、自分の興味のあることを深めていけるのが楽しいな。」「新しい発見がいっぱいあり、達成感があるよ。」

自分の得意なことや興味のあることを探究的に学ぶ姿が見られるようになった。学びを振り返り、次への意欲につなげる姿が見られる。

教職員の声

- ・普通の学習をより一層深めることにつながった。
- ・学習が苦手な子も積極的に楽しく取り組んでいた。
- ・子どもたちの努力を認められる機会、時間が増えた。
- ・月曜日の宿題チェックの負担が減った。



8 葵小の働き方改革～やすらぎUP～

＜目的＞

個々の教職員の資質・能力と生き方の質の向上が学校全体の力を伸ばすことにつながる。効果的な学校マネジメント推進のためには、**教職員が健康であること・チームワーク力が最も重要**であると考えられる。教職員がお互いを大切にし、安全安心して働ける職場環境を目指す。

＜内容＞

- ・いきいきアンケート(教職員)から、【体を動かすことをしたい】に応じて健康増進UP。
- ・組織改革(チームワーク力向上)として、みんながほっこりできる空間を創る(安らぎUP)。

＜実施＞

☆職場改革

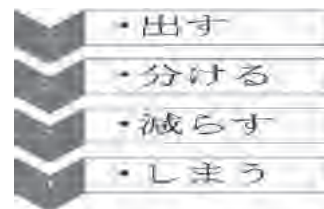
○断捨離のすすめ

【目的】職場みがき ⇒ 自分みがき
ものを整える ⇒ 心を整える

- *机の上を整える!(身の回りも)
- ・整理の場所を1つと決める。
- *使ったものは住所へもどす!
- *必要・不要をあざりと見極める!
- *短時間を継続して整理する!



共有スペースを気持ちよく使えるように工夫しましょう!



○パーソナルタイム

【目的】職員室での個人の時間を大切にし、業務効率アップを図る。

- *毎週水曜日の放課後30分間をパーソナルタイムとして設定する。
- *不要なおしゃべりを控え、業務効率アップ。
- *お互いの時間を大切にする。
- *集中力を高めるBGMを流して雰囲気づくり。

今日はパーソナルタイムだから、学級だよりを作ろう!



○ホットハートボード

【目的】みんなの思いや考え、相談したいことを気軽に共有できる環境づくり。

- *職場のみんなはどう感じているのかな。
- *学級経営ってどうすればいいの?

自主研修レポート掲載中!



研修後の振り返りです。

☆実施予定

◆AOは井戸端会議

仕事のこと(スキルアップ)、趣味のこと、子育てのこと、将来設計についてなどみんなが気になっているテーマについて気軽に話し合います。

◆【和・洋】スイーツツアー◆

勤務時間終了後、近隣のCAFÉにLET'S GO! 参加自由・帰宅自由・メニュー自由

◆スポーツ体験◆

- ・学校体育館で30分程度・Tベースボール
- ・体育部の指南による対抗戦を軽く行う。
- ・体育授業に活かせるルールを学び体験する。

1 はじめに

■「カリキュラム・マネジメント」をどのように捉え、どの側面からアプローチしたか

カリキュラム・マネジメントとは、学校教育目標を実現するために、教育課程を計画的かつ組織的に編成・実施・評価し、教育の質を向上することであるが、本校ではカリキュラム・マネジメントを「学校教育目標達成のために、全教職員ですべての教育活動において育成を目指す資質・能力である言語能力の育成を意識し、学校全体で取り組むこと」と捉え、カリキュラム・マネジメントの3つの側面「教科横断的な視点」「PDCAサイクルの確立」「実践を可能とする資源の確保」のそれぞれからどのようにして言語能力を育成していくのかを研究した。

そこでまず教職員が目指すべき学校教育目標が、生徒の資質・能力を向上させるための目標となっているかを、教職員全員で検証するところからアプローチし、本校の生徒が持つ良い点と課題であると思われる点を洗い出し、それぞれがなぜそうなっているのかを分析し、課題を克服するために必要な学校教育目標を創り上げた。

■「カリキュラム・マネジメント」を行う目的や意味

本校ではカリキュラム・マネジメントを行うことで学校教育目標、目指す生徒像、目指す教職員像の見直し、全教職員が「学習の基盤となる資質能力である言語能力の育成を目指す」という同じベクトルを向いて実践・評価・改善していくことを目的として取組を行った。

また、カリキュラム・マネジメントの取組として、生徒に付けたい資質・能力を「言語能力」と焦点化したことにより、授業改善や評価がより具体的なものとなるようにし、カリキュラム・マネジメントの3つの側面を考えるうえで大変取り組みやすくなった。

さらに、学校行事の見直しや保護者・地域・小学校との連携においても「カリキュラム・マネジメントとしての取組」と位置付けることで、既存の形に捉われず思い切った改善ができる点も、カリキュラム・マネジメントを行う大きなメリットであると思う。

逆に、カリキュラム・マネジメントの視点に立って今までやってきた取組を見直したとき、本校で行ってきた行事等が特色ある有意義な取組であったことが分かったり、コロナ禍の中で試行錯誤したこともカリキュラム・マネジメントと結び付けて考えることができるようになったりと、カリキュラム・マネジメントに取り組んでみて初めて学校組織や行事等を俯瞰でき、今後の学校運営を行っていくうえで大変意味のあるものとなった。

2 課題の把握及び学校教育目標（育成を目指す資質・能力）の見直し

■課題をどのように把握し、育成を目指す資質・能力を設定したか

<本校が育成を目指す資質・能力>

協働の基盤となる言語能力

本校の生徒の実態を踏まえ、育てたい生徒を教職員で話し合い、学校教育目標を創り上げた。まずは、「協働できる」の部分に焦点を当て、そのためにはどのような資質・能力が必要であるかを検討し、言語能力を育成することを目指すことにした。



■学校教育目標について

<見直し前>

校是 自立と貢献

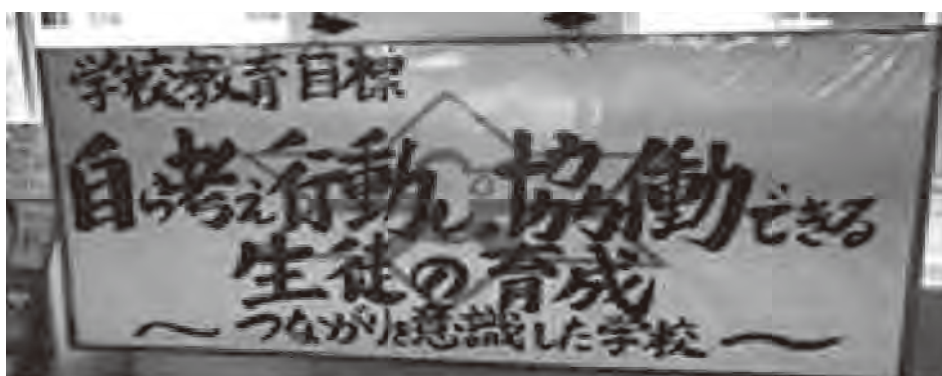
目指す生徒像

- ・夢や目標をもち、自ら学ぶ意欲のある生徒
- ・心身ともに健康な生徒
- ・お互いを認め合い、自他を大切にする生徒
- ・TPOに応じた行動をし、礼節を重んじる生徒

目指す教職員像

- ・生徒に対して愛情や慈しみの心をもって接する教職員
- ・生徒から目標にされ、尊敬される教職員
- ・教育者としての専門性を高めるために、自己研鑽に努め、互いに切磋琢磨する教職員

<見直し後>

学校教育目標 自ら考え行動し、協働できる生徒の育成
～つながりを意識した学校～

目指す生徒像 「周りの意見に耳を傾け、自分の考えを適切に伝えられる生徒」

→言語能力を身に付けた生徒の具体的な姿とはどういうものかを考え、学年会議において各学年の子どもたちになってほしい生徒像を出し合ったところ、「協働」するためには思いやりをもって他者と関わるが必要になることから「自他を大切にする生徒」、「自分の思いや考えを伝えられる生徒」「他者の意見に耳を傾けられる生徒」という意見が出た。これらを、カリキュラム・マネジメント推進委員会でまとめ、目指す生徒像を創り出した。

目指す教職員像 「愛情をもって生徒と関わりあい、ともに成長できる教職員」

→目指す生徒像を踏まえ、教職員はどのようにあるべきか意見を各学年で出し合ったところ、「生徒と関わり合い良さを引き出せる教職員」「生徒同士の関係が希薄な部分を、教職員が愛情をもって寄り添うことにより改善したい」「人としての価値を高め、生徒と共に成長できる教職員」という意見が出た。これを、カリキュラム・マネジメント推進委員会で「愛情」「生徒との関わり」「ともに成長」という各学年からのキーワードに着目し、目指す教職員像を創りあげた。

■見直しにあたっての具体的な困りや気付きは？

- ・校是と目指す生徒像，目指す教職員像それぞれが独立しており，関連性がなかった。
- ・目指す教職員像については周知徹底されていなかった。
- ・「育成を目指す資質・能力」という発想はなかった。
- ・カリキュラム・マネジメントを実現させるためには，まずは適切に目標が設定されている必要があり，本当に意味のある目標を設定できて初めて，マネジメントすることに意義が生じるということに気付いた。
- ・本校生徒の育てたい姿について話し合い，学校教育目標を見直し，それに伴い目指す生徒像，目指す教職員像を具体的で実現可能なもの，さらに一貫性のあるものへと見直しをする必要があった。
- ・個人→学年→全体で生徒の良いところ，課題，目指す姿を考え交流したが，教職員それぞれに考えや思いがあり，まとめることが困難であった。ただ，交流の過程で生徒の実態や掲示物の使い方など，生徒への周知方法などについても考えることができ，教職員の新たな視点としての気付きがあった。

■解決方法は？

- ・ワークショップ形式で本校生徒の課題や育てたい生徒の姿を話し合い，その中で多く見られたキーワードが「つながり」であった。それを元に学校教育目標を創り上げた。
 - ・教職員それぞれに思いがあったが，学校教育目標を実現するために言語能力を育成するというところにポイントを絞り，「目指す生徒像」及び「目指す教職員像」も見直した。
- すべてが具体的で実現可能，かつ，一貫性のあるものとなったことで，カリキュラム・マネジメントを行ううえでの方向性が明確になった。

3 学校体制の再構築

■「カリキュラム・マネジメント」を推進するための学校体制の工夫

<研究前>

カリキュラム・マネジメントを行う以前は，生徒指導部，学習指導研究部が独立しており，それぞれで取組を行い，関係部署の長だけによる会議をするなど，その他の教職員には周知されておらず，教職員全体の取組になっていなかった。また，「カリキュラム・マネジメントをしなくてはならない」という重い雰囲気支配され，関連単元配列表を作成することを目的としたような，本来のカリキュラム・マネジメントの取組にはなっていなかった。

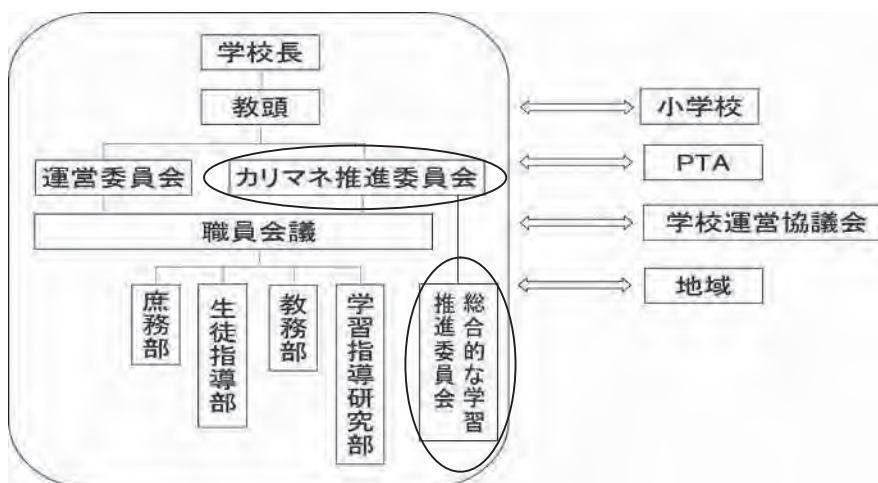
<研究後>

組織的かつ計画的に取組を進めるためには，カリキュラム・マネジメントに関わる取組を学校の組織全体の中に明確に位置付け，具体的な組織や日程を決定していくことが重要となることから，「カリキュラム・マネジメント推進委員会」を設置した。さらに「教科等横断的な視点」の中核となる総合的な学習の時間を充実させることは不可欠であると捉え，「総合的な学習推進委員会」を設置した。

●「カリキュラム・マネジメント推進委員会」について

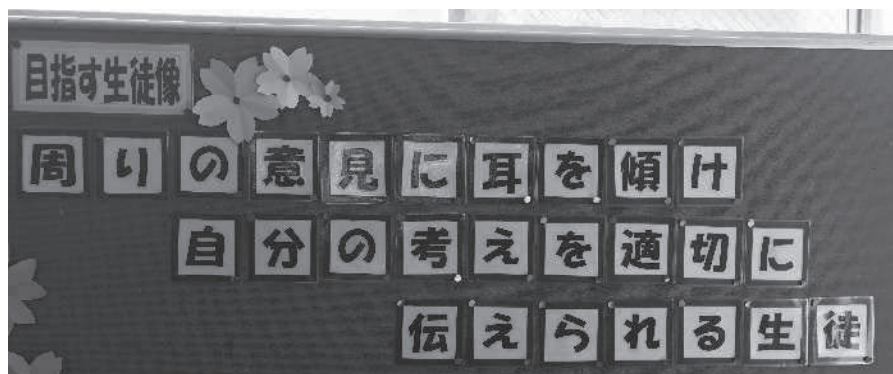
構成メンバーは、管理職・教務主任・生徒指導部長・総合的な学習の時間主任・研究主任に加え、学年で1人は入るように調整した。

<体系図>



■すべての教職員が当事者意識を持つまでのプロセスやその取組等について

- ・全教職員で議論を重ね学校教育目標を創り上げ、目指す生徒像、教職員像を明確にした。
- ・教科主任会や教科会を定期的に行い、目指す資質・能力を育成するための授業改善について、話し合う機会を多く設けた。
- ・学校教育目標や目指す生徒像を廊下や階段に掲示し、目標の「見える化」を図った。



■キーパーソンが果たしたそれぞれの役割や動き

<校長>

カリキュラム・マネジメントを推進していくうえで、新しく「カリキュラム・マネジメント推進委員会」を立ち上げ運営委員会と平行して機能させていく学校体制を構築した。また、教職員全員で作り上げた学校教育目標を、新しく転任してきた教職員にも周知させるべく校内掲示や職員会議等で話題にし、全員で取り組んでいくことを確認した。さらに、学校教育目標に掲げた「つながり」を意識するために、生徒へ直接話す機会に必ずそのことを交えて話したり、教職員へも生徒への働きかけを積極的に行うことを要請し、学校全体で学校教育目標が意識できるように務めた。

<教頭>

学校長の推進しようとする方向性を教職員に周知し、全校が同じ方向に向かって一体感のある取組になるように先導し、また潤滑的な役割を担った。教職員の動向を常に観察し、評価と指摘を使い分けることで、PDCAサイクルを大切にして現状を改善していく意欲が向上するように、教職員に働きかけていった。そこで、学校長の意向を教職員に伝えていくには、教頭への信頼も必要であり、襟を正した振る舞い、子どもを軸にした説得力のある評価と指摘を大切にした。また教務主任と協力して、カリキュラム・マネジメントに不可欠な小学校との連携に力を注いだ。校内の環境整備の面では、管理用務員や生徒会美化安全委員会と連携して、樹木の適正な管理や草花のプランター整備など、落ち着いた学校環境作りに努めた。

<教務主任>

生徒指導部と研究部の「改善」と「改革」ループが円滑にまわるように、補佐する。⇒中間反省や年度末反省の主催、校務委員会の設定と運営助言など。

<研究主任>

生徒指導部の生徒指導方針と「身に付けさせたい資質・能力」を擦りあわせ、授業改善や教科主任会・教科会、教職員研修の運営を行う。⇒授業改善の方針と計画、総合的な学習の時間の方針と計画、教職員研修の計画・運営など。

<生徒指導部長>

学習指導研究部と連携し、教育活動全体がつながりを持つようにする。研究部が中心として出す「身に付けさせたい資質・能力」を生徒指導方針と擦りあわせ、生徒会活動や行事の運営を行う。⇒生徒会活動の方針と計画、行事の方針と計画などに反映させる。

<総合的な学習の時間主任>

「教科等横断的な視点」の中核として総合的な学習の時間の充実を図る。関連単元配列表を元に、各教科で学んだ内容がどのように他教科や行事などに結びつくかを考え、年度初めにそれらを意識した取組ができるよう計画し、実践する。

■見直しにあたっての具体的な困りや気付きは？

学校体制として取組を行うためには、教職員の協力が前提である。今まで取組のなかったものに取り組むためには、全体でその意味を共有し、取り組む価値があるという認識を持つことが必要となる。

今回、研究指定を受けたことにより「やらなければならない」ことは認識しているが「仕事の押しつけ」になってしまっただけで負担感が大きくなり、取組の実効性も効率の悪いものになってしまう。働き方改革が言われる中、取組の意味を周知するための研修や会議の時間ですら捻出するのに苦労した。

カリキュラム・マネジメント委員会においては、どうしても放課後に設定する必要があり、月2回は会議をもち進捗状況や改善点などについて話し合った。

研究を進めるにつれ、少しずつ教職員の中にも目標に準拠した授業や子どもへの働きかけが見えるようになり、意識することで自然とできるようになっていく部分があることに気付かされた。

カリキュラム・マネジメントが教育全体、学校運営全体に関わるものであるため、「カリキュラム・マネジメント推進委員会」で審議するべきものであるのか、「運営委員会」で審議するべきものであるのかの選別が難しかった。

当初は、効果的なカリキュラム・マネジメントを実施するために、生徒指導部も研究部も何をすればよいのか分からなかった。

■解決方法は？

- ・授業を動かし時間内で会議時間を確保したり、時間を決めて短時間集まったり、メールを回して共有するなどの工夫をした。
- ・教職員への周知、意識付けに関しては、職員会議や部会等のまとめに必ずカリキュラム・マネジメントと結びつけた話題を入れ、学校教育目標の次は目指す生徒像や目指す教職員像といった具合に、みんなで考えて目標を作っているという雰囲気を醸成するよう工夫した。
→取組の成果として生徒の様子や成績の向上、行事などでの生徒の成長が見て取れるようになると、徐々に義務から能動的な発言や行動が教職員に見られるようになった。
- ・教職員から生徒に対しての働きかけに対しては、各学年に依頼し、インパクトのある掲示物等を使って印象に残るものを作成掲示してもらうようにした。
- ・カリキュラムに関連するものはカリキュラム・マネジメント推進委員会、それ以外は運営委員会で提案するようにしたが、案件によっては、両方の委員会で提案・審議するようにした。
- ・効果的なカリキュラム・マネジメントを実施するために「改善」と「改革」を積極的に行い、PDCAサイクルを短いスパンで回していくようにした。(後記するダブルループ体制を活用)
- ・生徒指導部、学習指導研究部の取組を共有し、「つながり」をもたせるようにした。

4 カリキュラム・マネジメントの3つの視点を踏まえた実践の具体例

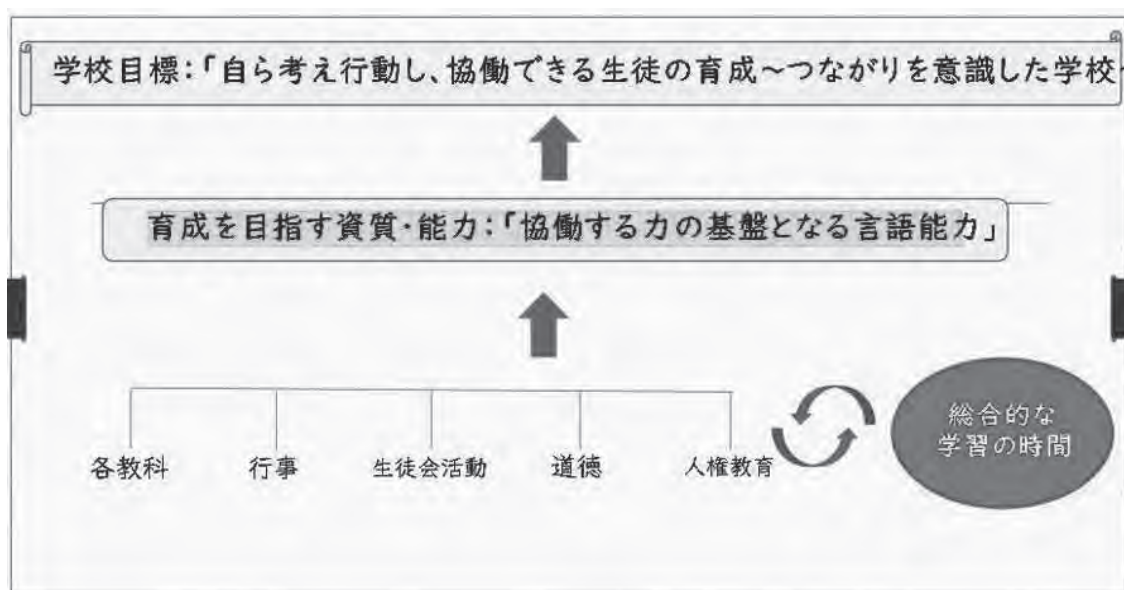
① 教科等横断的

(1) 関連単元配列表

- ・各教科の身に付けたい言語能力とはどのようなものを明確にする。
- ・言語能力を育成するための取組や活動に絞って記述。
- ・話し合いの手法や思考ツールを記述。

(2) カリキュラムの中心「総合的な学習の時間」

各教科で身に付けた「言語能力」が「総合的な学習の時間」で活用・発揮されることを目標としている。さらに各教科だけにとどまらず、行事や生徒会活動・道徳・人権教育等でも「協働」「言語能力の育成」を意識した取組をしている。

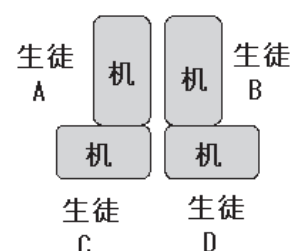


具体的には体育大会・合唱コンクールなどにおいて「縦のつながり」を意識して取り組むことで、生徒の団結力が高まり、先輩から後輩へ様々な文化（みんなで団結して応援する、上級生が下級生に指導する）や能力（リーダーシップやわかりやすく伝える力）などが受け継がれて、学校全体の中学生としての力量が高まった。



(3) 「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業改善

- どの教科においても太秦小・南太秦小で実践されているものと同様に、図のような学習班体形（3，4人）をつくることを継承し、スムーズに話し合いがもてるように工夫した。



- 2) 題材や内容に応じて効果的な話し合いの手法（ジグソー法，ワールドカフェ方式等）を，関連単元配列表に記入し，学年・教科横断的に使う。
- 3) 深い学びを実現するのに効果的な思考ツールを関連単元配列表に記入し学年・教科横断的に使う。
- 4) 研究主題に沿った指導案の作成
- 5) 生徒の学びを見とる授業公開と研究協議
- 6) 振り返りシートの工夫

自己変容や他者からの学びについて考える振り返りが深い学びにつながるとして，年度当初の職員研修において小学校で扱われている振り返りシートを提示し，中学校ではそれを応用・発展させることを共通理解した。各教科の特性を活かしながら振り返りシートを工夫し，実践している。

【太秦小学校での振り返りシートの項目】

1	学んだこと	<ul style="list-style-type: none"> ・～ができた。 ・～が分かった。 ・～に気づきました。
2	学べたわけ	<ul style="list-style-type: none"> ・～ができたから，分かった ・～するとできた。
3	学んだことの良さ	<ul style="list-style-type: none"> ・～すると，便利だと思った。 ・だと，解きやすくなる。
4	友達から学んだこと	<ul style="list-style-type: none"> ・△さんの考えが良かった。 ・△さんの発表の仕方をまねしたい。
5	学んだけれど…	<ul style="list-style-type: none"> ・～が分かりにくかった。 ・～が疑問に思った。
6	次の学びに向けて	<ul style="list-style-type: none"> ・次は，～を試してみたい。 ・○○を使って，～したい。

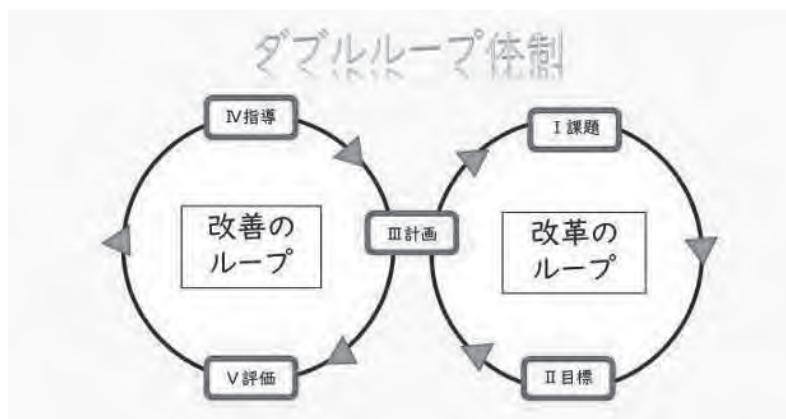
【太秦中学校での振り返りシート】

生徒自らその授業のポイントや気付いたこと・疑問に思ったこと，振り返りやまとめを工夫して記入していくようになっている。

② PDCAサイクル

(1) ダブルループ体制

本校ではカリキュラム・マネジメントを効果的に進めていくためには、「改善のループ」と「改革のループ」を同時に回すという「ダブルループ体制」が有効であると奈良教育大学の赤沢早人教授にアドバイスをいただき、実践している。課題の焦点化，目標の具体化，取組の計画，実際の指導，そして目標に照らして生徒の姿を見取るという流れで，その結果に応じて必要などころに戻るということを繰り返していく。



(2) 具体的な取組

- ・ 関連単元配列表を用いて，言語能力を意識した取組や他教科とのつながりの意見交流
- ・ 各教科オリジナルの生徒授業アンケートの実施及び結果の分析
- ・ 教科会，学年会，職員研修において，学習確認プログラムや全国学力・学習状況テストの分析
- ・ 行事，取組の事後アンケートの実施
- ・ 中間反省会，年度末反省会

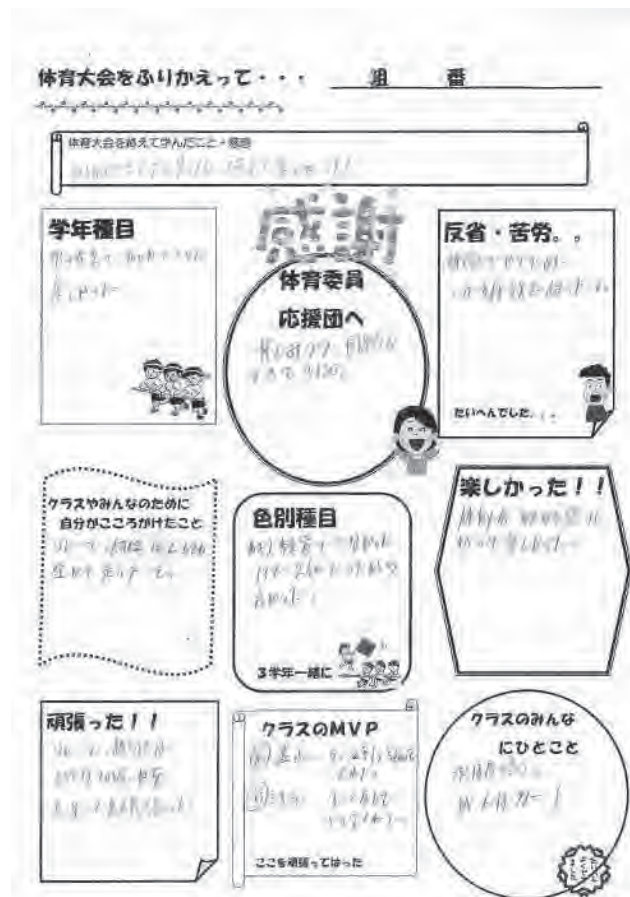
→これらの取組から目標に照らして実践が適切に行われているかを確認する。

(3) スケジュール帳とキャリア・パスポート

生徒自身が見通しを持ち，振り返りが出来ることを目的に，スケジュール帳を書かせる取組を始めた。いつまでに何をしなければならぬのかを日々明確にし，振り返ることは卒業後も必要になると思われる。



キャリア・パスポートでは、行事や学期の振り返りを掲示・紹介することで、他者から見た自分の評価を知って喜ぶ姿があり、他への理解、自己肯定感・自己有用感の向上、仲間との団結、次の行事や学校生活などへのモチベーションアップにつながっていることが見て取れる。(友だちのいいところみつけた！・クラスのみんなのために自分がこころがけたこと・クラスの MVP・クラスのみんなにひとことなど)



③ 人的・物的資源等の効果的な活用

(1) 教材

各教室にタイマーを設置し、ホワイトボードを全クラスに10枚ずつ設置した。その結果、「情報」や「思考」の可視化ができ、言語活動が充実してきた。



(2) 小中連携

令和2年度は小中連携に力を入れた。太秦小学校の育てたい資質・能力が「自他を輝かすことのできるコミュニケーション能力」であり、南太秦小学校の目指す子供像の中のひとつに「学ぶ意欲をもち、進んで表現する子」とある。2校とも中学校と共通している部分が大いにあるので、9年間継続して取り組むことを増やしていくことで、理想的な小中連携ができるのではないかと考えている。「9年間で子どもを育てる」というテーマで、様々な取組を行った。

(取組例)

- ・小中主任会の複数回実施・2回の合同教科会
- ・作品展，美化活動，キャリア・パスポートの活用，ジョイントプログラムや体カテストの結果共有
- ・10月の研究報告会は小中合同研修会として，教科別（総合育成支援・国語・社会・数学・理科・保健体育・美術）に公開授業と研究協議を行った。小学校の教職員も各教科に分かれ，目標の確認や，教材や指導法の共有などを行った。中学校で目指していることや取組を小学校の先生方に知っていただくことは「9年間で子どもを育てる」という意識を持っていただくためにも有意義であった。



(3) ゲストティーチャーによる授業

外部講師による授業は生徒にとって新鮮で興味深いので継続して行っており，それぞれが単独の授業として独立したものにならないように，事前・事後ともに学習をし，さらに学習効果を高める工夫をしている。

【劇団衛星～観劇～の様子】



【PICNIC～多文化交流～の様子】



【劇団衛星～劇指導～の様子】



【孫先生の講演～多文化共生社会の発信者に～】



■①～③に取り組む中で見えてきたもの

- ・何から始めるべきか分からなかったが、育成を目指す資質・能力である言語能力を3つの側面からどのように育成していくのかを考えて取り組んでいけばいいということが分かった。
- ・カリキュラム・マネジメントの3つの側面は、主体的・対話的で深い学びの実現には切り離せないということが分かった。新学習指導要領ではより一層必要とされている。
- ・教職員一体となって取り組むからこそ、カリキュラム・マネジメントをする意義があることが分かった。

研究報告会がゴールになりがちであるが、今後の学校現場ではいかにカリキュラム・マネジメントができていくかが重要になっていくと感じている。

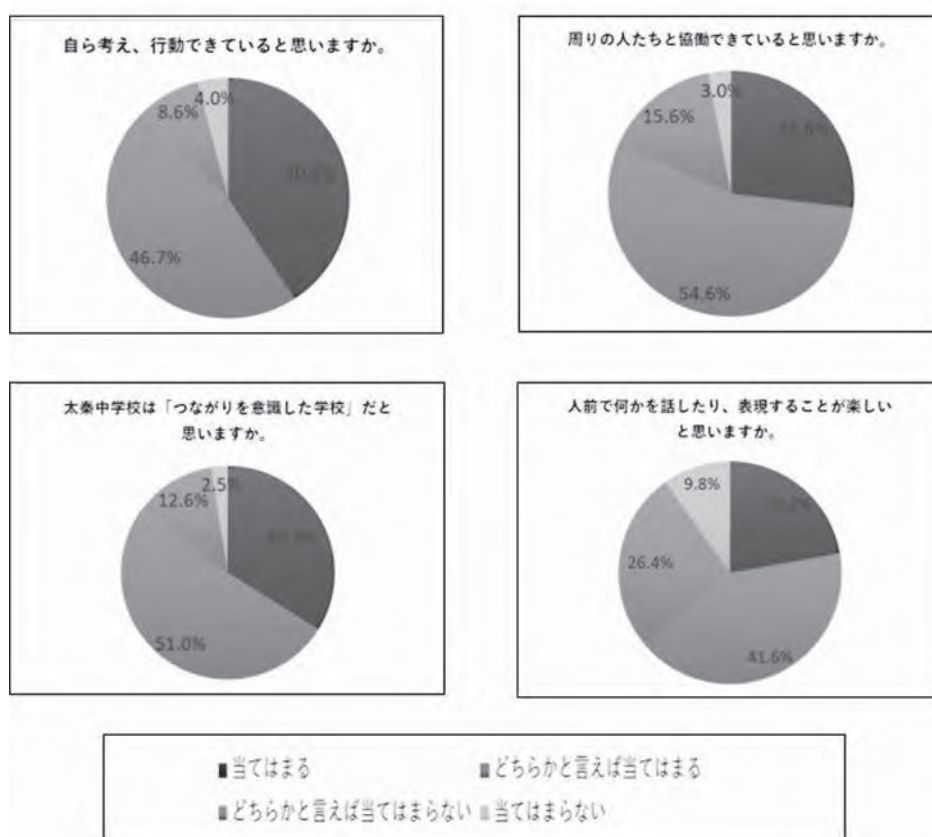
5 成果と課題

■成果

(1) 生徒アンケートより（令和元年11月調査、全校生徒562人）

全校生徒を対象に学校教育目標に対するアンケートを実施した。また、令和元年4月に3年生対象に行われた全国学力調査での生徒質問用紙の中から特に研究主題に関係の深いものを3つ絞り、令和元年11月に再度アンケートを実施した。いずれの項目からもある程度取組の成果が出ていると思われる。

【学校教育目標に対する生徒アンケート】令和元年11月実施（全校生徒562人対象）



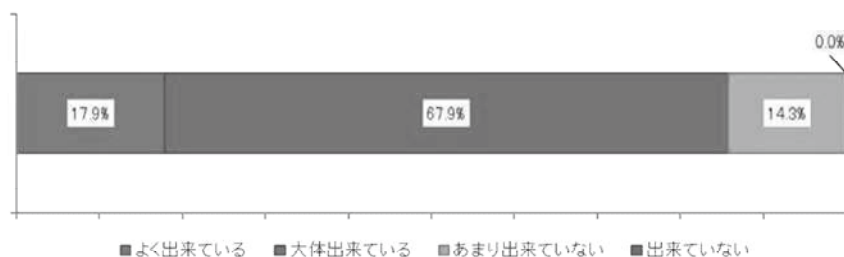
【全国学力調査アンケート】令和元年11月実施(3年生 221人対象)



(2) 教職員アンケートより (令和2年1月実施, 教職員38名, 学校評価アンケートより)

「学校教育目標」や「育成を目指す資質・能力」は教職員全員で創り上げ周知徹底できており、学校全体として目指す方向性がこの2年間で明確にできたことは大きな成果だと言える。アンケートでは、多くの教職員が、カリキュラム・マネジメントと学校評価の結びつきを意識した項目において、「言語能力の育成を意識した授業を行えている」「カリキュラム・マネジメントを進めることによって学校運営の組織化、組織の一体化が進んでいると思う」「カリキュラム・マネジメントの研究指定を受けて学校のプラスになった」と回答しており、一定の成果はあったと思われる。しかしその一方、「できていない」「そう思わない」という教職員もいることは課題である。分析し、改善していきたい。

「言語能力の育成」を意識した授業が行えていますか。



カリマネを進めることによって学校運営の組織化、組織の一体化が進んでいると思いますか。



カリマネの研究指定を受けて学校のプラスになったと思いますか。



(3) 学習確認プログラム結果比較より

研究指定を受ける前の2018年度は全教科全市平均を下回っていたが、2020年度は全教科全市平均を上回る結果で、特に言語能力の育成の主たる役割を果たす国語・英語の学力が特に伸びていることから、一定の成果があったと思われる。

2018年度 3年 2nd Stage (研究前)

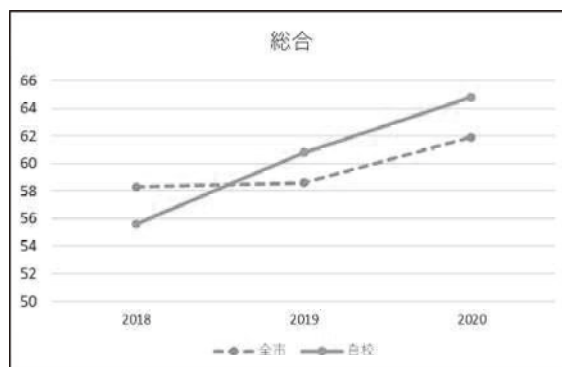
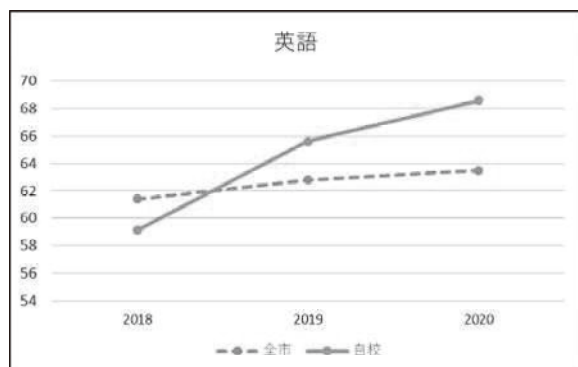
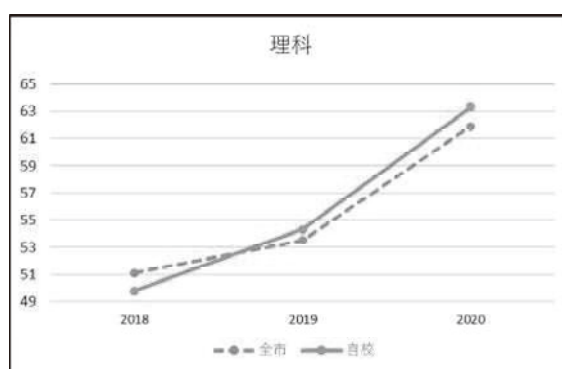
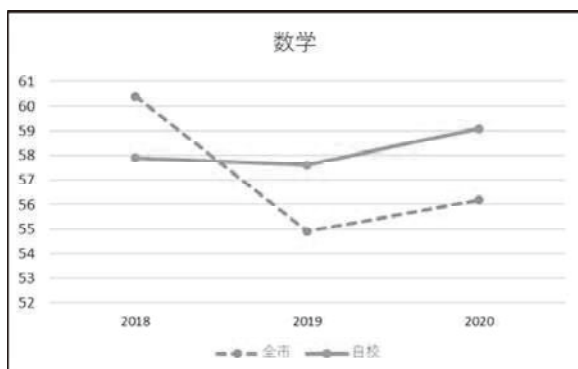
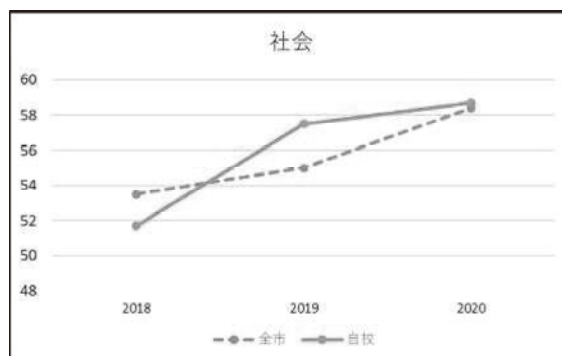
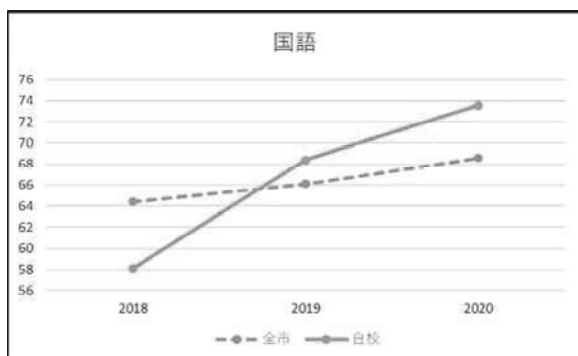
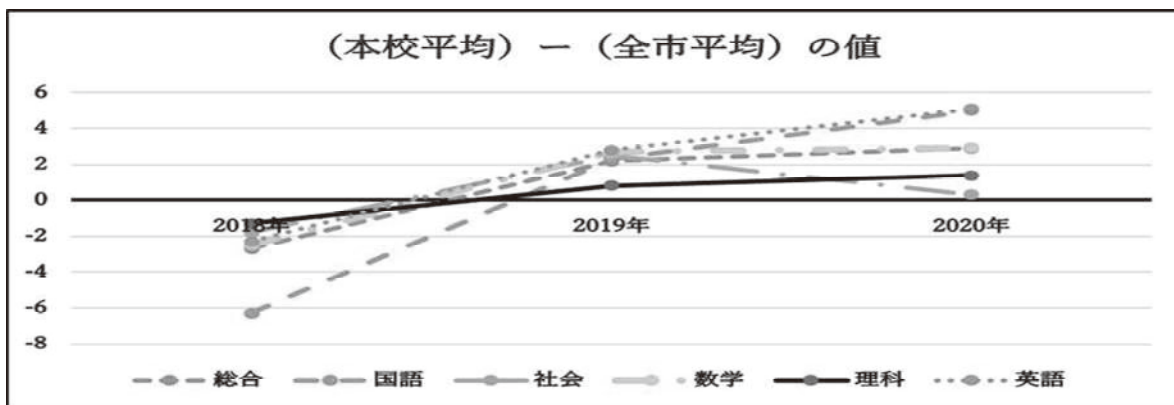
	総合	国語	社会	数学	理科	英語
全市平均	58.3	64.4	53.5	60.4	51.1	61.4
本校平均	55.6	58.1	51.7	57.9	49.8	59.1
	-2.7	-6.3	-1.8	-2.5	-1.3	-2.3

2019年度 3年 2nd Stage

	総合	国語	社会	数学	理科	英語
全市平均	58.6	66.1	55.0	54.9	53.5	62.8
本校平均	60.8	68.4	57.5	57.6	54.3	65.6
	+2.2	+2.3	+2.5	+2.7	+0.8	+2.8

2020年度 3年 2nd Stage

	総合	国語	社会	数学	理科	英語
全市平均	61.9	68.6	58.4	56.2	61.9	63.5
本校平均	64.8	73.6	58.7	59.1	63.3	68.6
	+2.9	+5.0	+0.3	+2.9	+1.4	+5.1



(4) その他

- ・コロナ禍の影響も重なるかたちにはなったが、授業内容や方法の精選・行事の精選や時期の見直しができた。今まで当然のように例年行っていたことが本当に必要なのかを見直すことができた。(定期テストの回数・体育大会の種目、応援団の取組、文化祭の内容、清掃活動)
- ・リモート授業やZoom会議を実施することができた。
- ・学生ボランティア、校務支援員や部活動指導員、外部コーチなどを活用することで、教材準備や部活動指導の時間短縮を図ることができた。
- ・採点ソフトの導入により採点時間を短縮することができた。

■課題

- ・関連単元配列表の活用

令和2年度はカリキュラム・マネジメント検討会議でも御意見をいただき、関連単元配列表を見やすく活用しやすいように、何度も教科会を行いながら改善したものを作ることができた。しかし、コロナ感染予防の観点から、1枚の模造紙を見ながら関連する部分を線で結んで交流するということができなかった。関連単元配列表を十分に活用した授業改善をしていく必要がある。

- ・「言語能力」を評価するパフォーマンステストの実施とその評価

以前は言語活動とは単にペアやグループで話し合うことのように捉えがちであったが、各教科特有の言語能力とは何かを話し合ったり、ピクトグラムを指導案に盛り込んだりしたことから意識が少しずつ変わり、言語活動そのものの改善が進んでいると思われる。しかし、そこで身に付けた言語能力の評価を行っている教科は少ない。新学習指導要領の導入で必須となるが、授業で学んだ知識や技能を使って、思考・判断・表現するパフォーマンステストの実施と各観点に応じた評価が正確にできるよう、研修・協議を重ねていきたい。

- ・「映画の街」として特色ある教育課程の実施

令和2年度は、総合的な学習の時間において、地域調べに着手し、映画の街として名高い地元ならではの学習を行い、人権学習とも関連させた中学校3年間のカリキュラム・マネジメントを確立させる予定だったが、外部の団体との交流が難しく、休校期間もあり、丁寧に取り組む機会を失ってしまった。コロナが終息すれば取り組んでいきたいと考えている。

- ・グループ学習や対面交流の自粛を受けて

当初の予定を大幅に変更しながらできる範囲での取組を行っているが、どれだけの学習効果が見込めるかは不透明であることが課題として挙げられる。コロナ禍が長期化することも想定して、1人1台端末の有効活用など、できることを工夫して実践していく必要がある。

- ・働き方改革

学生ボランティア、校務支援員や部活動指導員、外部コーチなどを活用することで、教材準備や部活動指導の時間短縮を図ることができたが、令和2年度は消毒作業などの感染防止の業務に加え、補習・7限授業・土曜学習の実施など働き方改革をするには難しい状況にあった。

6 おわりに

■ 2年間のスケジュール

＜令和元年度＞1年目

月	取組内容（下線は教職員のカリキュラム・マネジメントに係る活動と PDCA サイクル）
4月	<u>学校教育目標の確認（C）</u> ・ <u>各分掌年間計画（P）</u> ・ <u>教科別学力向上プラン作成（P）</u>
5月	2年生生き方探究チャレンジ体験（職場体験）・3年生修学旅行
6月	<u>小中合同研究授業（DC）</u> ・ <u>育成を目指す資質能力の決定（PA）</u>
7月	<u>校内研究授業（DC）</u> ・ <u>授業アンケート実施（C）</u> ・ <u>関連単元配列表作成（P）</u>
8月	<u>夏季教職員研修（PC）</u> ・ <u>学習確認プログラム及び授業アンケート分析（CA）</u> ・ <u>各分掌中間反省会（CA）</u>
9月	<u>体育大会取組・反省（DCA）</u> ・ <u>関連単元配列表検討会（CA）</u>
10月	<u>文化祭取組・反省（DCA）</u>
11月	<u>校内研究授業（DC）</u> ・ <u>学習確認プログラム分析（CA）</u>
12月	<u>研究報告会実施（CA）</u> ・ <u>年度末反省開始（C）</u> ・ <u>学習確認プログラム分析（CA）</u> ・ <u>授業アンケート実施（C）</u>
1月	<u>研究報告会反省（A）</u> ・ <u>生徒会オープンスクール</u> ・ <u>学習確認プログラム及び授業アンケート分析（CA）</u>
2月	<u>小中合同研究授業（DC）</u> ・ <u>年度末反省研修会（CA）</u>
3月	<u>関連単元配列表検討会（CA）</u> ・ <u>目指す生徒像決定（PA）</u>

【研究報告会の様子】3学年とも総合的な学習の時間の授業を公開



2年生は1年生を対象にどうすればうまく伝わるのかを工夫して職場体験のポスターセッションを行った。1年生はメモを取ったり質問をしたりしながら、次年度自分たちが行うことになる職場体験のイメージをしっかりと持つことができた。



3年生は進路実現に向けて、自ら面接官役や観察役を役割分担し、交代で行った。互いにアドバイスをしながら、自分のことを効果的にアピールできる方法を模索した。

＜令和2年度＞2年目

月	取組内容（下線は教職員のカリキュラム・マネジメントに係る活動とPDCAサイクル）
4月	<u>学校教育目標・目指す生徒像・育成を目指す資質能力・研究主題の確認（C）</u> ・ <u>各分掌年間計画・教科別学力向上プラン作成（P）</u>
5月	<u>関連単元配列表作成（P）</u> ・ <u>小中主任会（P）</u>
6月	<u>目指す教職員像ワークショップ（PD）</u>
7月	<u>各分掌中間反省会（C）</u> ・ <u>目指す教職員像決定（A）</u>
8月	<u>夏季小中合同研修会（PD）</u> ・ <u>学習確認プログラム分析（CA）</u>
9月	<u>体育大会取組・反省（DCA）</u>
10月	<u>文化祭取組・反省（DCA）</u> ・ <u>研究報告会【小中合同】（DC）</u>
11月	3年生修学旅行・ <u>研究報告会反省会（CA）</u>
12月	生徒会オープンスクール
1月	<u>年度末反省研修会（CA）</u> ・ <u>学習確認プログラム分析（CA）</u>
2月	<u>小中主任会（CA）</u>
3月	<u>新学習指導要領の研修（P）</u>

【研究報告会の様子】

育成を目指す資質・能力である「言語能力」の育成を意識した授業を公開し、小中合同で生徒の変容を見取ったうえで、生徒の視点に立った研究協議を行った。



7 編集後記的な自由記述

<校長>

カリキュラム・マネジメントは、学校教育目標を実現するために、教育課程を計画的かつ組織的に編成・実施・評価し、教育の質を向上することであり、教職員全員が意識し、同じ目標をもって取り組むことが最大のポイントである。生徒の力を活用・発揮させ、より深い学びへと導いていくために教職員にカリキュラム・マネジメントの取組の必要性を説き、学校全体として取り組める体制を作り、物的・人的支援にかかる外部との調整をすることなどが、校長として行うべき重要な役割であろうと思う。

<教頭>

今年度教頭として本校に着任すると、学校教育目標である「自ら考え行動し、協働できる生徒の育成～つながりを意識した学校～」と書いた掲示物が、職員室内に3カ所も掲示してあった。校内を巡視していると、それぞれの校舎にも同様の掲示がしてあった。“学校教育目標を大切にしている学校だ。素晴らしいことだ。”と感じた。この目標が作られた経緯を聞くと、カリキュラム・マネジメントの取組の1つとして、全教職員の総意を結集して決めた目標だという。大切にしようとする根拠がそこにあった。時間をかけ議論を重ね、自ら考え決定した目標であったからである。私を含め、これから赴任する教職員が、この学校教育目標を自分のものとする取組を進めることも、本校のカリキュラム・マネジメントを推進するうえでの課題の1つであると考えている。

<教務主任>

カリキュラム・マネジメントの研究が始まった頃には、手探りでの研究推進であったが、今年度コロナ禍にあり、教務主任としてはまさにカリキュラム・マネジメントを実践することが必須な年になった。今までにない休校期間によって、いかに教育課程の再編成をしていくかが大きな課題となった。カリキュラム・マネジメントの本質である「本校生徒にあった教育課程の編成」を実践するために、運営委員会や職員会議での行事の精選、授業数の確保、新しい生活様式の中での効果的な教育活動の充実を模索した。教職員の協力のもと、学校教育目標実現のために「改善」と「改革」のダブルループをスムーズに回せるように教務として努力しているところである。

<生徒指導部長>

研究が始まった頃は、生徒指導部長としてカリキュラム・マネジメントをどのように捉えてどんな実践ができるか全く想像できなかった。しかし、研究主任や特別講師の先生方の話を聞いているうちになんとなくではあるが具体的な活動が見え始めた。その一例として最も成果があったと考えていることは「縦のつながりを意識した活動」である。(正直なところ今年度はコロナ禍で行事が短縮されてあまり推し進めることができなかったが・・・) 昨年度は行事の度に「縦のつながり」を意識して取り組むことで生徒の団結力が高まったと思う。そして、それに伴って先輩から後輩へ様々な文化や能力が受け継がれて学校全体の中学生としての力量が高まったと思う。また、このことは教員間にも波及効果があり生徒と同様に縦(学年間)でつながったことで教師の力量を高めることや「協働」することにつながっていったと考えている。これらのカリキュラム・マネジメントによる成果は学校にとってとても大きな力となり今の太秦中学校を支える大きな力となっていると思う。

<研究主任>

当初は校内の誰もが「カリキュラム・マネジメントって何？」という状況だった。2019年度より研究主任を引き継ぎ、書籍を読みあさり、研修に参加するなどして自分自身は少しずつカリキュラム・マネジメントを理解できるようにはなったが、自校でその意義や目的を全教職員に浸透させ、実践することの難しさを痛感した。またカリキュラム・マネジメントは学習指導の分野だけに止まらず、学校教育全体に関わるので、管理職や教務主任・生徒指導部長などの協働が欠かせないということを実感している。

カリキュラム・マネジメントは、第一に生徒の実態を踏まえ、学校教育目標を実現可能な現実的なものへと見直すことから始めることができると思う。「学校教育目標を実現するために…」という発想で「育成を目指す資質・能力」を設定し、学校のすべての教育活動を少しずつ結び付けていくことでカリキュラム・マネジメントができていくのではないかと考えている。

今回の研究でカリキュラム・マネジメントの3つの側面それぞれから言語能力を育成するというアプローチをしたが、取組が多岐にわたってしまったのが、実際どうだったのかということには疑問に思っている。これからさらに深められる部分を深めていけるようにしたい。課題も多く、できていないことも多々あるが、研究を進めることでカリキュラム・マネジメントを常に意識した組織文化の構築に向けて前進できたのではないかと考えている。

<総合的な学習の時間主任>

「カリキュラム・マネジメント」の実現のために、その側面の一つである「教科横断的な視点」の中核として総合的な学習の時間の充実を図った。関連単元配列表を元に、各教科で学んだ内容がどう他教科や行事などに結び付くかを考え、年度初めにそれらを意識した取組ができるように、それこそ「カリキュラム」の「マネジメント」を行った。指導内容や実態を元に少しずつアレンジしていく必要はあるが、今後もその視点をもって進めていきたい。

また、総合的な学習の時間は学校教育目標を達成するために、学校独自で比較的取組を設定できる面がある。今後も今年度のようにコロナ禍で学習内容や取組が制限されてしまうこともあり得るが、その場合においても取組の見直しや調整を行い、学校教育目標が達成できるようにしていきたい。そして、その意識を教職員一人一人が持つことが、真の「カリキュラム・マネジメント」であると考えている。

国語科学習指導案

指導者 村谷 貴生

1 指導日時 令和2年10月29日(木) 13:30 ~ 14:15

2 指導学級(場所) 京都市立太秦中学校 1年 3組 (39名)

3 単元名 いにしへの心にふれる『今に生きる言葉』

4 単元の主たる目標(身につけたい力)

- (1) 「話すこと・聞くこと」において、目的や場面に応じて、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を整理し、伝え合う内容を検討できる。[思考力、判断力、表現力等] (A(1)ア)
- (2) 「話すこと・聞くこと」において、相手の反応を踏まえながら、自分の考えがわかりやすく伝わるように表現を工夫できる。[思考力、判断力、表現力等]
- (3) 音声の働きや仕組みについて、理解を深めることができる。[知識・技能] ((1)ア)
- (4) 古典には様々な種類の作品があることを理解することができる。[知識・技能] ((3)イ)
- (5) 積極的に集めた材料を整理し、学習の見通しをもって報告しようとする。[学びに向かう力、人間性等]

5 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
① 音声の働きや仕組みについて、理解を深めている。((1)ア) ② 古典には様々な種類の作品があることを理解している。((3)イ)	① 「話すこと・聞くこと」において、目的や場面に応じて、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を整理し、伝え合う内容を検討している。 ② 「話すこと・聞くこと」において、相手の反応を踏まえながら、自分の考えがわかりやすく伝わるように表現を工夫している。(A(1)ウ)	① 積極的に集めた材料を整理し、学習の見通しをもって報告しようとしている。

6 指導計画及び評価計画

	主な学習活動	評価基準・評価方法
第1時	いろは歌の特徴と意味を捉え、七五調のリズムを味わいながら音読する。	[知識・技能] 観察・ノート
第2時	古人の月に対する思いを読み取り、古典への関心を高める。	[主体的に学習に取り組む態度] 観察
第3時	竹取物語の冒頭部分を正確に音読し、物語のあらすじを捉える。	[知識・技能] 観察・ノート
第4時	「くらもちの皇子の架空の冒険談」の場面を想像しながら音読し、話の展開を捉える。	[思考・判断・表現] 観察・ノート

第5時	解説文と原文とを読み、場面の様子や登場人物の心情を捉える。	[思考・判断・表現] 観察・ノート
第6時	登場人物の心情や行動などについて考えをまとめる。	[思考・判断・表現] 観察・ノート
第7時	故事成語の成り立ちを知る。「矛盾」の由来と意味を理解する。	[知識・技能] 観察・ノート
第8時	いろいろな故事成語を知る。発表する故事成語を一つ選び、話し合いながら台本を書く。	[思考・判断・表現] 観察・台本・ワークシート
第9時	グループで役割を決め、発表の練習をする。	[知識・技能] 観察・台本
第10時 【本時】	故事成語を題材にした寸劇を発表する。記述による自己評価・相互評価を行う。	[知識・技能] 観察・台本・ワークシート
第11時	選ばれた寸劇を視聴する。故事成語小テスト。	[知識・表現] ワークシート・小テスト

7 本時の教材観

第4単元「いにしへの心にふれる」では、「いろは歌」、「七夕に思う」、「蓬萊の玉の枝」、「今に生きる言葉」という題材が配列され、「古典の文章に出会い、現代とのつながりを考える」ことをねらいとしている。本単元を学習することで、歴史的仮名遣いなどの文語のきまりや漢文訓読の仕方などを学び、音読に生かしながら古典の世界を味わうことができる。また、様々な古典作品に触れる中で、古典には様々な文種やジャンルがあることや現代にまで生きてきた伝統的なものの見方や考え方があることを知り、現代とのつながりについて自分の考えをもつことができる。このように本単元は、文章を読み自分の考えを広げ、古典の世界に親しむのに適した教材配列となっている。

8 本時の生徒観

本授業の学級では今年度の学習確認プログラムで全市平均との比較はできないが、授業の様子としては取り組む姿勢や班での話し合い活動において積極的に学んだり話し合ったりする姿が見られる。夏休み後の授業では、「自分の好きなもの」というテーマで1分間のスピーチを行い、「声の大きさ・話す速さ」「文章構成」「視線・表情」「時間」の4点を意識して発表を行った。事前に内容を自分で考えて発表するので全体的に準備ができていたが、スピーチメモを読み原稿のように作成していた生徒が少なくなく、自分の言葉で説明することが苦手な生徒が多いと思われる。また、聴き手にとって伝わりやすい内容にするために発表者がわかりやすい言葉で説明する必要があると感じられた。

以上のことから、より相手を意識して発表させるために故事成語を寸劇にして発表するという言語活動を位置づけた。寸劇という課題に挑戦することを通し、相手に伝わるように工夫して話す力を付けていきたい。また、今回の授業を通して、相手への伝え方や表現方法を顧みて今後の発表時や相手に伝えるときなどに活かせるようにしていきたい。

9 本時の指導観

本単元では、様々な故事成語に触れ、言葉の成り立ち「故事」を理解し、「故事」の部分及び、現代での使われ方を考えて劇化して発表する。この言語活動によって「故事成語」というジャンルを知り、基本的な内容の理解を促したい(知識・技能((3)イ))。劇にして発表するという言語活動は、学習指導要領の中では小学校低学年の「読むこと」の言語活動例に「物語を演じたりすること」とある。実際に子どもたちは「大きなかぶ」を読んだ際に、劇によって理解を深め、架空の世界を想像できるように感性を刺激することをねらった言語活動を実施している。文章を読むときに「動作化」を取り入れて、具体的な人物の動き、ものの動きなどを身体表現で表してみよう理解を促すことなどが行われた。中学生にとっての「劇」にもこのように文章理解を促す意義は当然認められるが、これまでの言語活動の経験を踏まえて、積極的に話し表現する手段として「劇」を採用した。

代表的な故事成語が「どのような意味を持つか」「なぜそのような意味をもつようになったのか」「その故事は現代でどのような場面に当てはまるか」と言語化し、劇として情報や場面を整理することで「故事成語」をなんとなく把握している状態よりも、正確に使い方について考えを巡らすことが容易になり、「思考の整理」という効果を

期待する。また、「劇」という形でアウトプットを試みることで、自分自身の経験や心情、感覚というものを、より繊細に独自の言葉で表現できないか挑戦させたい。そうして、自分の中の言葉に対する感覚が研ぎ澄まされ、言葉の引き出しが多様かつスムーズになるべく、言語感覚を鍛えていく機会としたい。

まず第7時は「話すこと・聞くこと」のウを効果的に指導するため、「矛盾」を読み、言葉の成り立ちや現在の使われ方を理解させる。また、同様に故事成語とは何かを理解させる。

一つの故事成語は言葉の成り立ちとなる昔話「故事」の部分がある。この部分の読み取りは、第8時に資料集や漫画等を利用するなど、理解に時間がかからないよう工夫する。そして、理解した内容をグループで話し合い、発表する故事成語を一つ選ばせる。また、学級内の他の生徒たちが理解できるように、故事の部分や現代での使い方などの場面をグループの人数、配役などを考えながら台本作りをさせる。現代風の使い方の発表については、自分たちが選んだ故事に当てはまりそうな日常生活の出来事を結びつけて考えさせる。故事成語の意味にぴったりと合う現代風の使い方を、さまざまな場面を想定してグループ内で互いに説明し合いながら台本を作ることは、生徒の思考を巡らせ、豊かな言語感覚を身につけることにつながると期待する。また、[思考・判断・表現](A(1)ウ)の「相手の反応を踏まえながら」や「自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫」について意識した学習活動をここで行う。

第9時は、劇を発表するに当たって、グループで台本の読み合わせをしたり、立ち稽古をしたり、リハーサルを行ったりする中で、[知識・技能](1)アの「音声の働きや仕組み」である、話す速度や音量、言葉の調子や間の取り方等を意識させたい。特に、劇は架空の対話をするという性質上、生徒たちは互いの呼吸としての間を意識することができる。発表する際の身振り手振りについては学習指導要領に関連する記述は見られないが、言葉の意味性を補い、強化する手段としては重視したい。

第10時である本時の発表会では、自己評価、相互評価のワークシートを用いながら、よりよい発表の仕方について考察させるとともに、発表した故事成語の理解を促す。参観時のポイントとしては、後に挙げた指標生徒が普段の様子からどう変容したかを見取るために、「相手の反応を踏まえながら、わかりやすく伝わるように話し方を工夫し発表する」とこと、「他の班が発表した時の発表の工夫を判断した評価ができてい」ことの2つを中心と置く。

第11時には各学級で選ばれた発表をビデオで視聴させることで、注意を引く発表の特徴は何か、話す技能について考えさせることにつなげたい。






10 本時の目標

故事成語の意味が伝わるように寸劇にして発表することができる。[思考・判断・表現]

11 本時の評価

目標を概ね達成できた状態 <bの判断基準>	評価規準・方法	aの判断基準 <十分満足できる状態>	c(bを実現できない生徒) への手立て
相手の反応を踏まえながら、自分の考えがわかりやすく伝わるように話し方を工夫し、身体表現も劇を成立させるための取り組みとなるよう気をつけて発表することができる。 発表したグループの話す特徴(音声の働きや仕組みについて)を判断した評価ができる。	観察 ワークシート (台本) 評価シート 振り返りプリント	その場の状況に合わせて適切に台本をアレンジする等、発表全体の分かりやすさを踏まえた工夫、他の発表者との関係や場面の意味を考えた工夫ができる。 発表したグループが内容を伝えるために工夫した点をよく理解して、話し方についてもよく観察して評価できる。	伝わりにくい根拠を確認してみるように助言したり、教師が具体的に指摘したりするなどして、本人が意識できるようにする。 ワークシートは一部投票用紙になっており、学級代表に選ばれるグループは発表のうまさ、特徴がはっきりしているのもので、そのような班の良さを考えるよう助言する。

12 本時の展開

過程	学習項目	学習活動	指導上の留意点	評価規 準・方法	
導入 1分	<p>【1】本時の目標を確認する。</p> 	<p>本時の目標を確認する。</p> <p>○今日の目標は最終課題である「『故事成語』を意味が伝わるように寸劇にして発表する」です。</p> <p>○各グループが、故事成語の意味と現代にある身近な体験をつなぎ合わせ、工夫を凝らして劇を発表します。他のグループの発表を見ながら、さまざまな故事成語を理解し、正しく使いこなす力を身につけましょう。</p> <p>○また、話す技能、効果的な発表の仕方、話し方について考えを深めましょう。</p>	<p>机は事前に班隊形にしておく。</p> <p>劇の発表会を通して、どのような力を身につけようとしているか確認する。</p> <p>他グループ発表時は内容の理解の他、話す技能について注意して観察するよう促す。</p>	観察	
展開 4分	<p>【2】本時の学習の順序について確認する。</p> 	<p>発表手順、評価について確認する。</p> <p>○発表は、故事成語の由来の劇、現代での使われ方の劇という順番で発表します。</p> <p>○一つの発表が終わる度に、評価シートに記入します。「上手だった人、発表の工夫、率直な感想 など」話す技能、効果的な発表の仕方、話し方についてさまざまな気づきや考えを書き留めましょう。</p> <p>○内容・発表ともに他クラスにぜひ紹介したい推薦グループを一つ選んでもらいます。</p>	<p>板書およびパワーポイントで端的に確認をする。</p> <p>評価シートを配付する。 ◇発表者の良さに気付くとともに、改善点も指摘できるように声をかける。</p>		観察 ワークシート
35分	<p>【3】発表・交流</p>  	<p>グループごとに寸劇を発表する。</p> <p>○「それでは、発表会を始めます。○班は前に出て発表をお願いします。」</p> <p>○「ありがとうございました。では、○班の評価を記入してください。」 ・繰り返し</p> <p>自己評価・振り返り</p>	<p>故事成語の意味と劇の出来事が合っているかどうか考えながら見させる。</p> <p>発表会の司会は教師で行い、話す技能、効果的な発表について評価が書けるよう、簡単な講評を添える。</p> <p>進行に合わせて評価シートの記入の指示を出す。</p>		
まとめ 5分	<p>【4】評価記入</p> 	<p>○最後に、自己評価と振り返りを記入しましょう。</p> <p>○次時は、各クラスから推薦されたグループの映像を視聴します。魅力的な寸劇発表の特徴は何かを皆で考えましょう。また、今回学習した故事成語と意味を組み合わせる問題演習にも取り組みます。</p>	<p>自己評価は、自分の役割を演じ、話す態度や伝わり方を振り返って書くようにさせる。前時で行った発表練習、リハーサルと比べてどう</p>		

			<p>だったか。発表してみてもの手応えはどうかを考えさせる。</p> <p>振り返りは、他のグループを見て、効果的な話し方について気がついたことや考えたことをまとめさせる。</p>	
--	--	--	--	--

13 指標生徒の確認

14 板書計画等

ピクトグラム (NITS 独立行政法人教職員支援機構)

	興味や関心を高める		互いの考えを比較する		思考して問い続ける
	見通しを持つ		多様な情報を収集する		知識・技能を習得する
	自分と結び付ける		思考を表現に置き換える		知識・技能を活用する
	粘り強く取り組む		多様な手段で説明する		自分の思いや考えと結び付ける
	振り返って次へつなげる		先哲の考え方を手掛かりとする		知識や技能を概念化する
			共に考えを創り上げる		自分の考えを形成する
			協働して課題解決する		新たなものを創り上げる

【学校教育目標見直しの際に教職員に配布】

次年度の学校教育目標設定に向けて

カリキュラム・マネジメント推進委員会

《設定に向けた計画》

①②…2/5(水) 2/7(金)学年会

学年で
話し合い

① 担当学年を通して感じる太秦中学校の生徒の課題は何かをあげる。

10年先の未来を「生きる力」として何が足りていないと感じるか。

② “こんな生徒になってほしい”という具体的な目指す生徒の姿を挙げる。

※担当学年の現状を「トコトン」話し合ってください。課題については、「できていないことの羅列，悪いところの羅列」だけで終わらず、「なぜこの状態なのか？」という分析もお願いします。

③…2/13(水) 年度末反省研修会

全員で！

③ 各学年の現状を共有し，生徒に身に付けさせたい資質・能力を考える。

育成を目指す資質・能力＝『伸ばすべき太秦の子が本来もっている良いところ』と『太秦の子が学校生活を通して身に付ける力』を，考えてキーワードを挙げていく。

※学年バラバラのグループをいくつかつくり，どんどん意見を出す方式でいきます。

④…2/19, 2/26 運営委員会 ⑤…2/28(木) 職員会議

運営委員
会で話し
合い

④ 研修会で出た，「資質・能力」のキーワードから学校教育目標案

を作り上げる。※できれば，1，2のフレーズにしぼりたい。

⑤ 次年度の教育目標案を全体に提示する。最後の職員会議でおろし，全体の承

認が得られれば，決定となる。

全体で検討
& 決定

学校教育目標設定に向けて 3年生☆☆

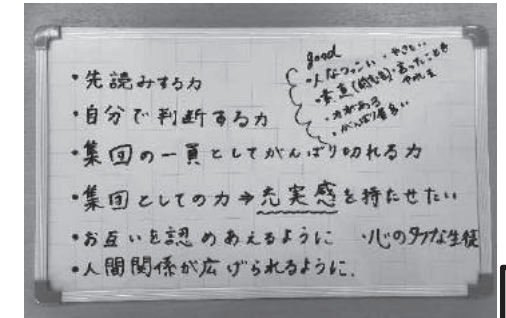
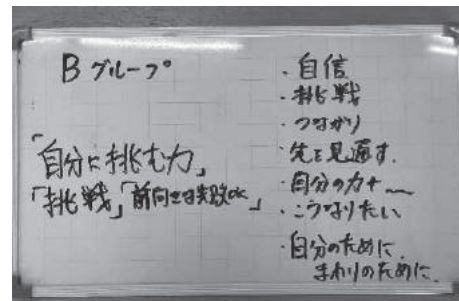
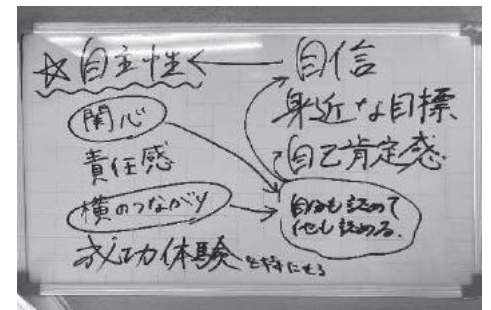
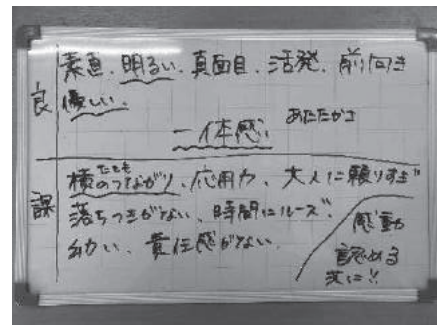
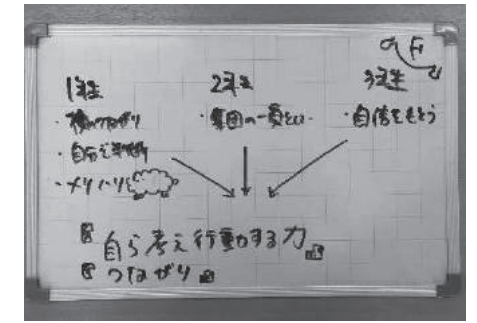
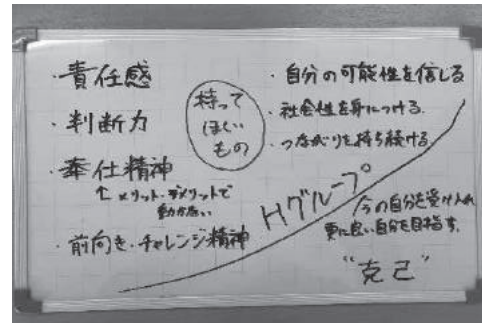
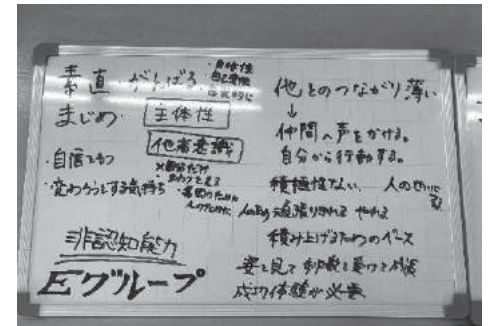
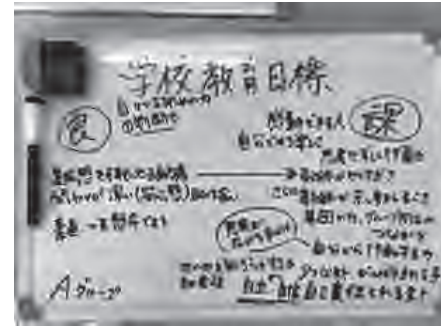
生徒の現状分析をしましょう☆☆

生徒の良いところ	生徒の課題
<p>素直 挨拶ができる・明るい・まじめに取り組める（授業）・活発・行事に積極的に取り組める・機転が利く・周りが見えている・仲間思い・行事で3年生らしく堂々とした取り組み・先輩を見習い成長しようとしている・先進的（スマホの使い方）・進路への意識はある・留学しようという視点（日本より世界）・努力した</p>	<p>・没頭する力・粘り強さ・生徒同士のつながりが弱い・興味が無い生徒と関われない・落ち着きがない・主体性がない・大人にたより過ぎ・下をみて安心する・見下す傾向・委員会や係活動を自発的にできない・責任を持って主旨を伝えることができない・あきらめる・自ら進んでオリジナリティーを出すことができていない =既存アイデア+アイデアの融合 ・価値の創造力に欠ける・不器用・+αの欲・ひたむきさに欠ける</p>
<p>素直さを大切にできている 先輩の影響・教師の働きかけ・家庭の教育力が高い・周りの友達や大人がいる安心感がある・助け合いが居心地の良さになっていると気づいた（学級運営）・マイナスイメージを払拭してスタートが切れた（失敗して注意を受ける前に頑張ることで褒められた）・先輩達の行事での取り組みから刺激を受けている ・下級生からの個性を認める取り組み・地域（保護者）の声・家庭力が高い</p>	<p>あきらめやすい・言い訳上手 他人事になっている・集団での目標に一丸となって進めていないから・自分勝手・生徒の中で上下関係がある・自分の力で何かを成功させた体験が少ない・挑戦する機会が少ない・人の話を聞くことに有用感がない・必要と思っていない・受検などで余力がない・委員会での成功体験がない・先輩や教員の創った枠を超えることができない・観察力に対して行動力が伴わない</p>
<p>素直かつ積極的・感謝する心をもつ・自分に自信が持てるよう前向きにやってみる。成功体験をかさね本当の力にする。 自分自身の良さ（個性）へ気づける・人と地域とつながる力・グローバルな視点・感動させる力と感動できる力・なりたい自分を考え、行動できる</p>	<p>没頭する力 自分自身を大切に、他人も大切にできる・温かく、たくましく・自ら発信する力・受け止める力・自分のことを全うする・人のためにできることをする。その中で資質を高める・相手の良さに気づける・向上心をもつ ・コミュニケーション力・知識と向き合う行動力・社会と関わる学ぶ力（知りたいを大切に）</p>

現状

分析(なぜ?)

目指す姿



1 はじめに

■「カリキュラム・マネジメント」をどのように捉え、どの側面からアプローチしたか

カリキュラム・マネジメントは学校教育目標を達成するための手段である。予測できないこれからの社会を生き抜くために必要な資質・能力を明確にし、学年や教科の枠を超えた枠組みで取組を進めることで、学習効果を最大化することを可能とするのが、カリキュラム・マネジメントであると捉え、取り組んでいる。

本校は、令和元年度に開校し、それは、本研究指定の1年目と重なる。開校にあたり、これからの社会を生き抜くために、義務教育修了段階で付けたい力として「未来を拓く力」を掲げ、令和2年度の学校教育目標を「一人一人の人間性を高め、未来を拓く力の育成」と設定した。さらに、「未来を拓く」ために、「考える力」「発信する力」「コミュニケーション力」「自律的活動力」「多様性を受容する力」「折れない力」という6つを本校で育成する資質・能力として明確化した。この6つを育てるためにはどのようなアプローチが可能かを考えたとき、学校の教育活動の中心である日々の授業を核とすることが真っ先に浮かび上がってくる。授業を中心にしてよりよく6つの資質・能力を育てるために、本校では、カリキュラム・マネジメントの視点で授業改善に取り組むこととした。6つの資質・能力の育成に授業を中心にアプローチするためには、不断の授業改善が鍵となる。そこで、授業改善のためのPDCAサイクルを確立し、学年や教科の枠を越えて取り組むという姿をイメージした。

■「カリキュラム・マネジメント」を行う目的や意味

本校は3小学校、1中学校の統合によって開校した義務教育学校である。厳しい地域実態に加え、少子化により各校の児童生徒数が減少し、児童生徒自身が切磋琢磨する機会が一段と乏しくなることが危惧される中、地域をより良く変えていくための起爆剤として、地域の要望により開校した。「地域とともにある学校を」との強い思いから、小中一貫校というスタイルが選択された。

本校区は、教育力に課題が見られる家庭も少なくはなく、厳しい学力実態にある本校の最大のミッションは、学力向上であると捉えている。この最大のミッションを果たすためには、カリキュラム・マネジメントの手法が必要であると考えている。現状を把握し、学校教育目標の設定及び見直しを図り、学校教育目標に向かう教育内容を学年や教科を越えた視点で組み立て、その実施状況を評価して、改善していくという一連のプロセスを組織的に取り組む環境を意図的に作り、それによって教員がつながり、組織がよりよく機能し、学習効果が高まるということを期待している。開校間もない本校の組織づくりのために、カリキュラム・マネジメントを利用していると言っても過言ではない。

本校では、既述のとおりカリキュラム・マネジメントの視点を用いて授業改善を進めている。本校が目指す6つの資質・能力を育成することと、学力向上というミッションをより効果的・効率的に果たすことを目的として、授業改善を図る「カリキュラム・マネジメント」を進めている。



2 課題の把握及び学校教育目標（育成を目指す資質・能力）の見直し

■学校教育目標

<見直し前>

一人一人の人間性を磨き，未来を拓く力の育成
～果敢に挑戦！知らない自分に会いに行け！～

<見直し後>

一人一人の人間性を高め，未来を拓く力の育成

■育成を目指す資質・能力

「考える力」「発信する力」「コミュニケーション力」
「自律的活動力」「多様性を受容する力」「折れない力」

■課題をどのように把握し，学校教育目標および育成を目指す資質・能力を設定したか

予測困難なこれからの社会を生き抜く力として，高い志や意欲を持った自立した人間として自分と社会の未来を創造していくことができる力を育成することが求められている。また，どのような時代にあっても，生きていくうえで何よりも大切にしなければならないのは，「人としての在り方」だと考えている。このため，本校では，「人間性を磨き，人間力を高める」を教育理念とし，「誠実さ・謙虚さ」「思いやり・感謝・純粋な心」「挫折に負けない心」といった人間性を育て，磨くことを教育の柱としている。

開校前，社会を生き抜く力の育成及び本校の教育理念の具現化を目指し，全教職員一丸となって取り組む旗印として，上記<見直し前>の学校教育目標を設定した。開校前ということで，児童生徒および教職員が新しいことに躊躇なく挑戦していこうとする学校全体のムードを高めるために，スローガンのような文言を目標の一部として加えた。学校教育目標の設定にあたっては，具体的にどのような資質・能力を育成すればその目標を達成したと言えるのか，一丸となって取り組むための共通イメージが必要である。そのため，本校では，「考える力」「発信する力」「コミュニケーション力」「自律的活動力」「多様性を受容する力」「折れない力」の6つを「育成を目指す資質・能力」とし，学校教育目標を具体化した。

1年後，学校教育目標及び育成を目指す資質・能力を見直し，学校教育目標を上記の<見直し後>に変更した。見直すという行為により，教職員集団がさらにまとまり，組織としてより機能する体制づくりを目指した。学校教育目標を変えることで自分たちが設定した目標であると捉えることができ，その目標が自分たちの目指すべき旗印であるとの思いを強くすることができた。

■見直しにあたっての具体的な困りや気付きは？

「今，育成を求められる力」から考えられた学校教育目標であり，全体の目標としてもシンプルでわかりやすい目標ではあるが，開校前に設定された目標であったため，この目標に向かって組織的に取り組むといった熱気や一体感が感じられなかった。開校後1年を経て，学校の実態や課題を鑑み，組織的に取り組むための指針となりうる自分たちの設定した目標とする必要があった。

■解決方法は？

→現状把握を進め，課題の共有を行った後，全体に浸透した学校教育目標とするために，全体で見直しにあたった。現状や課題から目標を大きく変える必要はないと多くの教職員が考える中，文言への違和感が指摘されたため，文言の修正にとどめ，この学校教育目標達成に向け，様々な教育活動を行うことを全体で共有できた。

3 学校体制の再構築

■「カリキュラム・マネジメント」を推進するための学校体制の工夫

<研究前>

小学校と中学校における統合であったため、開校前は教育活動の目的や方法、教員の考え方が校種によって違うことも多く、義務教育学校として開校するにあたっては、教職員の考え方から変える必要があった。

開校に向け、学校教育目標等、トップダウン的に示されることも多かったが、教科部会や各分掌部会を編成し、示された方針に従い9年間を見据えて目標や学習内容や活動方針を考える、などといった形で精力的に様々な案や計画が作成された。

このように、開校にむけたカリキュラム・マネジメントが進み、無事目標に沿った形で開校が迎えられ、カリキュラム・マネジメントの有効性を理解することにつながった。

学力への課題は統合前から各校共通しており、「向島秀蓮学びプラン」を作成し、開校後は、カリキュラム・マネジメントの視点を用いて、授業改善に取り組むこと、「向島秀蓮学びプラン」をツールとして学力向上に取り組むことを共通理解した。

<研究後>

授業改善に向けた取組がより効果的・効率的に進むよう、校務分掌を見直し、分掌表も改善をした。具体的には、学力向上プロジェクトを立ち上げ、プロジェクト推進チームによる研究の推進を図った。

ミドルリーダーによる研修の企画運営や各係による研修の実施、9年間を貫く教科部会の創設・実施、一人一回の公開授業の実施等、一人一人の当事者性を高め、主体的に授業改善に取り組めるような体制づくりを行った。

また、CHECK（評価）を重視し、そこからの改善を図るために、学校評価アンケートの見直し、学校運営協議会の内容の見直し、それらを「改善」に役立てる手立てを考える役割の明確化、標準テストの分析を行う担当の明確化等、各種評価を担当する役割を校務分掌上明確にした。

■すべての教職員が当事者意識を持つまでのプロセスやその取組等について

(1) 9年間を貫く教科部会の創設

今年度は教科の視点で9年間をつなぐことに焦点を当て、教員はいずれかの教科に所属した。少人数で部会が実施され、後期課程の教員にとっては自身の教科に所属することになるため、当事者性は高まる。

(2) 一人一回の公開授業の実施

年度当初に教科部会のメンバーが示され全員が公開授業を行う方向性が出される。特定の何人かが実施するのではないため、納得せざるを得ない状況が生まれる。実際に経験することが最も当事者性を高める。また、事前の部会での授業づくりへの参画も促進される。

(3) ミドルリーダーによる研修の企画運営

企画運営する本人だけでなく、同僚が進める研修は当事者性が高まりやすい。

(4) ワークショップ型研修のさらなる推進

研修のほとんどをワークショップ型で行い、参加者の主体的な関与が実現できた。

■キーパーソンが果たしたそれぞれの役割や動き

＜校長＞

4月、学校経営方針の説明の中で学校教育目標を示し、教職員全員で共有した。1年目から2年目に移る際に、方向性は全く変えないものの、文言を修正することで、学校教育目標や育成を目指す資質・能力を教職員に、より印象付けることをねらった。

また、カリキュラム・マネジメントを促進することの意義等を確認する際には、本校のカリキュラム・マネジメントは授業改善に向けた研究に取り組むことを中心に計画・実践するというを明らかにし、意識付けを図った。特に「教職員をつなぐ」「児童生徒の学びをつなぐ」ということに注力するために、1年目の8・9年のタテ持ちに加え、2年目には5・6年生の完全教科担任制に着手し、授業改善のための教科指導体制の変革および再構築を図った。

＜教頭＞

本校が目指す資質・能力や開校当時に作成した計画といった開校の理念を意識し、教職員の動きを常に俯瞰的に把握をし、ときに指摘し、ときに勇気付けをするなど、PDCAを支える役割を担う。9年間の学びのつながり、豊かな心や人間性を育む人とのつながり、そして、地域とのつながりといったことを意識した取組を円滑に進めるため、準備段階・実践段階・振り返り段階等あらゆる場面で助言が可能となるよう、各取組の全容を把握しておく必要がある。教員と研究主任をつなぎ、教員と教員をつなぎ、教員と授業改善という取組自身をつなぎ、学校と地域をつなぎ、資金面から学校と教育委員会をつなぎといった大きな役割を担うとともに細部へ配慮する役割を担った。

＜教務主任＞

昨年度の反省を受け、校務分掌の研究部を含む「学び推進部」の再編を行い、その結果、より本校の研究やカリキュラム・マネジメントが推進・機能するような係を設定した。そして本校の教育指導計画を受け、年間行事計画や研修日程の計画、教科部会の設定など、教職員が学習内容や指導方法について協議や検討ができる場を作るように計画を立てた。

時間割については、5年生以上で教科担任制を導入にする当たり、時間割表の調整に努めたり、授業力向上強化月間において、教科部会のメンバーが参観しやすいように時間割を組み替えたりして、9年間の教科指導のつながりを教職員が意識できるようにした。また年度総括アンケートでは、より効率的なPDCAサイクルを意識した反省の方法を取り入れた。

＜研究主任＞

年度当初の方針に始まり、授業研究や理論研修、外部からの講師招聘、また、各取組への評価や課題の提示等、カリキュラム・マネジメントの視点をういた授業改善の推進を、2年間、全面的に力強くけん引した。開校したばかりで、まとまりに乏しい教職員集団を、授業改善によって生徒の学力向上を実現するという目的意識を共有し、協働して取り組むことによって、教職員の協働性や同僚性を高めた。開校という他の学校にはないプラス要因があるとはいえ、学校として授業改善・学力向上に進むという方針を具現化するために何が必要かを考え実行するという最も重要な役割を果たした。

■見直しにあたっての具体的な困りや気付きは？ ■解決方法は？

●学力実態の厳しい本校だからこそ授業改善に取り組む必要があり、そこには使命感をもって組織的に取り組んでいる。協働的で実験的であるという面ではカリキュラム・マネジメントの視点で取り組んでいる成果であると実感できる。しかし、教員同士の教育観の違いを乗り越えるために必要な「実践による手ごたえ」に欠ける分、この2年間の取組が軌道に乗ってきたとは思えない。つまり、今後教職員のベクトルが全く別の方に向き、授業改善が停滞し、学力向上も果たせずということになりかねない状況である。

●Check から始まる PDCA サイクルを意識したが、Check のためのツールが十分でなく、機能していないため、改善を図るための材料が乏しい。そのため、教員も評価結果等から改善点を見いだせない。



●教育の効果を最大化するために必要な、教員が児童生徒目線で学習を見るということへの経験に乏しい。

●教員一人一人を見ると、マネジメントしているというより、マネジメントされているといった感じがぬぐえない。

●資質・能力を育てる授業の研究を進めることにおいて、教科横断的な視点を持って取り組む必要がある。

→手ごたえはどこで感じることができるのかをまず考える。また、それが定まらないのであれば、何を評価の指標とするかを提示し、それに基づいて手ごたえを感じられるようにする。根拠として何を採用するのかを提示する。また、手ごたえを日常的に感じることが可能となるよう取組や成果の「見える化」をさらに進める。

また、開校時から教職員の取組のキーワードとして掲げてきた「共有・徹底・継続」を形骸化させないよう、これについても「見える化」し、都度意図的に活用するなどして取組への結束力を維持し高めることをねらう。

→授業がそうであるように、ゴールを明確にしておくことにより、評価材料も明確になってくる。学校全体としては、学校評価アンケートを改善し、定点 Check として、その結果を評価の指標とする。また、それを教職員と共通理解し、改善に取り組む。そのために、アンケートを分析し、何を改善するのかを提言する係や人を明確にし、どのように取り組むのかを組織的に考え取り組める体制を作る。また、学校運営協議会が評価機関として機能し、改善への提言を行う役割を担っていただけよう工夫する。また、学力分析を行うこと、課題を明らかにすること、改善への提言をいっただれが行うのかを明確化し、取組方法を組織として考え、体制を作る。

→授業改善の研修の中で、意識変革を迫り、実体験を積むことが可能となるよう工夫をする。

→マネジメントについて理解を深めるとともに、当事者意識をさらに高めることができるよう研修を工夫する。

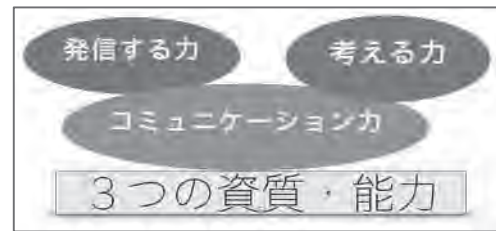
→どの時期にどの資質・能力の育成を目標とするのかを中長期的に他教科との関係で見れるよう工夫し提示する。

4 カリキュラム・マネジメントの3つの視点を踏まえた実践の具体例

① 教科等横断的

全教科を通して本校の考える3つの資質・能力の育成に焦点化した校内研究

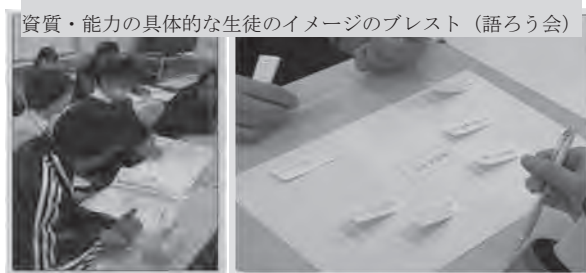
カリキュラム・マネジメントの視点を踏まえて授業改善に取り組むにあたり、本校が育成を目指す6つの資質・能力のうち、「考える力」「発信力」「コミュニケーション力」の3つの育成を校内研究の軸として取り組んだ。全教科において取り組むことに重きを置き、全教科の授業においてアプローチ可能な3つの資質・能力に絞り取り組むことで教育目標の達成につなげたいと考えた。「未来を拓く力」を、9年後に生徒がなりたい自分になるための力であると共通認識をし、そのうえで研究主題を『自ら考え表現する力の育成』9年間構想」とした。



(1) 学年部・ステージを主体とした研究1年目

1年目は、3つの資質・能力を育成するために学年部・ステージを主体とした研究を行った。学年ごとに決めた研究主題と研究の重点を元にして、3つの資質・能力を育成する教科横断的な研究を形にするために、次のとおり具体的に取り組んだ。

i 3つの資質・能力についての具体的な生徒の姿の共有



資質・能力の具体的な生徒のイメージのプレスト（語ろう会）

4月最初の研修会「向島秀蓮の研究について語ろう会」では、学年部でその学年に応じた3つの資質・能力の具体的な姿を話し合った。その上で4月・5月は具体的な生徒のイメージと実際の生徒の姿を比較することで課題を明らかにして、学年研究主題を決定した。

また、研究の重点については、「3つの資質・能力を育成するために育てたい生徒の具体的な姿」の6項目から2項目を選択して重点的に取り組む計画を立てた。

ii 本校の考える3つの資質・能力を育成するために育てたい生徒の具体的な姿

iで先述した3つの資質・能力を授業での具体的な生徒の姿にするとどうなるのか？教職員で共通して描いておきたい姿を統一するべきである。そのような考えから、具体的な姿の6項目を次のとおり設定した。

- 1 自分の考えをもつ
- 2 友だちの意見と自分の意見を比べる
- 3 友だちの意見に質問する
- 4 自分の考えを説明する
- 5 友だちの意見に自分の意見をつないで発言する
- 6 学習の振り返りで分かったことと考えたことを書く

iii 向島秀蓮の研究について語ろう会

令和元年度は、授業研究会の事後研究会の時間を有効活用して「向島秀蓮の研究について語ろう会」を行った。30分間の短時間で効果的な研修を目指して工夫をした。特に校内人材を講師として活用したり、思考ツールを積極的に用いたりして進めた。関連単元配列表を見ながら実践を振り返るなど、視点を明確にした学年会のような位置付けになっていた。

(2) 共に学び合う Critical Thinking を取り入れた授業デザイン **1年目**

3つの資質・能力を伸ばして「自ら考え表現する力」を育成するためには、そのねらいを明確にして授業をデザインし、さらに授業を展開しなくてはならない。つまり、授業改善および授業力の向上が必要となる。1年目は開校前から各校で統一して取り組んでいた Critical Thinking を取り入れた授業を構築していった。Critical Thinking を批判的思考と捉えるのではなく、「その時点での最適解を出すための方法」であると捉えて授業づくりを進めていくこととし、主体的・対話的で深い学びにつながる授業スタイルを目指して、授業では、次の3つを大切にすることを共通理解した。

- ・児童生徒が理解して問い続けられる「問い」の吟味と工夫
 - ・問いの答えは本当にそれで良いのか？さらに最適なものはないのかを考えて、伝え合うことのできる「対話形式の工夫・用いる思考スキルの明確化」
 - ・学んだことをしっかりと理解して確実に言語化できるようにする「振り返り」
- これらのことを進めていくことが「共に学び合う Critical Thinking を取り入れた授業デザイン」であると定義していた。また「クリティカルシンキング活動表」(P76 参照)で詳しい内容(思考スキル)を指導案に明記して意識できるように取り組んだ。

(3) 9年間教科部会を中心とした研究 **2年目**

2年目は前期課程の教職員も後期課程の教職員も参加する教科会を中心とした研究にシフトしていった。理由としては主に2つある。1つ目は、1年目は学年部を中心として研究を進めていったが、前期課程と後期課程で授業を参観し合う機会などがほとんど持てなかったことである。義務教育学校として「9年間構想」を考えるうえで、まだまだ前期課程と後期課程の授業の在り方をはじめとして互いに理解できていないことが課題であった。2つ目は、学力が高くない本校の実態がある中で、9年間を通して独自カリキュラムを作成することで学力向上に繋がられないか、という考えからである。すぐに独自カリキュラムを作成することは難しいが、まずは9年間の縦のつながりを教科学習中心に作ることを先決であると判断した。3つの資質・能力に関わる各教科での生徒の課題を明らかにすることで、独自カリキュラム作成への礎としていくこととしたのである。また、一見教科横断的な視点とは違うように見えるが、昨年度の学年で児童生徒を育てるという横の意識の上に成り立っているのである。9年間を縦と横に俯瞰的に捉える仕組みを構築することで、3つの資質・能力をあらゆる場で一貫性を持って育てていこうとする教職員の意識が強まっているといえる。

●向島秀蓮授業づくりスタンダード

3つの資質・能力を育成するための授業スタイルを、今年度はさらなる浸透を目指して変更している。令和元年度に「Critical Thinking」を取り入れた授業デザインを研究する中で、3つの資質・能力を育成するために授業を構成する3つのポイントに辿り着いた。

そこで、令和2年度は、「共に学び合う授業」を構成する次の3つとして、よりシンプルに授業実践をしていくこととした。

i 秀蓮授業づくり3ステップ～振り返りを起点とした授業づくりへ～

単元や授業をデザインするときには、付けなければならない力をどれだけ指導者が具体的な児童生徒の姿として見通せているのかが重要となってくる。ゴールを描くことができた後に、生徒の実態を踏まえた学習活動の計画が立てられる。そこで、「秀蓮授業づくり3ステッ

プ」を本校の授業デザインのスタンダードとして全学年・全教科で進めることとした。

「どんな振り返りを書かせるのか」は「どんな問いにするのか」と表裏一体であり、その整合性が必然である。ゴールから逆算して授業をつくる考え方を日常の授業に浸透させるべく提案を行った。今年度はコロナ禍で授業が5分間短くなり、休校期間もあったので、実践しづらかったが、この方法での授業づくりを工夫して行うこととした。振り返りで自分の学びを言語化することができれば、生徒に学力が定着していくと信じている。

教職員は、日常の授業でも努力を続けてきたが、9月の授業強化月間（一人一授業を提案）で重点的に取り組んだ。

ii 振り返りの目標と具体例を学びの場に掲示～生徒と教職員でゴールの共通理解～

振り返りの具体的なイメージを教職員も児童生徒も持つために、今年度はレベル別に具体例を提案した。提案したことを児童生徒も教職員もしっかりとイメージすることで、共通実践につながると考えた。そこで、具体例を教室はもとよりプールや体育館など全ての「学びの場」に掲示して活用を試みている。

●新資質・能力育成指導案～ミニマムな参観者視点の指導案～

- ・育てたい資質・能力の目指す具体的な姿と重点的な取組が見える。
- ・生徒の実態（3つの資質・能力の具体的な姿のアンケート結果）が見える。

授業のスタイルを共通のものにするにあたって、今年度は指導案についても統一した。A3サイズ1枚になっている。上記は表紙に記載することで、本校の授業の在り方をコンパクトに表している。我々が授業を通して3つの資質・能力を育成していくということが一目でわかるようになっている。ポイントは下記の通りである。

- ・本時で目指す生徒の振り返りの基準と具体例が3段階で記されている。
- 学習評価（児童生徒の評価・授業者の評価）

前述の「向島秀蓮授業づくりスタンダード」のように、「振り返り」を起点として授業を構築するにあたっては、指導と評価の一体化というねらいも大きい。授業者が本時に「付けなければならない力＝学習指導要領の指導事項に沿った内容」＋「付けたい力＝児童生徒の実態と本校の考える資質・能力に沿っていること」をもとにして、どのようなゴールを描いているかが、具体的な振り返りに表れているからである。

本校ではA・B・Cの3段階で想定している。この3段階は、実際に授業を終えたときには、本時の児童生徒の評価をとるときの基準となる。それと同時に、授業者自身の授業の評価にもなる。授業者は全員がBに至るように授業づくりをしていくべきである。Cの振り返りが多ければ、なぜBに至らなかったのかを検証し、改善していかなければならないし、Aが存在しなければ、Aを生み出すような授業を工夫しなければならない。本時の指導の中に想定される具体的な振り返りを明記することで、生徒の評価と指導者の評価をすることができ、授業改善につながると考えている。

本指導案は、教科横断的に3つの資質・能力を育成するために統一感のある形式となっているが、形式は同じであっても、中身の工夫はそれぞれの指導案で異なってくる。形式が統一されることで、問いの工夫などが見えやすくなり、参観者にとって大変わかりやすいものである。

新資質・能力育成指導案は「授業強化月間」（9月）と「3つの資質・能力を育てるための授業研究会」（10月）で全員が作成し、授業研究を行った。前期課程・後期課程共通の指導案にすることで、授業構築の方法や授業参観の視点を抛り所として、事前・事後の研究会を行うことができた。

第5学年国語科 資質・能力育成指導案「本時で目指す生徒のふりかえり」（P77-79 参照）

A	<p>図表やグラフを用いることだけでなく自分の意見を明確に伝える書き方について書いている。</p> <p>文章と図表やグラフと対応させて書くと説得力が上がると分かった。これから意見文を書くときには、自分の意見に合った資料を選び、どこに着目したのかが分かるように文章に表したいと思います。また、自分の考えと資料から分かったことを区別して書くようにしたいです。</p>
B	<p>図表やグラフを用いることの効果について書いている。</p> <p>文章と図表やグラフと対応させて書くと説得力が上がると分かった。これから意見文を書くときには、自分の意見に合った資料を選び、どこに着目したのかが分かるように文章に表したいと思います。</p>
C	<p>図表やグラフを用いることの効果について触れていない。</p> <p>友達の意見文を読んで分かりやすかった。自分もまねしたい。</p>

② PDCAサイクル

(1) 育てたい資質・能力の具体的な姿児童生徒アンケート 1年目 2年目

前述した6項目の「資質・能力の具体的な姿」は、児童生徒にアンケートをとって実態を把握している。児童生徒自身が自分に今どのような力があるのかを見つめる機会となっている。

それと同時に、児童生徒自身を感じていることと指導者を感じていることに乖離が見られることもあるので、その項目については、重点目標のポイントとして捉えている。児童生徒アンケートの結果を指導案に掲載して、児童生徒の実態をビジュアル化している

1年目は5月と11月に実施したが、変容を活用するまでは至らなかった。今年度は休校などの影響もあり、7月に実施をした。今後は2月に実施をする予定である。今年度は、学校評価アンケートの児童生徒版の中に組み込むことで、アンケートの多さへの負担軽減を試みた。今後、実施時期や項目の見直しを行い、さらに活用できるようにしていく必要がある。

(2) 教科部会の取り組み 2年目

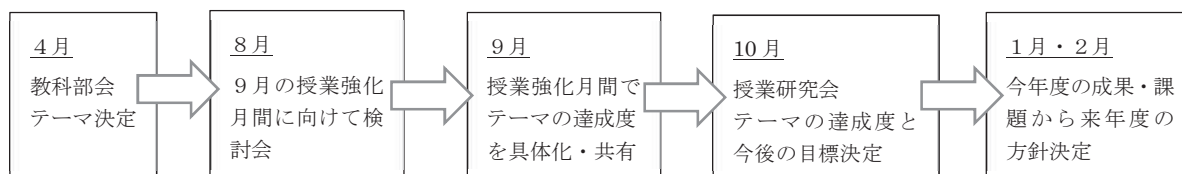
今年度行っている9年間の教科部会では、令和元年度の3月に各部会でどのように教科指導をしていけば、生徒に3つの資質・能力が育つのかを話し合った。独自カリキュラム作成のための第一歩である。

4月の第1回目の「向島秀蓮の研究について語ろう会」では、今年度の方針を伝えるだけではなく、各教科部の部長がテーマについて1分間のプレゼンを行った。そのことで、「自分たちで向島秀蓮の歴史をつくっていくのだ」という気運が高まっていった。

特に、9月と10月は、テーマに即した授業を部会で練って実践した結果、どのような力が付きつつあるのかを児童生徒の姿として検証し、次のステップへの目標を明確にしていった。常にテーマに立ち返って見直すということを繰り返している。取組を随時アップデートしていくことができた。なお、「各教科部会ではっきりさせること」は、「学び推進ニュース」で全教職員に共有をして、縦だけではなく横のつながりも意識できるよう仕組んでいる。

なお、各教科部会のテーマに沿って、下記のようなPDC Aサイクルで教科部会の研究を進めていった。

＜教科部会のPDC Aサイクル＞



(3) カリキュラム・マネジメントと学校評価

学校評価のアンケートをカリマネのPDC Aサイクルに活用することを目的とし、令和2年度にアンケートの設問を変更した。PDC AのCとして、次の実践や計画に活かすことを意識し、生徒および保護者に授業改善の取組がどのくらい浸透しているのか、また、教職員の取組への達成状況を把握するための設問とした。アンケートについては、前期は7月に、後期は12月に実施し、分析・考察したものを後の研修会で共有した。そこでは、継続すべきこと、さらに意識して取り組む内容などを全教職員で共通理解し、方向性を再確認するための貴重な機会となったと考えている。

③ 人的・物的資源等の効果的な活用

●校内エキスパートの活用～校内エキスパートによる指導助言～1年目

昨年度は授業研究会の後の指導助言を京都市総合教育センターの指導主事ではなく、校内の教科のエキスパートを講師として活用した。校内のエキスパートとは、京都市の教科研究会で活躍をしているマイスターやシニアマイスターなどである。向島秀蓮には経験豊富で学術的に教育を捉えているエキスパートが他にも多く存在しているので、もっている力を今後もさらに共有したいと考えている。

●後期課程：タテ持ちシステム～協働でより良い授業づくり～1年目2年目

2年間、8年生・9年生でタテ持ちシステムを導入している。これまで個人で行っていた授業づくりや様々な取組を組織的に行うことで、よりスピード感ある授業改善と指導の標準化を目的としている。2年間実践をして、組織的に取り組む重要性を実感したり、指導力の向上につながったりしていることから、授業改善を軸としたカリキュラム・マネジメントが機能していると考えている。今後は実施する学年やステージを検討するとともに、さらに児童生徒に効果のある取組に発展させたいと思う。

■①～③に取り組む中で見えてきたもの

●教職員の意識が変わった

「学校教育目標達成のための3つの資質・能力を育成する」という明確な目標によって、担当教科や学年が違って、共通の話をする事ができてきた。これまでの「自分の学年」「自分の教科」という意識から「向島秀蓮の子どもをどのように育てるのか」という広い視点で考えることに意識が変革されてきたことを感じる。

●授業の在り方が変わった

「振り返りから授業を構築する」という授業デザインの方法を統一する中で、「問い」について考えていくことにチャレンジする教職員の姿や、具体的にゴールをイメージする方法を日常の授業で実践している姿が見られた。それは、取り組みやすい順序を具体的に示したこ

とが大きかったのではないだろうか。

●同じ目標に向かう連帯感

厳しい学力実態のある本校の生徒をなんとか伸ばしたい。「9年後になりたい自分になるために」独自カリキュラムを作るという長期的な目標を明確にしたことで、「9年間で伸ばす」という意識から、交流が進んできた。これは連帯感につながるのではないかと感じている。

5 成果と課題

■成果

- ・6つの資質・能力を育成することが、学校教育目標の実現につながっているという意識が、教職員の中に生まれている。「向島秀蓮の子ども達をどのように育てるか」という俯瞰的な視点をもっていること。
- ・教科部会を通して前期課程の教職員と後期課程の教職員のつながりが強くなっていること。互いにわからないことを尋ね合い、共有する関係ができてきたこと。
- ・「向島秀蓮授業づくりスタンダード」や「新資質・能力指導案」によって、授業の作り方が統一されてきたこと。
- ・児童生徒が授業の中で振り返りをするのが習慣化してきたことで、より短時間で振り返りをするできるようになってきたこと。
- ・児童生徒が授業において、「考える力」「発信力」「コミュニケーション力」のどんな力を伸ばしているのかを意識して学んでいる様子が、振り返りの場面に表れつつあること。

■課題

- ・教科部会で9年間の縦のつながりはできてきた。しかし、「教科と教科」「教科と学校行事」などの横のつながりはこれから整えなければならない。
→「教科部会」と「教科主任会」「学年部会」の役割をより一層明確にしていこうと考えている。

教科部会…独自カリキュラムを具体的に教科単位で考える組織 教科主任会…教科の横のつながりを俯瞰的につなぐ組織 学年部会…児童生徒の発達段階に合わせて必要な力を明確にして、 カリキュラムについて点検する組織

- ・児童生徒に3つの資質・能力を支えるための基礎・基本の力をどこで確保していくのかということ。
→帯時間を有効に活用するとともに、独自カリキュラムの一部試行などを行っていきたいと思う。つまり、授業を通しての学びと授業外の学びをマネジメントして、サイクル化していく仕組みを整えていきたいと思う。
- ・児童生徒自身が自己評価で自分の育ちを実感できるようにする仕組み作りが必要。
→授業外の場面で、自分の育ちを定期的に振り返り、友人と共有する時間を確保する。
- ・6つの資質・能力が児童生徒にしっかりと浸透していないこと。
→児童生徒自身が考える6つの資質・能力についての自己評価をする場面をつくる。

6 おわりに

■ 2年間のスケジュール

<令和元年度> 1年目

月	取組内容
4月	学び推進部方針提案（3つの資質・能力の具体的な姿を共有） P
5月	
6月	第1回授業研究会<3年生>（研究の方向性の具現化と指導案の提案） D ①資質・能力6つの姿アンケート<生徒>
7月	第2回授業研究会<育成学級>（思考ツールを取り入れた授業とは） D
8月	夏期研修会「研究発表に向けて」指導案研修会 P 中間総括 D
9月	第3回授業研究会<6年生>（言語活動を充実させるために） D 後期課程授業強化月間 D
10月	第4回授業研究会<1年生>（コミュニケーション力とは） D ②資質・能力6つの姿アンケート<生徒>
11月	研究発表会 D 研究発表会振り返り C
12月	
1月	第5回授業研究会<6年生>（思考ツールで言語活動はどう変わる？） A
2月	来年度方針 C
3月	研究の成果物DVD 記録

学年部授業研究会（前期）



<向島秀蓮の研究について語ろう会>

国語科のエキスパートの講義の後に、関連単元配列表を活用して、教科横断的に取り組める言語活動をどのように仕組むのかを話し合っている場面。
3つの資質・能力を育成するために計画的に学習をマネジメントしている。



<研究発表会の振り返り>

「良かったこと」「困ったこと・悩んだこと」「当日まで」「当日」という座標軸で話し合った後、全体で共有している場面。視点を明らかにすることで、短時間でわかりやすい振り返りとなった。

＜令和2年度＞2年目

月	取組内容
4月	方針提案 各教科部会テーマの共有 田村知子教授とのオンライン会議 P
5月	秀蓮授業づくりスタンダード 振り返りシートの掲示
6月	資質・能力育成指導案の検討
7月	新資質・能力育成指導案研修会 P ① 資質・能力6つの姿アンケート＜生徒＞
8月	夏季研修会 9月の授業強化月間の指導案検討会＜教科部会＞ P
9月	授業強化月間（各教科部会テーマを具現化した授業づくり） D C 校内授業研究会の指導案検討＜教科部会＞ A
10月	校内授業研究会（授業強化月間の振り返りを生かした授業づくり） D 田村知子教授からの講評 C
11月	研究の成果物でこれまでの研究を振り返る研修会 C
12月	年度末総括に向けたアンケート調査 C
1月	取り組みの見直しと来年度方針の案を作成 田村知子教授講演会 C A
2月	来年度の方針を提案 P ② 資質・能力6つの姿アンケート＜生徒＞ C
3月	研究の成果物 DVD への記録



＜教科部長によるテーマのプレゼン＞

第1回の研修会で、各教科部長が部会のテーマを1分間でプレゼンしている様子。向島秀蓮の歴史を自分たちで作っていくという気運が高まった。



＜授業強化月間事後研究会＞

9月の授業の事後研究会の様子。短時間・少人数で部会のテーマに沿っての話し合いをしている。この話し合いで、成果と課題を明らかにして今後の方針を修正していった。

7 編集後記的な自由記述

<校長>

カリキュラム・マネジメントに必要なものや得られるものとして、組織文化の高まりがあげられると思いますが、授業改善に組織的に取り組む学校に近づく基礎はできたとは思いますが、チーム（協働）で授業を作るということに関しては、その利点や重要性は理解しつつも、負担感が先に立ってしまっているのが現状です。時間をどのように生み出していくのかという課題に今後もカリキュラム・マネジメントの手法を活用して取り組みたいと思います。

<前期課程教頭>

カリキュラム・マネジメントを進めるにあたり、本校では授業改善を取り組んできている。資質・能力を培う授業の構築の中で、生徒の振り返りをイメージし、それに結びつく問いを考える授業の基本を共有し向島秀蓮の授業スタイルを築き上げていきたい。そのことで生徒自身も授業に見通しを持ち、主体的な学びへとつながるのではないかと考える。築き上げたことを活かし、カリキュラム・マネジメントを通して深い学びへとつながる授業に取り組んでいきたいと思います。

<後期課程教頭>

本校は義務教育学校なので、前期課程と後期課程が足並みを揃えて研究を進められるという利点が強みです。義務教育の9年間を同じ教育目標で同じ視点で授業改善を行うことで、本校が掲げる「学びのつながり」の実現へ近づけると考えます。この「学びのつながり」は、本校学校教育目標「未来を切り拓く力の育成」のために必要なことだと明確に示していくことが大切で、機動力の要因の一つになると感じました。

<教務主任>

義務教育学校である本校では、開校2年目の今年度から、5年生以上の学年で教科担任制を実施し、これまでの小学校（前期課程）の教員にはなかったことに取り組んできました。授業では一部の教科で中学校（後期課程）の先生と協働しており、まだまだ授業改善等の生みの苦しみはあるものの、「これこそがカリキュラム・マネジメントだ！」とみんなが意識しながら「チーム秀蓮」としてよりよい授業づくりに取り組んでいきたいと考えます。

<前期課程研究主任>

2年間を通して最も感じたことは、「カリキュラム・マネジメントは組織をチームに育てる」ということである。学校教育目標に向かって、みんなの力を合わせなければ、子どもたちを育てることはできない。共有・意見交流・反発そして調和。この繰り返しによってチームになるのだと思う。

まだまだ始まったばかりの向島秀蓮であるが、子ども達と教職員の笑顔のためにさらに強いチームになりたいと思う。

<後期課程研究主任>

9年間を貫く教科部会やタテ持ち形態での授業実践、5年生以上の教科担当制といった様々な手段を用いた授業改善を軸として研究を行ってきました。この取組を通して感じることは、これまで職員室での会話の多くが生徒指導中心であったが、この2年間においては授業前の打ち合わせや、確認プログラムテストの結果といった話が異学年と自然発生していることです。また、これまで多くの先生が「個」で行ってきた様々な取組が共有され、指導の平準化につながっていると感じることも多々あります。これは、授業改善を軸として、カリキュラム・マネジメントを行い組織的に多くの学習活動を見直した成果だと言えます。

向島秀蓮小中学校 クリティカル・シンキング活動表

項目	番号	クリティカル・シンキングを促進する主な学習活動等	ベーシック				チーム			ビジョン	
			1	2	3	4	5	6	7	8	9
㉔ 多面的・多角的な視点	1	他者から新たな知識を得る。									
	2	互いの感想を伝え合う。									
	3	共通点や相違点を考えながら話し合う。									
	4	事象の特色、事象の相互の関連を捉える。									
	5	互いの立場や意図をはっきりさせながら話し合う。									
	6	事象の意味を捉える。									
	7	他者の考えを捉え、自分の考えを広げたり深めたりする。									
	8	多様な方法で適切な情報を得て、自分の考えをまとめる。									
	9	事象の意味をより広い視野から捉える。									
	10	相手の立場や考えを尊重しながら話し合い、自分の考えを広げたり深めたりする。									
	11	課題解決に向け、互いの考えを生かす合う。									
	12	人間、社会、自然などについて自分の考えを広げたり深めたりする。									
㉕ 分析	1	時間や事柄の順序などを捉える。									
	2	重要な言葉や文を捉える。									
	3	中心となる言葉や文を捉える。									
	4	事実と意見との関係を捉える。									
	5	目的に応じて、文章などを要約する。									
	6	目的に応じて、文章などの内容を的確に捉え、自分の考えを明確にしながら解釈する。									
	7	文章の中心的部分と付加的部分を読み分ける。									
	8	文章の全体と部分、例示や描写の効果などを捉える。									
	9	文章の論理の展開の仕方を捉える。									
㉖ 論理的思考	㉖ 論理的思考	1	根拠をもとにして自分の考えを話したり、書いたりする。								
		2	事柄の順序に沿って、文章や話を構成する。								
		3	表記の間違いを正す。								
		4	段落相互の関係に注意して文章を書く。								
		5	目的に応じて、理由や事例を挙げて書く。								
		6	複数の事柄を比較したり関係付けたりして、考え表現する。								
		7	よりよい表現になるよう書き直す。								
	㉗ 論理構築	8	数量を表やグラフで表す。								
		9	事実と考えを区別して書く。								
		10	条件に着目して考えたり、推論したりする。								
		11	引用したり、図表やグラフなどを用いたりして文章を書く。								
		12	表現の効果について確かめたり工夫したりして書き直す。								
		13	話し合いの話題や方向を捉えて話し合う。								
		14	表記や語句の用法、叙述の仕方などを確かめて書き直す。								
		15	説明や具体例を加えたり描写を工夫したりして書く。								
		16	論理の展開を工夫し、説得力のある文章を書く。								
		17	文章を批判的に読みながら、自分の考えを深め、表現する。								
㉘ メタ認知	1	「なぜそう思うか。」									
	2	「本当にそれでいいのか。」									
	3	「他に方法はないのか。」									
	4	「大事なことを落としていないか。」									
	5	「順序立てて考えられているか。」									
	6	「はじめ・中・終わり、と内容を分けて考えられているか。」									
	7	「話の中心とずれていないか。」									
	8	「話題に合った内容になっているか。」									
	9	「相手の言いたいことが分かっているか。」									
	10	「起承転結など、効果的な構成で考えられているか。」									
	11	「自分の考えを、的確に分かりやすく表現しているか。」									
	12	「相手の考えを参考にして考えているか。」									
	13	「それぞれ(の立場や人)の考えを比べながら、分かりやすく表現しているか。」									
	14	「自分の考えをもちながら、様々な考えを取り入れて、考えを広げているか。」									
	15	「目的や状況に応じて、考えを論理的かつ効果的に表現しているか。」									
	16	「論理の展開の仕方や表現の仕方について評価し、自分の表現に役立てているか。」									

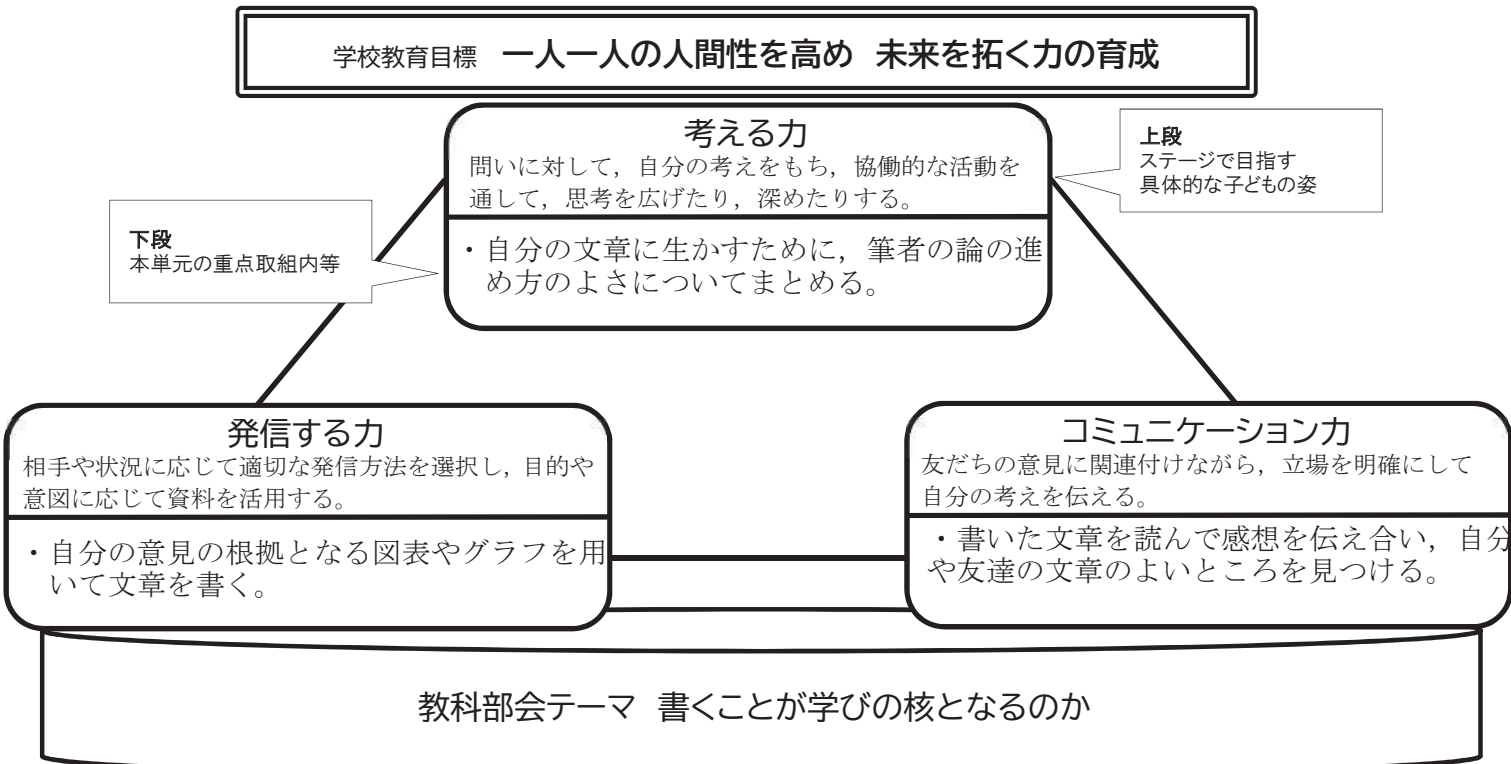
部会で検討して作成しました。赤の部分に向島秀蓮小中学校に向けて新たに加えた項目になります。また、オレンジのところについても、学年を考え可能と判断した項目になります。項目ごとに記号や番号をふったので、指導案などで記載する際に、㉔-㉗-1(論理的思考-分析-時間や事柄の順序などを捉える。)とできるようにしました。

資質・能力育成指導案

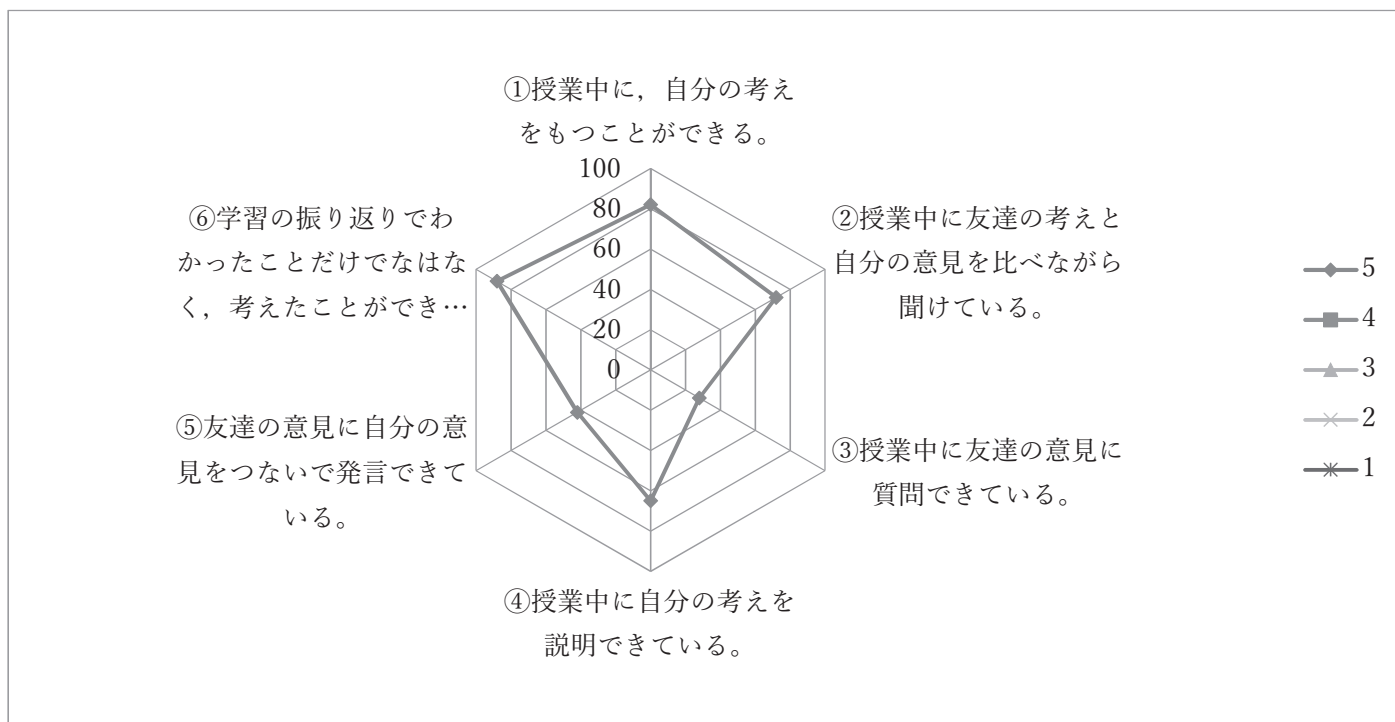
京都市立向島秀蓮小中学校

指導者 前期課程国語科 高田 裕宇

1. 日時 場所 令和2年9月30日(水) 第5校時(13:15~14:00)
2. 学年 組 第5学年2組
3. 資質・能力の育成に向けて



(資料) 資質・能力の育成に向けた実態調査



4. 研究協議授業

(1)教科・単元名 国語科・資料を用いた文章の効果を考えて意見文を書こう

(2)小単元の見通し

- ・情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うことができる。(知・技(2)イ)
- ・引用したり図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができる。(思・判・表Bエ)
- ・目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見つめたり、論の進め方について考えたりすることができる。(思・判・表Cウ)
- ・粘り強く文章と図表などを結び付けて読み、学習の見通しをもって、読み取った筆者の工夫を生かして、統計資料を用いた意見文を書こうとしている。(主体的に学習に取り組む態度)

(3)単元計画と評価規準

時	単元計画	評価規準と評価場面
1	単元の見通しをもつ。	○知識・技能 10 情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使っている。(発言・意見文)
2	文章の構成を整理し、内容を捉える。	○思考・判断・表現 5 「読むこと」において、目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けたり、論の進め方について考えたりしている。(発言・ノート)
3		
4	筆者が図表やグラフ、写真を使った意図と効果を考え、要旨を捉える。	10 「書くこと」において、引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫している。(発言・意見文)
5	筆者の考えや論の進め方について、自分の考えをまとめる。	
6	5でまとめたことや、図表を用いて書くときに生かしたいことをグループで出し合う。	
7	意見文を書くことについて学習の見通しをもつ。	
8	統計資料を調べたり、教科書のグラフや表を参考にしたりして、自分の考えに合う資料を集める。	11 「書くこと」において、昔いた文章に対する感想や意見を伝え合い、互いの文章のよいところを見つけている。(発言・ワークシート)
9	グラフや表を用いて、意見を文章に書く。	
10		○主体的に学習に取り組む態度 8 粘り強く文章と図表などを結び付けて読み、学習の見通しをもって、読み取った筆者の工夫を生かして、統計資料を用いた意見文を書こうとしている。(発言・ノート)
11	書いた文章を友達と読み合い、説得力があるところについて、意見や感想を交流する。	


(4)各教科における9年間構想シート 別紙参照

5. 本時の目標

グラフや表の使い方、文章の構成のしかたに着目して意見文を読み合い、文章のよいところを見つけることができるようにする。

6. 本時の展開

本時の学習活動で重点化している資質・能力：発信する力			
学習活動 対話の形式	主な発問(○) (・予想される生徒の反応)	支援◇と留意点◆	・評価場面[⇄] ・参観者 eyes (3つの資質・能力を育成するための工夫)
1 本時のめあてを確認する。	○これまでに、グラフや表を用いて意見文を書きました。今日は、書いた意見文を読み合って文章のよいところを見つけましょう。	◇資料はどう説明されているか、考えを裏付けるものになっているかといった視点を示し、読む視点を確かめる。	
問	これから意見文を書くときに生かしたいことは何か。		

<p>2 意見文を読み合い、感想を交流する。</p>	<p>○友達の意見文で、分かりやすかったところはどこですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料と文章が対応しているので分かりやすかったです。 ・自分の意見に合った部分を文章で説明しているので分かりやすかったです。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆「同じ立場のグループ」「異なる立場のグループ」で交流し、何に注目してそれをどのように説明しているのかが分かるようにする。 ◇感想がもちにくい場合、「分かりやすいと思ったところ」「なるほどと思ったところ」から見つけるように助言する。 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>参観者 eyes</p> <p>「同じ立場のグループ」→「異なるグループ」で交流することで、考えが広がっているか。</p> </div>
<p>3 交流で気づいたことを共有し、資料を用いて意見文を書く時に大切なことをまとめる。</p>	<p>○説得力のある文章を書くためには、どうすればいいですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・目的に合った資料を選ぶようにしたいです。 ・資料と文章を対応させて書きたいです。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆モデル文を基に文章の構成を確かめられるようにする。 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>参観者 eyes</p> <p>国語科に限らずいろいろな場面での活用を想定して自分の考えをまとめているか。</p> </div>
<p>4 単元の学習を振り返る。</p>	<p>○これから意見文を書くときに生かしたいことは何ですか。</p>	<p>◇教科書の「たいせつ」や板書を参考にし、資料を用いて文章を読んだり、書いたりするときのポイントを確かめる。</p>	

本時で目指す生徒のふりかえり

<p>A</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;"> <p>図表やグラフを用いることだけでなく自分の意見を明確に伝える書き方について書いている。</p> </div> <p>文章と図表やグラフと対応させて書くと説得力が上がると分かった。これから意見文を書くときには、自分の意見に合った資料を選び、どこに着目したのかが分かるように文章に表したいと思います。また、自分の考えと資料から分かったことを区別して書くようにしたいです。</p>
<p>B</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;"> <p>図表やグラフを用いることの効果について書いている。</p> </div> <p>文章と図表やグラフと対応させて書くと説得力が上がると分かった。これから意見文を書くときには、自分の意見に合った資料を選び、どこに着目したのかが分かるように文章に表したいと思います。</p>
<p>C</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;"> <p>図表やグラフを用いることの効果について触れていない。</p> </div> <p>友達の意見文を読んで分かりやすかった。自分もまねしたい。</p>

3つの資質・能力 イメージを 具体化して 形にしよう

開校1年目の挑戦

本校では、学校教育目標を達成するために「たくましい心」「優しい心」「自律の心」「コミュニケーション力」「発信力」「考える力」の6つの資質・能力の育成を目指している。研究では特に「コミュニケーション力」「発信力」「考える力」の3つにフォーカスして前期課程・後期課程でコラボしながら日々取組を行っている。

開校1年目の挑戦

開校1年目である本校は、何かと忙しい。その中で、授業研究会の後の事後研究会の時間をマネジメントした。そして、「向島秀蓮の研究について語る会」を行った。短い時間で実りのある研修会を目指している。前期課程も後期課程も一緒に学ぶことに意義がある。

短い時間で
実りのある
語るう会に
しよう

3つの資質・能力の具体的な生徒の姿って？

4月 学び推進研修会

資質・能力の具体的な生徒の姿を学年部で共有した。その後、5月に生徒を観察したとアンケート結果を合わせて分析して、**学年指導重点**を決定した。



学校教育目標・研究主題・
資質・能力との
つながりを共通理解する
重要性

発信力

思考力

コミュニケーション力

指導案のアップデート 1枚目で研究の方向性を表現

育てたい資質・能力を可視化



第1回 研究部会

前期課程・後期課程、様々な声があった中、疑問を付箋に書いてKJ法で整理した。その後、研究部のメンバーの意見を取り入れて、よりシンプルな指導案の形式に改定した。

「向島秀蓮の研究について語る会」30分間が勝負！

育てたい資質・能力を明確にした授業づくりや教育活動を俯瞰的にマネジメントする力の向上を目指す研修会

事後研究会のタイムテーブル 授業終了 10分～15分後から5の動き

時間	内容
15分間	小グループでの協議 ○行軍をもちより、PMの表を用いて話し合い ○各学年の育てたい資質・能力に即した話し合い
25分間	全体協議 ○学校長の話 ○授業者より ○全体協議
30分間	指導助言
25分間～30分間	向島秀蓮の研究について語る会
5分間	○学校長の話

クリティカルシンキングで
鍛えたい思考スキルと思考ツール



研究発表会に向けて！
前回の語るう会の後に実践したことを語ろう



対話の形式・言語活動を中心にして学年の取組を明確にしよう
～関連単元配列表を参考にしてフィッシュボーンで考えよう～

道徳の授業づくり 道徳推進委員より

指導主事との 事前の授業検討 勉強会



居林主任指導主事と研究発表会の前に連絡を取り、指導案の検討会と特別活動の勉強会を行った。研究会当日までに、大きな学びを得ることができた。

令和2年度 向島秀蓮小中学校 学び推進部

京都市立向島秀蓮小中学校

学び推進部

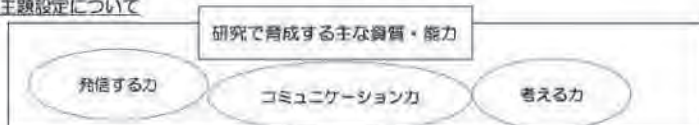
1. 学校教育目標

一人一人の人間性を高め、未来を拓く力の育成

2. 研究主題

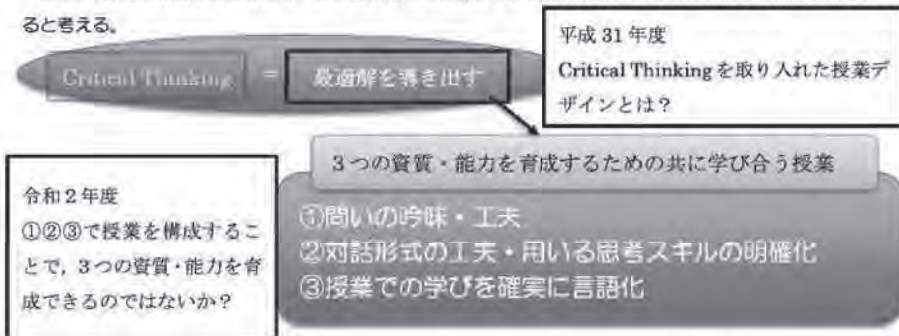
「自ら考え表現する力の育成」9年間構想
～共に学び合う授業を通して～

3. 研究主題設定について



学校教育目標の「未来を拓く力」とは、将来生徒が自分の夢を実現させて、「なりたい自分になること」であると考え、夢の実現の過程では、自己表出力や、課題解決力が必要となる。そこで、本校の研究では9年間かけて「自ら考え表現する力の育成」を目指すこととする。さらに「自ら考え表現する力」を育成するための資質・能力を「発信する力」「コミュニケーション力」「考える力」の3つに焦点化している。

また、「共に学び合う授業実践していくことで3つの資質・能力を伸ばし、自ら考え表現する力が育成できると考える。



これまで本校では「Critical Thinking」を取り入れた授業デザインを研究する中で、3つの資質・能力を育成するために授業を構成する①②③のポイントに辿り着いた。そこで、本年度は授業を構成する要素を上記の3つとして、よりシンプルに授業実践をしていくこととする。

4. 重点目標

- ①9年間を見通した系統性のある授業実践・家庭学習指導・チャレンジ活動・教科学習を行い、自ら考え表現する力の育成を目指す。(秀蓮メソッドの見直し)
- ②学校教育目標達成に向けた「発信力」「コミュニケーション力」「考える力」の3つの資質・能力の育成にフォーカスした授業実践を行い、「問いの吟味・工夫」「対話・思考スキルの充実」「言語化」を計画的に重点課題として取り組む。
- ③学年部・ステージ部・教科会の3組織で研究を行う。今年度は特にステージ部と教科部会の2組織を中心として9年間のカリキュラムマネジメントを実践し、義務教育学校「向島秀蓮小中学校」の独自カリキュラム・研修組織の形態を追求していく。全員が教科部会に所属して授業研究と秀蓮の独自カリキュラム作成のための研究を行う。(秀蓮学びのカリキュラムの見直し)
- ④教科ごとに各ステージの学びの目標や「育てたい資質・能力を支える基礎・基本項目」を明確にして実践し、学力の向上と定数を目指す。
- ⑤育てたい資質・能力を明確にした授業づくりや、教育活動を体系的にマネジメントする力を向上するための研修を短い期間で有効に行う工夫をする。
- ⑥教職員アンケートや生徒のアンケートで研究の成果と課題を検証しながら、改善を繰り返していく。

＜本校の進めている研究の概要＞
 ・文部科学省「これからの時代に求められる資質・能力を育てるためのカリキュラム・マネジメントの在り方に関する調査研究」指定重点テーマ
 ・「学校の教育目標等の設定及び実践」
 ・研究テーマ「授業研究を軸として3つの資質・能力を育成し、学校教育目標の達成を目指すカリキュラムマネジメント」
 ・京都市教育委員会「「授業実践・研究」の工夫・改善推進協力校」
 ・京都市教育委員会「「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業研究発表会」」
 ・福川郡松尾町立「向島秀蓮小中学校」

5. 具体的な取り組み

(1) 日々の授業の充実

- ・秀蓮学びのメソッドの流れに沿った授業を継続して行い、改善点等を検討していく。
- ・授業の最後でわかったことと考えたことを、ふりかえりとしてめあてに即して確実に言語化することで、学びを確かなものとし、家庭学習とのサイクル化を目指す。
- ・「問いの吟味・工夫」「対話・思考スキルの充実」「言語化」の3つのポイントで授業を構成し、「発信力」「コミュニケーション力」「考える力」の3つの資質・能力の育成を目指す。
- ・思考方法に焦点をあてた思考ツールを活用することで、複数の情報を分類・整理し、言語化できるようにする。
- ・6月と12月を授業強化月間として、日常の授業を強化テーマに沿って参観し合う期間とする。
- ・4月～6月を「問い」強化期間、7月～10月を「対話・思考スキル」強化期間、11月～2月を「言語化（ふりかえり）」強化期間として、それぞれ研究に取り組む。

(2) チャレンジタイム

- ・パーソナルステージでのトークトレーニングを積み重ねることによって、何でも安心して話せる学習集団を形成し、授業で生徒がたくさん話せるようにする。

- ・ベーシックステージのチャレンジタイムの木曜日朝は、初見の資料を読むことに慣れるために、読解の資料の読み取りを行う。
- ・チームステージ・ビジョンステージについては、基本的に朝読書であるが、考査前や確プロ前には、学年統一で重点課題に取り組む時間充てても良い。

(3) 家庭学習・総合考査

- ・授業で分からなかったところやもっと調べたいことをふりかえりて明らかにして、その日の家庭学習に活かすことを習慣化できるようにし、学力の定着を図る。
- ・学びのメリット「目指す家庭学習」を徹底する。
- ・総合考査に向けて、生徒が家庭学習で計画的に復習を進められるように、学習の仕方を紹介する。

(4) メディアセンター 情報ICT・図書館教育

- ・プログラミング研修の実施
- ・ピアサポートとも連携しながら計画的な読書活動と学校図書館の活用を推進

(5) 英語力向上プロジェクト

- ・New English Dayの取組と英語力向上プロジェクトの実施

(6) タテ持ちプロジェクト

- ・ビジョンステージでのタテ持ちを実施
- ・今後も持続可能なものとして継続的に実施できるように検討を重ねていく。

(7) 遊感教育

- ・指導者・児童委員のローテーションを実施し、資力の授業力向上をめざす。

(8) 蓮花タイム

- ・筆先構想の発信しを行う。
- ・テーマ「貢献」をより一層意識した学習の構築

(9) 学校園

- ・生活科・道徳のカリキュラムと連動した計画的な場内・運営を行う。

(10) カリキュラムマネジメントの視点からの取組

①授業研究について

- ・資質・能力を育成するためにあらゆる教科で授業研究に取り組む。
- ・授業研究会は、6月18日(木)・9月17日(木)の両日に複数教科で教科別に指導案を伴って研究できるようにする。11月13日(金)の「小中教育フォーラム(仮)」では、全クラスでの授業公開を目指して、日々の授業力が向上するように研究を重ねる。今年度は教科部会を中心として授業の事前検討を進めることとする。上記以外にも、教科で全体での学年部研究会、ステージ研究会、教科研究会の組織で研鑽を積めるようにする。
- ・事後研究会では付箋を用いてPMI表を活用し、小グループでの話のポイントが明確になるようにする。
- ・事後研究会では教科の話にとどまらず、資質・能力について具体的な話をしていくこととする。
- ・日々の授業力向上を目指して、「指導案のない授業研究会」を行う。

②授業を伴わない研修について

- ・マイスター・シニアマイスター等、校内のエキスパートを講師として活用した研修を行う。
- ・校外の研修会に参加した教職員の伝達をスムーズに行えるように工夫する。

③研究のPDCAサイクル

- ・生徒の実態を捉えて、育てたい資質・能力を具体化するために、5月に「資質・能力の育成に向けた生徒の実態調査」を行う。研究の達成度や改善点を見出すために10月にも行う。最後は2月に研究の成果と課題を明らかにして、次年度に生かす。

向島秀蓮学び推進部ニュース

学び推進部

各教科部会のテーマが 決定しました



令和2年度
第1回目
向島秀蓮の
研究について
語ろう会

「各教科部会のテーマ」
について語ろう会

各教科部会テーマ

音楽科

心が動いた瞬間の共有

図画工作・美術科

形や色に思いをこめる

技術・家庭科

1人で生きていくための
最適解を見つける

保健体育科

振り返りでの言語活動による
技能改善へのアプローチ

1組

かかわり合いながら
豊かに表現する子

日本語教室

主体的に学びための
日本語力の育成

LD等通級教室

Ordermadeの学びが
自信と意欲に

国語科

“書く”ことが学びの核に
なるのではないか??

社会科

The“思考力”～言語化～

算数・数学科

思考を深めるための
学習のめあて、問いづくり

生活・理科

ステージごとに重点化した
授業構築による9年間を
見据えた深い思考力の育成

英語科

思考を伴うコミュニケーション活動の展開
「考えながら聞く」「考えながら話す」
「考えながら読む」「考えながら書く」
力の育成

特別の教科 道徳

子どもが〇〇したくなる
「問い」作り



4月6日(月)の「第1回向島秀蓮の研究について語ろう会」においては、各教科主任の皆様の熱いプレゼンテーションをありがとうございました。各教科部会で決められた研究テーマを、全体で共有することができました。

「テーマ」とお話ししましたので、様々なタイプの文言が出揃いました。多岐に渡るように思いますが、いくつかに分類することができます。「授業づくりで大切に実践したいことが表現されているテーマ」、「育成したい生徒の姿を表現したテーマ」、「3つの資質・能力の中で重点的に取り組みたいことが表現しているテーマ」の大きく3つといえるでしょう。いずれも研究の主題や課題となっています。

さて、テーマの具現化に大きく関わるのが具体的な取組であり、授業だと考えます。各教科部会の具体的な取組は、センターサーバ→「学び推進」→「R2」→「教科部会」に入力頂いています。ご自身の所属する教科部会のシートのご確認と共に、他の教科部会の具体的な取組についてもご一読ください。そして、「研究テーマに当って、ずばりこんな授業をするのだ。」という具体的な授業の姿を思い描いてご準備をお願いいたします。休校明けに、生徒が「やってみたい!伝えたい!わかった!」と言える授業をつくっていきましょう。

向島秀蓮小中学校

2年目の挑戦

生徒が9年後になりたい自分になるために

開校2年目の向島秀蓮小中学校では、生徒が9年後の自分を
見据えて日々実践をしています。卒業時の「出口保証」
のために、義務教育学習9年間で何が出来るのか。近々中
に「秀蓮独自カリキュラム」の作成を目指して、9年間の
カリキュラムマネジメントを行っています。

独自カリキュラム作成に向けて、今年度は9年間の教科
部会を中心とした研究テーマに変わりました。縦のつな
がりを意識して、前期課程と後期課程の後継員がより一層
力を合わせています。また、互に生徒以上のTeam stageから
教科担任制で学習指導を行っています。

「9年後 になりたい自分になるために」
私たちの挑戦はまだ始まったばかりです。

研究主題について

学校教育目標の「未来を拓く力」とは、生徒が自分の夢
を実現させて、「なりたい自分になること」であると考える。
夢の実現の過程では、自己認知や、課題解決力が必
要となる。そこで、本校の研究では9年間かけ「自ら考
え表現する力の育成」を目指すこととする。さらに「自ら
考え表現する力」を習得するための資質・能力を「発信す
る力」「コミュニケーション力」「考える力」の3つに集
約している。また、「共に学び合う授業」を実践してい
くことで3つの資質・能力を伸ばし、「自ら考え表現する
力」の育成を目指す。

本校研究について
自ら考え表現する力の育成
9年間構想
～共に学び合う授業を通して～

学校教育目標
一人一人の人間性を高め、3つの資質・能力の育成

3つの資質・能力
発信する力 考える力
コミュニケーション力

研究主題
「自ら考え表現する力の育成」9年間構想
～共に学び合う授業を通して～

京都市立向島秀蓮小中学校
〒612-8141 京都市伏見区向島二ノ丸町151-28
☎075-611-3346 FAX 075-611-1214

京都市立
向島秀蓮小中学校

向島秀蓮 3つのチャレンジ

01

9年間教科部会

- ✓教科部会ごとにテーマを設定
- ✓研究授業の指導案検討・事後検討会
→幅時間・少人数の話し合い
- ✓9年間のカリキュラムマネジメント
→9年間で何が出来るのか？の研究

秀蓮授業づくりスタンダード

秀蓮授業づくり3ステップ

- ①生徒のふりがえりを具体的に書いて設定する。
→つけたい力と生徒の姿を明確化
- ②ふりがえりにいたるための「問い」
をつくる。→問いとふりがえりの整合性check
- ③学習活動を進める。

新資質・能力指導案

- ✓参観者目録のミニマムさ
→A3サイズ1枚
- ✓本校の考える3つの資質・能力を育成
するための工夫を明記

9年間教科部会 テーマ

国語科

「書く」ことが学びの
核になるのではないかと

英語科

「聞きながら書く」「考えながら話す」
「読みながら聞く」「考えながら書く」
の育成

社会科

The「思考力」～言語化～

音楽科

心が動いた瞬間の共有を
軸とした
授業デザイン

保健体育科

振り返りでの言語活動による
技術改善へのアプローチ

算数・数学科

思考を深めるための
学習のめあて、問いづくり

図画工作・美術科

形や色に思いをこめる
授業づくり

1組

かがり合いながら
差かに表現する子の育成

日本語教室

「主体的に学ぶ」ための
日本語力の育成

生活・理科

ステージごとに重点化した
授業構案による9年間を
見据えた深い思考力の育成

技術・家庭科

1人で生きていくための
最良解を見つける
力の育成

特別の教科 道徳

子どもが〇〇したくなる
「問い」作り

LD等通級教室

Ordermadeの学びが
自信と意欲に

向島秀蓮の研究についてのMovieはコチラ



関係者の許可を得た上で公開しております。無断での転載、複製等は法律により罰せられます。

<http://www.city.kyoto.jp/hp/mukai/mashuren-sc/movie/2020kenkyu.mp4>

10 新しい時代におけるカリキュラム・マネジメント

新型コロナウイルス感染拡大を受け、児童生徒の学びを保障するため、各学校においては、学校全体で組織的にカリキュラム・マネジメントに取り組み、これまで当たり前のように前年踏襲で行っていた取組や行事等を見直さざるを得ない状況になっています。また、かつて経験したことのない状況の中で、子どもたちが変化を前向きに受け止め、豊かな創造性を備えた持続可能な社会の創り手として、一人一人が他者との関わりの中で目指すべき社会像を描き、共有し、実現していくために必要な資質・能力を育成することが求められています。



京都市立学校では、GIGAスクール構想により1人1台端末の環境が整っており、今後、ICT環境を活用し、指導方法や指導体制の工夫改善により、「個に応じた指導」の充実を図りながら、「主体的・対話的で深い学び」を実現し、学びの動機付けや幅広い資質・能力の育成に向けた効果的な取組の展開が期待されます。そのため、端末の活用を当たり前のこととし、児童生徒自身がICTを自由な発想で活用する環境や授業デザインが求められます。また、カリキュラム・マネジメントを充実させ、各教科等で育成を目指す資質・能力等を把握したうえで、ICTを「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に生かしつつ、学習の基盤となる資質・能力、現代的な諸課題に対応する資質・能力はもとより、従来は伸ばせなかった資質・能力の育成を図っていくため、家庭学習はじめ、学校外での学びの充実を図っていくなど、Society5.0時代にふさわしい学校教育の実現を一人一人の教職員が意識していくことが求められています。

そのような状況の中、管理職に期待されることは、ビジョンを明確に示し、日々の具体的な取組において教職員のボトムアップを柔軟に受け入れるなどしながら、カリキュラム・マネジメントの3つの側面を視点に、教務主任、研究主任がリーダーシップを発揮できるようにサポートすること、全国学力・学習状況調査や学校評価等だけでなく、教員それぞれが日々の授業を振り返り、カリキュラムを微調整するよう意識させること、地域社会等と十分な連携を図ることなどが大切となります。また、教職員に期待されることは、教務主任、研究主任等のリーダーシップのもと、学校全体で育成を目指す資質・能力を意識し、具体的な児童生徒への手立てを思い浮かべながら、授業改善、行事等の見直し、組織の活性化等を自分事として捉え、考え、実践していくことが求められます。すべての教職員がそれぞれの持ち味を生かしながら力を合わせ、自校の教育課程を語り合える学校づくりを通して、「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し、児童生徒が社会に出てからも学んだことを生かせるようにしていくことが求められます。児童生徒が、社会に出てから直面する問題は、教科ごとではありません。教科ごとに問題が出てくるのは学校だけであり、卒業後も生きて働く資質・能力を育成すること、各教科等で習得した力が将来にもつながるよう、学校教育の質の向上を図っていくことです。

現状では、コンテンツ・ベースの教科横断的な取組事例は多くみられるものの、コンピテンシー・ベースの事例はまだ少ないといった課題があります。コンテンツ・ベースの視点では、教科書を通して学習を進めていけば、学年進行とともに学習内容が高まり、深まっていきます。これと同様に、コンピテンシー・ベースの視点においても、学年進行とともに学習内容を高め、深めていけるよう、学年間のつながりを学校全体で共有するような研究実践が期待されます。育成を目指す資質・能力を踏まえ、学年ごとに目指す児童生徒の姿の具体像を共有したうえで、学年進行で成長する具体像を校内全体で共有しながら、小中9年間を見通した取組につなげていくことがすべての学校に求められています。

国立大学法人大阪教育大学大学院連合教職実践研究科 田村知子教授から

OECD Education 2030 が提案した「ラーニング・コンパス」においては、生徒のエンジェンシー「変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力(OECD 2019, 訳は白井 2020)」が中核的概念とされています。エンジェンシーは、育成すべきコンピテンシー(目標)としても、学習の当事者としての積極的な関わりの発揮(プロセス)としても指定されています。筆者は、以前より、児童生徒のカリキュラム・マネジメントへの関与の可能性を論じてきました(田村 2016 他)。カリキュラムは子どもにより「学ばれる」ものです。学びの主体である子どもが、自分たちの学びをよりよいものにしようと目標をもったり、学び方を学んだり、自ら学習を振り返ったり、学習環境である学級の雰囲気をもポジティブなものにすることに積極的に関与したりすることは、大きな目でみれば、カリキュラム・マネジメントへの「参加」とも捉えられます。このことは、まさにこのエンジェンシーの育成と発揮の考え方と重なるものです。また、学習指導要領が育成をめざす「主体的に学習に取り組む態度」の評価は、「粘り強い取組を行なおうとする側面」と「自らの学習を調整しようとする側面」の2軸から行うことが提唱されています(文部科学省・国立教育政策研究所)が、エンジェンシーは、これらとも関わる概念です。

ところで、子どものエンジェンシー発揮は、「教師の専門性や教師による指導を否定するものではない(白井 2020)」ことを強調しておきます。むしろ、子どもがエンジェンシーを発揮するためのスペースを用意し、適切に支援し、軌道修正や抑制を行うためには、教師の高い専門性や指導性が必要となります。子どもの声を上手く引き出す力や、適切な指導方法を選択する判断力が必要です。簡単なことではありませんが、発達段階を考慮しながら、子どもと教師が共に授業や学習環境をつくっていくなかで、子どもが見せてくれる成長は教師の手応え、喜びとなります。

子どもだけではありません。教員以外の職員や専門スタッフ、保護者や地域、学校に協力してくれる企業やNPOなどのステークホルダーを巻き込み、ビジョンを共有し、それぞれの立場に応じた、カリキュラムへのポジティブな関与を引き出すことがこれからの学校運営には求められます。例えば、地域住民に外部講師を依頼する際は、学校のビジョン、関与してもらおうカリキュラム全体のねらいと当該授業の目標、子どもの実態などの理解を促し、実践後には、教師とともに振り返る時間を設けるなどが必要となります。京都市の学校が開発・蓄積してきたコミュニティ・スクールの実践は、カリキュラム・マネジメントを支える強みです。さらに、教育行政からの支援も積極的に引き出すべく、学校評価とカリキュラム・マネジメントを強く関連付けて学校のニーズを明確化し発信することが求められます。「社会に開かれた教育課程」という学習指導要領の理念は、このように様々な人々の協働によって実現されていくものです。校長は校内だけでなく地域でもリーダーシップを発揮することが期待されています。

カリキュラム・マネジメントは、学校の実態に応じて、各学校が協働的に「創り続ける」「動的」な営みです。「正解」を求めるのではなく、各学校なりの「最適解」の模索を、同僚間だけでなく保護者や地域、児童生徒も巻き込みながら、続けていただきたいと思っています。

<引用文献>

- 白井俊『OECD Education 2030 プロジェクトが描く教育の未来』ミネルヴァ書房, 2020
田村知子・村川雅弘・吉富芳正・西岡加名恵(編著)『カリキュラムマネジメント・ハンドブック』ぎょうせい, 2016

最後に（2年間で振り返って）

本報告書の冒頭にも記載したとおり、カリキュラム・マネジメントは、まったく新しい方法を導入することを目的とするものではありません。むしろ、これまで各学校で取り組まれてきた教育活動の質の向上を図るための様々な取組を、改めて見直し、整理するといった意味合いが強いものです。

しかしながら、多くの学校では、「新しい課題（取組）が出てきた」「どのように取り組めばよいかわからない」など、不安の声が多く聞かれました。教員の働き方改革が喫緊の課題となる中、カリキュラム・マネジメントに取り組むために、超過勤務が増えるようなことがあれば、本末転倒です。そうした危機意識のもと、教育委員会主催による、全市研修の開催や全教職員へのリーフレットの配布などに取り組んできましたが、なにより学校の先行的な実践事例が必要と考え、本調査研究事業に取り組んできました。

また、本調査研究事業では、田村知子教授（大阪教育大学大学院連合教職実践研究科）、廣瀬忠愛教授（京都橘大学教職保育職支援室）に参画いただき、幅広い視点から指導・助言をいただきました。専門性の高い指導助言はもとより、「カリキュラム・マネジメントは動的なものである。プロセス自体が成果と考えて取り組まれてよい。」「（本調査研究事業に取り組むことで）これまでに見えてこなかった各先生のよさが見えてきている。お互いに感謝の言葉を交わされるなど、同僚性が高まっている。」など、時に温かい励ましの言葉をいただけたことは、指定3校の先生方を勇気付けるものとなったと思います。

指定3校の先生方から、教職員のモチベーションアップにつながるよう、抱負を含めて報告いただきました言葉を紹介します。

葵小学校「自分たちが実践したことを喜び合うことは、モチベーションや原動力となり、改善にもつながる。これまでは、対面の発想しかなかったが、リモートにより全国の先生方と切磋琢磨できる良い機会が得られた。発信しながら改善し、新しい目標を持つことで、これまで自分たちで気付くことができなかった価値に気付いていきたい。」

太秦中学校「先日、複数の市立中学校の研究主任同士の関わりを持つことを目的として、Zoomで交流した。学校同士で交流をすることは、モチベーションの向上にもつながる。働き方改革が進む中で、教職員の負担感を上回るような充実感がないとしんどくなってくるため、教職員自身が頑張っている成果を感じられるよう工夫していきたい。」

向島秀蓮小中学校「何で手ごたえを感じることができるのかについて、悩んでいる。とにかくがむしゃらに取り組んでいることは間違いないが、喜び合う際に、何をもって喜び合うのか、基本的なところが難しい。子どもの変容が見られたときは喜びを感じるが、頻繁に見られるものではないため、発信することの大切さを改めて実感している。単純に、喜ぶポイントを提示することも必要であり、学校評価のアンケート等で喜び合うことができればよい。」

社会の在り方が劇的に変わる Society5.0 時代が到来します。また、新型コロナウイルスの感染拡大など先行き不透明な予測困難な時代にあって、新しい時代の学校教育に向けた取組が大きく進展しています。すべての教職員がそうした環境の変化を前向きに受け止め、生涯を通じて学び続け、子どもたち一人一人の良さや可能性を最大限に引き出すため、主体的な学びを支援する伴走者としての役割を果たしていただきたいと思います。

文部科学省指定

「これからの時代に求められる資質・能力を育むためのカリキュラム・マネジメントの在り方に関する調査研究」実践校等一覧（令和元年度～令和2年度）

■京都市立葵小学校

校 長	市村淳子
教 頭	忠谷嘉人
研 究 主 任	檜原貴博

■京都市立太秦中学校

校 長	今枝潤之輔
教 頭	岩本公作
研 究 主 任	中居里美

■京都市立向島秀蓮小中学校

校 長	上野政弘
副 校 長	地阪優子
教 頭	増田茂樹 太田美佐和
研 究 主 任	目黒詩子

■京都市教育委員会

学校指導課長	太田晴畝
担 当 課 長	文田尚徳
首席指導主事	安村俊輔
首席指導主事	吉川康浩
専 門 主 事	畑中一良
課 長 補 佐	杉本照代
初等教育担当	日高竜志
中学校教育担当	奥田百合愛

（順不同，令和3年3月時点）

「カリキュラム・マネジメント実践報告書 令和元年度・令和2年度」令和3年3月発行

本書の作成，また各実践校の実践研究や成果・課題等について，指導・助言をいただきました国立大学法人大阪教育大学大学院連合教職実践研究科・田村知子教授，京都橘大学教職保育職支援室・廣瀬忠愛教授に厚く謝意を記します。

■編集・発行・問合せ

京都市教育委員会学校指導課 TEL 075-222-3808